明治四十一年五月十五日增刊（毎月一日發行）
明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可

女子文壇

夏期増刊

夏すがた

四年八號



Digitized by Google
Original from HARVARD UNIVERSITY


デパートメントストーア
三越呉服店
和洋巻莨一切
シガー
鞄
靴
折鞄
旅行用化粧品入一式
時計
指輪
寶石類
ブローチ
其他
舶來文房具
諸大家ノ繪画陶器漆器銅器七寶其他新式ノ日用食器類一式
呉服
洋服
太物
子ル
セル等ノ新柄品
香水
香油
石鹸
白粉
齒磨
口紅
傘
履物

室の靜けさ



大江原色版部製版

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
HARVARD UNIVERSITY

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

四十一年度は益々束髪の大流行を來たす可し

上品なる束髪を望まば必ず前髪じんとして此

ヘヤロールを用ひらるゝ事を諸孃方に勸告す

米國製

束髪前髪じん

○ヘヤロールは今や歐米に最も流行しつゝあり。從來の毛髪製品は彼の忌む可き病患者の遺髪等の混りある憂ひありて衛生上恐るべきは勿論常に頭部にかゆみを起し果ては禿げる心配等の事あれど此ヘヤロールは細微なる金線にて製し優美なる絲網にて覆ひあれば毛を損じスベリ出す事なく且つ軽量なれば空氣の流通宜し故に「フケ」を生せず伸縮自在なれば大小の前髪になづみ殊に腦病又頭痛持ちの方には最も有益の新輸入品なり



ヘヤロール



●特に大形（十二インチ十五インチ）御望みの方はハガキにて御照會を乞ふ

○ヘヤタイは束髪用の元結なり◎本品は從來の元結の如く髪の根元を一々結ぶ要なく隨て髪を解く時にも一々切り取る手數もなし且一度使用する毎に不要にならず一本のヘヤタイは毎日用ふるも數十日間の使用に耐ゆる軽便にして徳用のものなり束髪には必ず御試用を希ふ　▲定價半打十八錢一打卅五錢

定價一個（普通十インチ）卅五錢送料八錢

輸入元　東京京橋槍屋町一　日加商店　振替貯金八六六九

特約店　東京日本橋區橘町四御園おしろい本舗　丸見屋商店

大阪東區南久寶寺町婦人小間物問屋　小栗小三郎

販賣店各地和洋小間物化粧品店

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

世界唯一

痳病消渇の根治新藥

痳滅（りんめつ）

痳滅は最も進歩したる最新の痳病消渇即治模範藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新藥を主劑とし是を內服して痳病消渇の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち滅殺する處方に基き製劑せし新藥に付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず誓て根底より根治するを確證す但し彼の舊式洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者豫め之を諒せよ

藥價 壹劑壹圓拾錢 特別製貳圓拾錢 郵券代用貳割増しの事

專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

色白特効 ペーアス石鹸

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

此石鹸は世界第一等の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず曾だ單に其主眼たる特効の一二を揭げん皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質を治するは此石鹸特有の神効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薰るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する內國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ（昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個荷着せり速に御注文を望む）

輸入一手專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

癩病根治新劑

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多の研究を重れ數千患者の實驗に徵し苦辛經營の末今回始て完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調製せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚説に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絶し生涯永久の榮華を完ふせよ、輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す、藥價送料共壹劑五圓拾錢特別製分拾圓拾錢着金即刻小包密封送る

梅毒根治新劑

本劑（藥名ドクトル）は幾多の研究實驗を重れ多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一のばい毒根治特効新藥なり故に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症（即ちばいどく。ひゑ。かさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。痔毒。ろいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等）ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて誓つて根治することを確證す從來醫療賣藥等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ。藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢着金次第送藥す郵便切手代用貳割増しの事

●以上二藥專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

眞正極秘 粹珍書案內

望の人郵券四錢送れ直に送呈すべし披閱忽ち愉絶快絶眞に粹士必讀の珍書案內

申込所 東京市下谷區西黑門町廿番地 東雲堂書店

數年難治の慢性胃病を根治し
消化機能を強壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑（即ち重曹、マグネシヤ、苦味劑の如き一時おさゑムチスカシ的舊式賣藥のみにして未だ曾て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる斬新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全にし消化機能を強壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病强健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

（藥價）壹劑四拾貳錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割增し

新輸入 美容料 肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女の間に最新流行の發明藥にして如何程色黑き男女にても特別製の劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製は壹圓八拾錢

以上貳藥**專賣元** 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を寄せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滞りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滞りの古血及**惡血毒血**を一掃するを確證す但し本劑は其奏効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

（注意）本劑の**大盛**を羨み近時種々怪しき無効な**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんを乞ふ



腋臭 わきが 根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓廿錢著金即刻送藥す郵券代用必ず二割增の事

以上貳藥**專賣元** 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY



ケーバ香水
フランス製
全世界を通じて
最新流行品
本品は現今貴婦人
紳士方の愛用品
「フランス」上流社會は
ケーバ香水の高尚なる
匂を愛せらる
定價 大瓶 金壹圓
小瓶 金廿五錢
化粧品直輸出入商
東京日本橋區橋町二丁目
竹間商店
長電話浪花一六一四番

東京市各女學校本年の卒業生（六）



（麴町内幸町　成田寫眞館撮影）

學習院女學部卒業生

Digitized by Google
Original from HARVARD UNIVERSITY

東京市各女學校本年の卒業生（七）





（上圖）日本女子大學校卒業生
（下圖）日本女學校卒業生

Digitized by Google
Original from HARVARD UNIVERSITY

東京市各女學校本年の卒業生（八）



私立東京高等女學校卒業生



私立上野女學校卒業生



私立成女學校卒業生

Digitized by Google

Original from
HARVARD UNIVERSITY

東京市各女學校本年卒業生（九）



私立女子學院全科卒業生



私立女子學院本科修業生



私立淑德高等女學校卒業生

Digitized by Google
Original from
HARVARD UNIVERSITY

大日本淑女學會

▲御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする方は、本會におはいりなさい

▲本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義録を發行します。講義の親切丁寧なことは云ふまでもありませぬ。新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法をとります

▲卒業は二ヶ年で會費も低廉であります

▲會員には講義録の外『姫百合』と云ふ美くしい躰裁の利益になる女學雜誌を毎號無料で進呈いたします

會員募集

講義録は何時にても一號より送る

本會の講義録

▲大版三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は專門女子教育家也
▲科外講師は博士學士廿家
▲毎號科外講話を附録とす
▲純潔高雅の家庭小説あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期毎に修業證書を與ふ
▲講義録は貳ヶ年完結とす

◎詳はしい規則書は申越次第差上げます

◎東京神田駿河臺（電話本局三千四番）

大日本淑女學會

美術造花
通信教授

二ヶ月卒業▲遠國の自宅で老幼男女誰にても造り花▲和洋花かんざし等美麗に出來る卒業後は就職の便あり▲案内書附製品見本は郵券十二錢送れば直に呈す

東京四ッ谷區簞笥町廿八番地
美術造花傳習所

あざ
赤鼻

なまず●ほくろそばかす●いぼにきびの新療法を郵券封入御申越の方へ教示す

●東京小石川區久堅町五十八　池田兵三郎

洋畫講義錄

執筆畫伯
三宅克己先生
岡田三郎助先生
大下藤次郎先生
中澤弘光先生
外大家十數名

洋畫講義錄は水彩畫を始め其他油繪木炭畫ペン畫鉛筆畫肖像畫等すべて一切の洋畫に關する事を詳細に講述す毎號美麗なる挿畫數多あり、毎月一回發行、一年卒業、會費月卅五錢、詳細規則無料進呈

繪畫講習錄

執筆畫伯
川端玉章先生
荒木寛畝先生
寺崎廣業先生
梶田半古先生
外大家十數名

繪畫講習錄は日本畫の技術と之に關する各種の學科とを平易懇切に教授し如何なる初學者と雖も忽ちにして上達せしむ毎號美麗なる繪畫數葉を挿入す、毎月二回發行一年卒業會費月卅五錢、詳細規則無料進呈

新學期開始！

東京市麻布飯倉四丁目
大日本繪畫講習會

二大博士
發明

神經衰弱貧血頭痛ヒステリー依卜昆的里陰萎等通俗的症候解説療法攝生法根治藥詳説の雜誌をハガキで申込次第無代進呈す

肺病救濟

アドロフ博士新發見肺結核治療藥は醫界新紀元也我國に傳へ公私病院長醫家實驗の効果を確認せる全治報告根治廿七名の不思議療法詳説の雜誌を救濟の爲め無代進呈ハガキで申込め

東京京橋越前堀
樂天堂藥房

●にきび、そばかすきれいに取れます



妾事永らくにきび、そばかすにて人樣の中へ出るのにはずかしい思ひをいたしましたが去る大醫の奥樣に不思議な程きれいに取れる秘法を授けて貰ひ御友達にも知らしてあげましたが皆喜ばれるゆゑ今度皆樣に御知らしますゆゑ郵券封入て御照會あれ

東京市小石川區小日向町二番地
石原麻子

有効保險 前代未發

秘傳奇術

全壹册正價郵税共金四拾九錢▲郵券代用は四拾五錢封送の事

(目錄大要)神經衰弱の新療法●陰萎病を必治する新法●陰門の爛れを治する法●消渇を必治する法●頑癬の必治法●人造麝香の製法●上等香水製法●香袋製法●美顔クリーム製造法●音聲を清良にする法●齒痛即治藥製法●髪の脱落するを止むる法●化粧石鹼製法●西洋白粉製法●毛髪必生法●臭汗治法●白髪を染る法●毛髪の光澤を美にする新藥●齒磨粉製法●西洋梳油製造新法●にきび即治法●ほくろを落す法●ビツトル酒製法●夏日室内を爽涼にする法●羅紗類を汚せるインキ斑痕を除く法●白瓜を一年新鮮に貯ふ法●蚤を驅除する良法●氷を即時製造する法●百年長壽の奇法●生涯病に罹らざる奇法●人の生死を豫知する法●船中より海の底を見る法●百日眠らず體衰へざる法●抜毛劑新法●寢入たる者に答へしむる法●禿頭病必治法●寢入りたる男女の心中を知る法●白なまず即治法●五十の醜婆を二八の娘に變ずる法●脚氣病必治法●妖怪變化を見顯はす神術●人體不死の奇法●千里一足飛行の神術●盜人を見顯はす神術●女に惚れらるゝ藥法●硬き毛髪を柔軟にする法●思ふ女をなびかす藥法●堅き女の氣を狂はす藥法●陰莖を長大にする藥法●そばかす必治法●女を閨屋にて泣す神藥●夢に戀人と語る秘術●見染し女を手に入れる神法●待人來る神術●一生戀中變らぬ秘術●悋氣深き女を治する藥法●閨中の秘藥●即座に男精を増す法●毒蟲に螫れたる時腫ぬ特効藥●避食の仙術●神速に精力を强む法●即座陰身術●人を眠らす秘法即ち催眠術●顏赤く吹出物生ずるを治する法●過房を治する妙法●多情を抑制する秘法●色慾なき女に情を發せしむる法●記臆力を増進する法●女孕みの仙術●男女梅毒の有無を知る法●淫婦觀破の奇術●黑字夜光の奇術●老人終身黴取りの奇術●腋臭を治する法●色を白くする内服劑新法●寶丹の藥法●腹痛速治法●疥癬病の藥法●生たる鯉を遠國へ送る法●服喘を治する法●黄疸を治する法●鮫肌を直す秘法●味噌の損じたるを直す法●痲病ハ治法●月經の不順を治する法●痢氣の妙劑●齒痛を治する法●陰部の臭きを治する法●陰部の虱を去る法●にきびを去る最新法●頭髪を長くする法●毛生藥の最新法●梅毒必治の新法●便毒必治の新法●下疳を治する奇法●胃病の新劑●百日咳の妙法●肺病必治の新藥●中風豫防の新法●凍瘡の妙法●衣服に酒のしみたるを洗はずして落す法●火傷即治の秘法●シヤクリ即治法●卒を能くする新術●白髪豫防新法●七癜い鼠穴を塞ぎ再び明けぬ法●寢小便を治する秘法●頭瘡を治する法●耳だれを治する法●いぼを取る法●ょさを拔く新法●乳の出る妙藥●陰部の迷疥を治する法●虎列剌病療治簡易法●梅毒豫防の奇法●思ふ時目を覺す法●年齢により房事の度數●病氣前知の奇術●男女全體の色を白くし且つ艶美ならしむる法●苺酒を製造する法●富を造るの秘法●一時に數拾匹の鼠を捕獲する秘法●舊帽子洗濯新法●疊の汚染を落す新法●新しき鍋釜の鐵氣を止る法●簡易了顏術新法●衣服に油の付たるを落す良法▲以下數拾法略す(合計壹百四十法あり)着金即刻送本す

東京神田區五軒町拾九番地

專賣元 日新館商店

生殖機病特効新劑……(獨逸新輸入藥)

内服 ヨヒンビン

拾錠入壹劑 藥價送料共 壹圓九十錢 郵券貳割増

本劑は獨逸國伯林大學教授スピーゲル氏の發見に係る男女**生殖機不能**即ち**陰萎病**陽物無力、遺精、夢精、早漏、過房、元氣衰弱、老衰無力生殖虚弱手淫に起因する諸病早老者精液精

腎虚神經衰弱 益鉄乏不姙娠冷症 **快美**減少及び**短小者**

等に用ひ輕症は四瓦劑重症は八九劑慢性難症は拾參劑にて根治の目的を達せしむるに天下無比

可驚奇効ある最新發見藥也**精力を增進**し生殖器を强健にし

勃興して**淫慾**を激しく**發動**せしめ人生の最大**快樂**を得んと望む者は早く試よ峻烈偉大なる特効眞に**如電光**世にありふれたる誇大奇言を臚列する内地製無効賣藥と同一視することなかれ本劑の卓效は高名なる醫師に就て承合せば明白なり

一手輸入 專賣元

東京市神田五軒町拾九番地

日新館藥房

世界無比

最新發明藥

あざ

入墨は廿日ほくろそばかす、なまづ、いぼは拾日目に必ず美麗に除去すること**保險附**

新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治して假令顏面たりとも毫も**痕跡**を殘さず無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の**美質**を完うせよ來館者へは山の如き全治者の**感謝狀**及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に**世界唯一**の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なまづ、いぼ等を除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細に明記して申込あれ左すれば了其症に適應する藥を送付すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓(患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす)拾錢づゝにて郵券代用は貳割增し着金即刻小包郵送す

專賣元

東京市神田五軒町拾九番地

日新館藥房

Digitized by Google Original from HARVARD UNIVERSITY

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

秀才文壇 增刊 大附錄號

名家文欄

○文壇と人才……文學士 生田長江

○生命ある國文學研究……松原至文

○近世的の神秘夢幻……片上天弦

○傳染（小說）……小栗風葉

○秘密結社（小說）……吉江孤雁

○燈臺（小說）……西村醉夢

名家文欄

○アイヌの戀（小說）……眞山青果

○燒場の女（小說）……中村星湖

○唐がらし（小說）……岡田八千代

○由之助（小說）……小川未明

○朝鮮行（小說）……原田讓二

○風の日（小說）……矢部白雨

○勝老爺（小說）……柳川春葉



普く現代青年の文と詩を集めたる**新綠**は出でたり。野にある若き詩人の光焔宛ら虹の如きを觀よ、

○名家文欄は當今文壇の大家を悉く網羅して餘さず。これ陽春文壇の**大偉觀**なり。

紙數 二百五十頁

定價 金二十錢 郵稅一錢五厘

青年文壇

○短篇小說 ○美文

○寫生文 ○評論文

○新體詩 ○五行文

○十行日記 ○和歌

○俳句 ○スケッチ

▲口繪數葉優美▼

製本既成發賣

發行所 東京神田旅籠町一丁目廿三 文光堂

賣捌 東京堂○北隆館 東海堂○良明堂

Digitized by Google Original from HARVARD UNIVERSITY

東京市各女學校本年の卒業生（十）



私立日本女子美術學校卒業生



私立和洋裁縫女學校卒業生



私立奎文高等女學校卒業生

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

東京市各女學校本年の卒業生（十一）



私立女子音樂學校卒業生



私立東京音樂院卒業生



私立宇都宮女學校卒業生（栃木縣宇都宮市）

Digitized by Google
Original from
HARVARD UNIVERSITY

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

出版界空前之廉價

名家選評
女子懸賞文集第二
（紙數五百頁）
正價金三十五錢
賣價金貳拾錢
郵稅六錢

國學院學士 小森松風先生著
女子美文作法
正價金四拾錢
賣價金貳拾錢
郵稅四錢

國學院學士 小森松風先生著
女子言文一致文範
正價金四拾錢
賣價金貳拾錢
郵稅四錢

報知新聞記者 中村木公先生著
卅九年實地精査 女子遊學便覽
正價金三拾錢
賣價金拾五錢
郵稅四錢

○『玉蟲』○『朝ばれ』の兩書は賣切れ（増刷せず）申候

—（各書とも郵券代用壹割増）—

東京市京橋區大鋸町十三番地 女子文壇社出版 振替口座壹七貳九番（電話本局六〇七）

精力を增し快美を最大ならしむ

This remed is wonde rfully efficacious for imp otence deficiency of semen, weakness of spermato zoid, nocturnal eission, premature emission, non-development. weoknesse of nerve, and non-pre gnancy.

一時生殖器病界に一新曙光を放てる彼のガツセン氏のエレクトール機械療法にせよプロンセカル氏の臓器療法或はボール氏及びバーベス氏等の神經組織注射療法なれ科學的研究の進歩せる今日に於ては既に**陳腐**の方法に屬し其治効なきは**旭醫學士**に依り公表せられたる如く現代に未だ其良藥なきは最も遺憾とする處にして當製藥所が此にガーデン Garden を發行したるも亦故なきにあらざるなり：：ガーデン Garden は當製藥所主が嚢に大學卒業後專ら生殖病學の研究に任じ帝國先輩は勿論歐米**最新學理**殊に博士ゲルハルド氏シグムント氏ツアイスル氏等の研究に基き或は學理に或は實驗に幾多の研究を積み發見せる新藥にして其絶大なる靈効は**高田醫學士**の査定報告或は吉原病院副院長**赤倉**大先生の實驗報告其他服用者の禮狀殊に歐米に輸出せられ名譽の高評を博しつゝあるに徵し明なるを以て普通賣藥的奇言を臚列せずガーデンの

男女生殖器新藥發見

主効は **手淫房事**過度の害より起る **勃起力**減衰 **陰萎** 腎虛萎縮 **夢精** 遺精 **早漏** 精液缺乏精蟲缺乏精蟲衰弱 **短少者** 神經衰弱 **快美**減少不姙娠脊髓勞 理解力決斷心缺乏 **記憶力**減少考衰無力冷症身體虛弱等に用ひ輕きは一劑乃至二劑重きも三劑乃至五劑にて根治の目的を達せしむ又本劑は劇烈なる强壯藥なれば虛弱家は勿論無病の者と雖ども平素服すれば精神身體生殖器を强壯となして**淫慾**を著しく**發動**せしめ如何なる場合と雖ども身體精神生殖器を衰弱せしむる事なし又本劑には醫學士雨江口述**最近生殖病論**を無代にて附し服用患者に其病理の如何を告げ絶體根治を期せしむ

本書は最近學理により著述す〇價一劑二圓八十錢二劑五圓五十錢三劑八圓五劑十三圓送料内八錢清韓台灣卅錢外國卅四錢

日本發行所 東京向島小梅町百八十七番地 **松尾製藥所販賣部**

清國發行所 清國寧波府江北岸 **松尾製藥所販賣部**

妾事小供の時より薄毛にて種々の藥を試みしも効なかりし所洋行中なりし醫學博士令夫人より奇藥を得是迄の薄毛も濃くなり又毛の生へざりし所迄毛生へし嬉しさの餘り困る方に告たし 三錢郵券を添へ御照會あれ

東京市京橋區越前堀 **河村愛子**



やせる こゑる 法

希望者郵券封入申越あれば教示す

東京小石川久堅町 **池田博**

男女 ちゞれ くせ毛 赤毛

は何程の難毛も直に根治黑變し良き艶の出る奇術を郵券封入申込の方に無料教授誓て美髮にして差上げます

東京 麻布區材木町 **岩阪**

（丙の二）

Digitized by Google Original from HARVARD UNIVERSITY

坐ながら手數せず安心して買物の出來る法



輕便買物案内

今般本社にては愛讀諸孃の御便利を計り東京市内に於て發賣する**書籍、雜誌、文房具、化粧品、西洋小間物、玩具**其他有らゆる百般の物品を手數料申受けず總て**定價の五分引**にて御用達致しますから遠慮なく多少に拘らず左記の注文心得により御申込を願ます

申込心得

○注文

▲必ず▲品名▲大小▲形狀▲品質▲定價▲使用向を始め販賣又は製造元の番地名稱及び自分の住所姓名等を明細に申越下さい

▲送金と同時に振替貯金用紙裏面通信文記載欄に注文の用向を明細に記載あれば別に手紙又はハガキにて申越すには及びません

○送金

▲必ず注文と同時に定價の五分引に相當する金額と郵便小包送料又は鐵道運賃とを合せて郵便振替貯金又は爲替金にて本社へ送つて下さい

○見計ひ送品

▲賣店の名又は代價等不明のときは品名と大體の豫定金とを合せて御送りあれば便宜見計らひ精選買入れの上御送り致します

○送出

▲堅牢に荷造しまして小包郵便又は鐵道便、普通運送便にて送り届けます

○問合と宛所

▲買入依托に關する問合せは返信用切手封入又は往復ハガキに限ります

▲申込は總て「女子文壇社買物用達部」宛にして下さい

▲右の外諸學校の校友會誌を始め一般の印刷物及木板、寫眞版の製版をも迅速鮮明に御引受け可申上候

東京市京橋區大鋸町十、十一番地
（郵便振替貯金口座第壹七貳九番）
女子文壇社買物用達部
（電話本局六百七番）

Digitized by Google
Original from HARVARD UNIVERSITY

女子文壇

定期増刊 夏すがた 目次



女子文壇　夏姿　定期増刊

紀元二五六八年　明治四十一年五月十五日發行　西暦 1908

夏姿

女流作家

女流作家として世に立つ事は困難なことであらうか、何うかと心配して、女流作家たらずに居る女流作家がある、て、此の遠慮氣味が最も不可いのです、作家にならうと一念それに凝固ればなれる筈です、外の事は少しも顧るに及びません、其代り頭拔けた大々的勇猛心が要します命懸でなくてはいけません、大袈裟なやうですが全く藝術は命懸でなくては成功するものでありませぬ。

嫁入道具

一般の女の方には、文學も嫁入道具の一つ位ゐに心得て頂いて、而して愛翫してもらひたいものです、裁縫や料理は形の上の道具ですけれど、文學や倫理は形の無い道具です、昔は茶の湯や活花と同じやうに、和歌の道なども形の上の道具として貴んだやうですが、それだから形式的に流れろのです、文學は形式的のものではありません、感興を練り、情緒を美しうし、趣味を高める精神上の道具です、形の上の道具は忘れても、形の無い道具は忘れぬやうにして頂きたい。

誤字宛字

近頃學校の教育が簡易になつた所爲でもありませうか、文章は相當に出來て居ても、誤つた字、宛字を書く人は、べた一面にあります、世の新聞雜誌が誤謬を傳へることも一つの弊でせうが、諸孃も心得て誤字宛字だけは少くしたいものです、女は少しの事に注意してあると其人の人品が高くなるものです。

言文一致

所謂口語體の文章を平素使ふことは宜しいと思ひます、口語體だから卑しくなると言ふ人もありますが、それなら貴人の前へ出た時は、口で言はずに、文章で書いて出すかと云ふに、まさか然うではありますまい、言文一致の使ひやうによろのです。

五月（大）

日曜　三日　十日　十七日　廿四日　卅一日

八十八夜　二日

端午　五日

躑躅、藤

牡丹、開く

女學界の變遷

戸川殘花

我國に女學校の出來た初めは、女子師範學校と、基督敎女學校との二つてありました。女子師範學校は、凡てが極く眞面目てあつて、別段之れと云ふ程のことはありませんてした。基督敎女學校の方は、基督敎の主義が、日本在來の風習と異るところがあるので、極めて少數の一部の人達から非難はありましたが、格別の反響もありませんてした。

其後、間も無く出來たのが、巖本善治氏の明治女學校てした。是は今の言葉で云へば、ハイカラ式の學校て、此學校時代から、女學生の氣風が非常に變つて來て、基督敎の思想に、東洋流の詩人的厭世思想が加味した、一種の思想が生じて來まして、其頃まだ言葉はありませんてしたが、理想と云ふやうなことを唱へるやうに成り、其結果、一面に家庭を作つて實業を勵みながら、一面に筆を採つて、文壇を起たうと云ふやうなものも出るやうになりました。

それと同時に、當時の文壇は如何であつたかと云ふに、丁度私達同志が集つて『文學界』と云ふ雜誌を發行した頃て、島崎藤村、馬場胡蝶、戸川秋骨、及び故の北村透谷、樋口一葉等の諸氏、青年血氣の一團が寄つて、盛に戀愛などのことを書き立てたものて、それ等が女學生の思想上に、餘程影響を及ぼしたのであつたらうと思ひます、一時女學界か色めきたつて、不健全な思想が大分一般に廣まつた樣でありました。然し、女子師範學校は依然として眞面目に、基督敎女學校の如きも亦、左程の影響は無かつた樣に考へます。

其うち、明治女學校が火事の爲めに燒け失せましたので、同時に、一時驚く可き程、女子敎育が衰靡しました。基督敎女學校などの生徒までが、ずつと減つたことがあります。獨り虎の門の東京女學館のみは、非常に華美やかなことを仕出して、舞踏などを始めましたが、此學校の目的は、貴婦人——所謂レディーを

襲成てるのにあるので、女學界に別段の交渉はありませんでした。如斯女子教育が衰靡の極點に達した時に、今の女子大學校は創立されましたので、それから又氣運を挽回して、ずうつと今日に及びました。

女子大學校の方針は、科學的智識を授けるにあるので、決して生徒に不健全の思想を持たせるやうなことは無いのでありますが、扨、今日の文壇はと云へば、吾々の『文學界』時代のやうに、團體を形作つたものはありませんが、小說家とか、新體詩人とかいふ人達が、それ／＼矢張り戀愛のことを書き、或は詠つて居ります。けれども、女學生と呼ばれるものゝうちには、不健全の思想を抱いて居るものは、比較的少なく、却て世間一般の妙齡の女子の間に、或る一種の思想が流れ漂つて居るのではあるまいかと思はれます。然しながら、斯様なうちから遠からず屹度、かけ離れて何かしら、頭角を顯はすものが出るだらうと信じます。

要するに、我國女學界の變遷は、之を明治女學校の全盛期時代と、女子大學校を中心とする現今との二期に劃けて見ることが出來やうと思ひます。（在文責記者）

すゞしろ

内藤鳴雪

すゞしろも花にねびたる大根哉
二股と知らで咲きけり花大根
大根の花見て田打つ男かな
婢女の戀を咲きけり花大根
大根咲いて夕陽白し三河島

燈籠の祭

磯萍水

▲迷ひの琴

寂しい〳〵村のはづれ、深い〳〵森の入口に、一人の娘が住んで居た。

名はお花、その頃は十二、お父さんは森の樵夫で、お母さんはお家で杼を織つて居る。まことに音無しい娘で、親の謂ふ事をすぐきく、親孝行、お父さまや、お母さまのお手傳ひをする、木を伐りに行つたり、杼を織つたり、それは〳〵感心な娘。

一日の事、今日は織る杼も無いので、自分の小さい斧をもつて森へ木を伐りに入つた。

自分の力で伐れさうなのを、伐つてはたばね、たばねては伐り、だん〳〵奥へと進んで行く。

と、不と氣がついたのは、どうも今居る森の四下は、今まで一度も來た事の無い所、深いとは謂へ、自分の脚で歩ける所は、恐らく知つて居る此森、これはまあ、什麽した事かと、氣のついた時は、最う遲そい、歸らうにも路はない、行かうにも路は無い、可憐さうにお花は、この深い森に踏み迷つた。

小供心にもはたと困つた、其儘そこへ座つて了つた。風が梢から梢を渡つて行く、そしてさら〳〵と鳴る、お花は無心で風の唄を聽いて居た。

すると其風の唄の中に、何とも知れない音がする、……まじつて、……それにその音は、何とも謂ひやうの無い美い音だ。

美い音だ、美い音だ、お花はふら〳〵と立上つた。

音はだん〳〵高くなる、近くなる、よく聽えるやうになつた。

お花は堪らなくなつて、何處とも無しにその美しい音を追つて行つた。

▲山姫

ふら〳〵と當もなく、お花は美しい音に憧れて追ふて行くと、やがて出たのは、大きな松の木の下。

何千年經つたものか、妾たちが十人二十人をつて、手に手を連いで圍つても、迚も圍えきれまいと思はれる太さ、葉は重なり合つて雲のやう、梢は空にとゞきさう、まあ大きな松の木と、お花はまたしても吃驚

した。
近つて見ると、更らにまた驚くものがある。
木は洞になつて居て、そこには繪に見た天女のやうに、尊く美しさの限りも無いお姫さまが、これも繪にばかり見て居た琴とやらを彈いて居られる。
あの美い音のしたのは此琴からか、あゝさても勿體ない樣な美い音色。
まあ世の中には、這麼にも美くしい方のあるものか、神さまではあるまいか、美くしのお姫さま！。
お花は見惚れ、聞惚れて、たゞ茫然と夢のやうに、三時間あまりも居ましたか。
やがての事に姫さま、彈く琴の手をとめて、玉のやうな眼に、ぢろりと一目。



『まあお前は、飛んでも無い所へ來ましたね、こゝは人間の來る所ではありませんぞ。』
漸くお花も驚きましたが、
『ではお姫さま、こゝは何と謂ふ所で御座ます。』
お姫さまはそれには答えず、
『何と謂ふ所と謂つて、…人間の來る所ではありませんの、それにまあ、なぜ長く遊んで居ましたか、大變ですよ、早くお歸りなさい。』
『…ついお琴が面白いものですから。』
『不可ません、不可ません、早くお歸りなさい、こゝの三時間は、人間の世界の三百年、お家は大變になつて居ますよ。』
『まあ…。』
と謂つたぎり、何も謂へない、いきなり斧を取りあ

げると、何とした事ぞ、磨ぎすまして氷のやうであつたのは、赤く腐れて、粉々になつてけし飛んだ。

お花は泣きながら家のあるらしい方へ一散走り。

▲白い鳩

お花は餘りの事に涙も出なくなつた。家は影も形も無い、寂しい……村だつたのは、たゞ今唯見る繁昌な市、馬や車や、旗や煙や、お家のあつたと思はれる邊には、石造りの山のやうな家、それは見ず知らずの他人のである。

お父さまとお母さまは、何邊に居るかと訊いて見た、誰一人見向きもしない、皆曰ふ、那麽名の人は見た事もない。

お花は死人のやうになつて、また森に迷ひ入つた。何邊をどう來たか、また迷ひ來たつたのは松の樹蔭、山姫の洞。

『お姫さま、お助けなさつて下さいまし。』

ほろ〳〵涙、生體もなく泣き入る。

お姫さまも哀れとおぼし召されて、

『お泣きでない、お泣きでない、これが常時親の謂ふ事をきかない、親不孝者ならばそれぎりですが、お前の親孝行なのは天の神さまも地の神さまも、よく知つてお居でだから、安心なさい、私が助けてあげませうから。』

お花は飛び立つ嬉しさ。

『エッ、お助け下さいますか、お姫さま。』

『助けませう、舊の通りにしてあげませう、それには是から、雨の國へ行つて、そこに居る龍の吐き出す水と、月の都へ行つて、そこに住んで居る兎の持つて居る藥とをまぜて、……それから先は兎がよく知つて居ます、龍は無法者、氣をつけないと殺されて了ひますぞ、兎は音無しい、助けてくれます、迷ひの森の山姫から來たと謂へば、不可いやうにはして呉れません、さア早くお出でなさい。』

『有難うは御ざいますが、私にはその、龍の國や、月の都なんぞと、遠い〳〵ところへは行かれません。』

はたと困つたお花。

『行けるやうにして上げませう、さアこれに乘つてお出でなさい。』

と錦の袖をひらりと上げると、その影からぽつと飛びたつたのは、一羽の白鳩。

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

▲水盗人

白い鳩はお花を翼に乗せるや、風よりも早く、髮の毛の鳴るばかりに飛んで行く。

見る〳〵迷の森は黒い豆粒ほど、山を越え、雲をわけて、雲の奥の雲の奥、毒龍のすむと謂ふ雨の國へと着く。

大きな洞穴、山の腹の岩の穴の中から聞えるのは、雷のやうな鼾聲。

見ると、鹿のやうな角、馬のやうな顔、蛇のやうな眼、青い錆のやうな鱗、炎その儘の舌をペロリ〳〵、毒龍は今寢りをむさぼつて居る。

天上の一時は、人界の百年、お花は此儘龍の目のさめるのを待つと謂ふ事は出來ない、さればと謂つて、肝甚の龍が寢て居ては、水を吐いて居ないので、欲しい水をとつて行く事が出來ない。

お花はまた困つた、愚圖々々して居れば、三百年が五百年にも、六百年にもならうと謂ふもの、と謂つて龍は寢て居る、水はこぼれては無い、龍は何時目がさめてくれるとも見えない。

困つた、困つたが仕方がない、困りながらお花は考へた。

不と一策を思ひついた、洞穴の前や、右左は一面の枯草、それへお花は火をつけた。

折柄の風、天上の風、どつと吹き起つては堪らない、見る間に一面の炎の海。

寢坊の龍も有繋に吃驚した、熱くなつたから、目がさめると、自分のお藏へ火がつきさうだ、いやお藏ばかりぢやない、自分の體が危ないのだ。

驚いて水を吐きだした、火は忽ち消えて、草の葉には露。

直ぐと器へ水を酌んで、また、、、ひらりと鳩の脊に、風よりも早く、今度は月の都へ。

▲月の都

こゝが月の都だと鳩は謂ふ、見ると何となく美しい山も野も、川も森も、みんな銀色に光つて、眩しいやうだ。

兎さんの家はと訊くと、あの大きな高い桂の木のあるのが、それだと鳩が敎へる。

馳けよつて、柴折戸をとん〳〵〳〵。

『兎さんはお出てすか。』

Digitized by Google
Original from HARVARD UNIVERSITY

答はなくして、戸は内から啓いた。

『お花さんてすか、能う御座ます、私は最う何も彼も知つて居ます、お母さんやお父さんに逢はせてあげませう、さア此方へお入りなさい。』

連れて入つた一間には、壁に二個の穴があいて居る、兎は右の穴をさして、

『これを御覧なさい、お母さんもお父さんも居ませうね。』

覗くと、お父さんとお母さんは、お墓の下に寝て居ます、蒼い顔に、白い唇。

『まあ、なぜ死んで下さいました、お母さん、お父さん、花てすよ、なぜ死にました。』

兎は静かに、慰さめて、

『それでは此方のをお見なさい。』

左の穴の前に立たせる。

不思議とも不思議、家は舊の儘、両親ともに門に立つて、お花の歸りを待つて居る。

兎はお花の肩を叩いて、

『解りましたか、見ましたか、前のは今の貴女の身の上、後のは昔の貴女の身の上、貴女はどちらを望みますか。』

『兎さん、お願ひてす、舊の私にして下さいませんか。』

『宜しい、して上げませう、けれど私と約束を仕なければ不可ません。』

『何でもします、助けてさえ下されば。』

『ではお花さん、これからは決して仕事をしかけて、遊んでは成りませんぞ、それをしなければ、助けて上げます。』

お花は契つて其誡めに服した。

『宜しい、では龍からとつた水をお出しなさい、私の薬とまぜて、さア此今の穴、死んだ方の穴は閉いて了ひますぞ、この通りに、お歸りなさい、疾く。』

鳩の背にのせてくれた。

まへよりも疾い、あッと謂ふ間に、雲から山、山から森、ふわりと落ちたかと思ふと、家の前、怪しとも怪し。

時はまさに黄昏である、今日は一年に一度の大祭、燈籠の祭、家々の軒には今しも、先を競ふて燈籠がとぼされた、紅や、碧や、黄や、紫や、色とり〳〵の美しさ、天上の星を今こゝに見る、村は一面の灯火の海。

「あッ、お母さん、お父さん、よく健康で居て下さいましたね。」

「まあ、お花、よく歸つて來ておくれだねエ、遲いので、甚麼に心配しましたらう。」

「もう〳〵何邊へも行きはしません。」

それからは前にもまして音無しく、親孝行、何時までも、何日までも、彼の斧の刃の朽るまでもと、親子仲よく暮したと謂ふ。（完）

小品二篇

窪田空穗

百合根

物に倦んだ時は、椽に出て三坪ばかりの庭を眺めるのが癖になつてゐる。すると、一本の柘榴の根元、其所かと思ふあたりの土を眺めて、何うか成つて居はしないかと、限なく搜して見る。其所には山百合の根が五つ、土の下淺く、二列にして埋めてある。



去年の夏、常陸の海邊へ暑を避けてゐた一人の友が、土産に堀らせて來たと言つて、白い紙に包んで、いたはりつゝ持つて來てくれた。樣々の海邊の物語の中、自分の胸を動かした一つは、波近き丘の腹はてしなき綠の中に咲いて、靜かに搖いてゐるといふ其の山百合の花の姿であつた。其れは風の秋めいて來た夜、自分は友の歸つた後、灯火をつけて、艶に咲いてゐるカンナの側へ其の根を埋めてやつた。

秋の半ば、其の家を去つて今の家へ移らうとする時、眺め盡した三つ四つの草花の、もう末枯れかゝつて居るのをも移してやつたが、第一に堀つたのは其の百合の根、見ると白く痩せた淸らかな根は、埋めた時のまゝ少しも形を變へず、此所の黒く輕い土に包まれて、心なしか稍々力が衰へたやうにも思はれた。

寒く佗びしい冬も過ぎた。霜解けのほけ立ッた土も落ちついて、春の小雨に濡れて黒く濕ほつてゐる。今まで見えなかつた雜草は、置き並べたやうに俄かに青い芽を出して來た。すると、忘れるともなく忘れてゐた山百合の根、あれは何う成つてるだらうと、思ひ出して、そして頻りに氣に懸つて來た。

其れを呉れた友が訪ねて來たので、其の事を言ふと、

「僕ん家の、堀つて見るともうこんな芽を出してた、……大丈夫、今に芽を出して來る！。」

と言つて、柘榴の根元を眺める。自分も一所に、其の邊りを眺めたが、其れぎり何も言はなかつた……。

果して此の下に、青い芽を出してゐるであらうか？土は變つても、幾度び移し植ゑても、やはり芽を出してゐるであらうか？さう思ふと、土を堀つて調べて見ようとしたが、急に痛々しい氣がして、その儘止めてしまつた。

去年常陸の丘に咲いた花、今年は此所に咲いて、曾て友の眼に見えたやう我眼にも見えるであらう！春の日と、春の濕ひのある限り、其れにはぐゝまれて必ず咲き出るであらう！自分は何となきながら、力強くもさう恃まれて、そして折節に其の邊りを眺めてゐる。が、それから最う幾日、我百合は未だ芽を出さうとする氣勢も見せない……。

日記の趣味

（日記を書くに就ての注意）

吉野臥城

日記は社會の流行兒

四五年前までは文筆の士女か、特旨家にのみ愛護さ

れた日記が、近時に至つては一般社會の流行兒となつて、學生界は勿論實業界にまで重用されるに至りました。これ、甚だ喜ぶべき現象であります。

夫れは以前も、軍隊には軍隊日誌、官衙や學校や會社には當直日誌、一個の官吏としては巡回日誌と云ふやうなものはあつたが、是等は唯ほんの要項だけを摘記し、一目瞭然と某月某日に如何なる出來事があつたとか、何月何日何時には郵便物が幾通屆いたとか、今日は何の訓示があつたとか云ふ事さへ分別れば可いのです。ですから、用向一遍で、乾燥無味の記事の臚列に過ぎんのであります。

這麽乾燥無味な日誌は、私の茲に云ふ日記では有りません。然らば、甚麽日記でせうか。

日記の本質

私の云ふ所の日記は、公用の日誌ではなくて私用の日記であります。個人の日記であります。素より個人の日記と云つても、自分の動作のみを記すのではなく、自分の觸接した社會の事相や、感想やを記すのですから、廣い意味では社會の日記と云へるかも知れません。

彼の學生日記と云ひ、小僧日記と云ふも、畢竟は個人の日記で、唯個人の境遇からして假りに日記と名づけたので、軍隊日誌と云ふやうなものとは、全く趣を異にして居ります。

で、日記は、軍隊日誌其他の日誌のやうに、乾燥無味の記事の臚列に止まらんで、日々の出來事や感想やを率直に、而して趣味のあるやうに記さねばならんのです。趣味のあるやうに記すとは、後日になつて讀んで自分の面白いと思ふは云ふ迄もなく、他が讀んでも面白いと感ぜしめるやうに記すのです。まあ一言で云つて見れば、美感を與へる文學的の叙述ですな、之が即ち眞個の日記でせう。

日記の秘密

すると、日記は自分の備忘錄ではなくて、感想錄だらうかと疑ふ方もありませう。然り、日記は其日その

Digitized by Google Original from HARVARD UNIVERSITY

日の備忘錄であつて感想錄です。
既に日記は、其日その日の備忘錄であつて感想錄でありますならば、日常の細大を洩さず記し、公然の出來事も記せば秘密も記し、秘中の秘も記さねばなりませんから、他に見せる事が出來ない。ですから、『他が讀んでも面白いと感ぜしめるやうに記す』と云ふ事は、別に顧慮する事は無からうと思ふ方もありませう、然り。日記は他人の爲に書くのではなくて、自分の爲に書くのですから、左樣思ふのも無理はありません。が、自分の日記を他人に見せやうと見せまいと夫れは各自の勝手であつて、唯日記を叙記するの呼吸は、しかじかであると云つたのです。
今日の秘密は必しも明日の秘密ではなく、今年の秘密は必しも來年の秘密ではなく、今日秘中の秘と思つたことも年月が經つと案外秘中の秘でも何でも無い事がありますから、秘密と思つたことでも何でも率直に記して置くのです。左樣すれば、後年になつて當時を追想すると、却つて其秘密が懷しく思ふこともありませう。
秘密には無限の趣味がある。‥‥日記の秘密、あゝ此秘密は叙記に於て何の遠慮も要らないのであります。僞れる日記ほど、無價値て、苦痛を與へるものは有りません。

夏の園

屋敷の廻りに日照草が錯綴して、さながら紅白の絨緞を敷きつめたやうである。梅や杏の實は既に去り、今は稔りを桃に讓つて、葉隱れのこずゑに淡紅く色どつたうまさうな大粒が重味をもちて、やゝもすれば風にゆられて自然に落ちて來る。梨は靑くうなだれて、楊梅は最早紫色に霜を帶びて居る。そして樹々の木末の下は、果物の種に取みだされてゐる。掃溜に棄られた麥の粒や、大根の實や、枇杷の實から、一面に新芽を吹いて、丁度日傘の行列でも見るやうで、おのづから天の惠波の廣大なるを示して居る。

（松原紬窓氏「夏の田舍」より）

煙を見よ

人見東明

やがて晴れゆく灰白の
空にひとすぢ糸のごと
飛び去るつぐみ――快びれる
秋は氣重くうなだれて
心に映る。

老らくの憂苦にも泣きて
泣きぬるるぬれ葉の森の
淋しみを、――見よたつ煙を
かなたには髓の沛は
いぶるなり。

（人は燒かるるわれもまた
何時かは）さあれ（この脉の
斷えなばいかに）わななける
心の怖れひたぶるに
胸をば拐る。

しかすがに倦めるさまなき
鋸の音かすかに低く
木の髓の快びる呻び――
なやましき森には木こり
たゆむなし。

煙を見よ――快びり惱む
病人の瘦せさらぼへる
かほばせの仄かにうかび
憂れたげに沈みて見ゆる
眼のいろ。

やがて晴れゆく灰白の
空にひとすぢ糸のごと
煙はなびく、――快びれる
秋は氣重くうなだれて
心に映る。

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

近事

御慶事

高輪の宮に在しました常宮昌子内親王殿下には、去ぬる四月三十日の吉辰を以て、竹田宮恒久王殿下と御結婚遊ばされ、御式厳かに、宮中に行はせられた。申すも畏き事ながら、我が皇室のいや榮えて、竹の園生の葉分の風にも光添ふは誠に千代萬代の國の基礎、動ぎなき例を今の世にも仰ぐたふとさ。

招魂祭

例年の事ながら靖國神社の招魂祭に貴婦人とあがめらるゝ陸海軍將官の夫人方が、手づから參拜者を懇ろにあしらはれるのは、誠に他の見る目も心持の好い、美くしい事に思はれます。

今年の花

雪、嵐、雨、曇の間に櫻の花は散つて了ひました、晴れて櫻の盛りを見る日は殆んど無かつた、思へば櫻と云ふ花も薄倖な花です、運命にさからひかねて服從するのは單り人間ばかりてありません。

西洋料理

日本の料理は何處の家でも實地に行ふて居ますから、別に奬勵するまでもありませんが、西洋料理は未だ一般の家庭に行き達いて居ません、日本料理だつて隨分不經濟な事もあり面倒な事もあります、西洋料理も廣く行はれるやうになれば、もつと便利に簡易になるだらうと思ひますから、滋養に富める點、珍しい點に於て一般の家庭でも用ゆるやうにしたいと思ひます、それには諸孃が早くから稽古して置いて、成るべく大騒をしないて、簡單に料理し得らるゝやう心掛けお置きなさい。

接近の機會

男女接近の機會はます／＼多くなる許りてす、世間て男女接近の機會を恐れるのは間違です、接近しても眩惑したり、弄ばれたり、びくついたりしないやうに豫め覺悟して置く事が肝心です、男子の前でも、誰の前でも恐れずに、ずん／＼出て行く心の丈夫さを養ふ事が、所謂墮落誘惑を防ぐ第一要件です。

雜誌の勢力

雜誌の勢力は恐しいものです、幾許大きな學校でも二千か三千の生徒に過ぎませんが、幾萬と云ふ讀者を教育し感化してゆく雜誌の勢力は恐しいものだと思ひます。

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

當選繪畫









(1)東北の人（二等）
牛込區富久町六〇藤澤方
佐藤貞子

(2)村はづれ（三等）
陸奥三戸町大字在府小路町
田島まつ

(3)たけ狩（四等）
豊橋市停車場前山中鎌太郎方
加藤芳子

(4)とりいれ時（五等）
豊橋市中八町戌六九番戸
臼井津奈子

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

▲規定　本欄は他の各欄以外の一般の文章を採録す、二十四字三十行以内、用紙は半紙又は罫紙、一人一章に限る事、投書締切は毎月十五日、賞品は甲種懸賞規定に據る。



美文

編輯局選

二等　○おもひで

函館元町七一　山田くに子

障子を締切つて居るので、たゞ音にのみ霰が降つて居ると知られるだけ。こたつの火の暖かさに、頰がぽつと成つてうつ〳〵縫ひものをして居る、手がたるい様にも思はれる、外にはしきりにバラ〳〵戸だの板だのうつ音がして——。

すぐとなりの小學校から、夢の様にヲルガンの音が流れてきて、心のどこかに響をあたへる——とふるふ様な——幼い聲が湧き出す様に——

四年の月日もろともに

と——それは〳〵何とも云へぬ心の底？深いおもひでの絃にふるふてつたつてゆく〳〵——。

卒業が近いので、多分その生徒が習つて居るだらう：……とこう思つて、胸がせまつて、はりの手を止めて聞き入つてしまう。

朝夕むつびかたらひて、夕ぐれおそき春の日や、いと更け安き夏の夜も、もみじの秋や雪の冬

たのしき時もうき時も、慰められつ慰めつ、たのしく君とすごしけり

句ごと〳〵が、ひし〳〵胸に答へてくる。

聲の餘韻が長く引いて、其たえま〳〵に霰の音がバラバラと聞える物靜かさ——と云ふよりは物あはれさは、私の胸にくり返される、昔の追憶の糸を亂して、あつい頰には涙が流れて居る。

卒業生！あれを習つて居るのはたしかに此、卒業すべき生徒だらう、——あゝあの人たちはどんな氣がしてあれを歌つて居るだらう。忘れもしない今から三年前自分が小學校を卒業する時、あの式場で歌つた歌、たしかにあれだ。

共に習ひし年月の、其の苦しみを忘るなよ

こゝまで歌つて同級生一同の目に、きら〳〵と涙の輝くのを見とめたのであつた。

たへしのびつゝつとめなば、まとのねらひのはづれめや、岩をも透す心には、かたきもかたき事やある

何と云つてよいかわからない、强い聲が耳にひゞいて自分は必ずまとのねらひをたがへずに、此學校、此先生に對する恩の萬分一を報ひなければならぬ!!とをののきをおぼへて居た。

つとめふはげめ世の爲に、ほまれの花を世に咲かす時をいまよりまち居らん——。時を今よりたのしまん——。

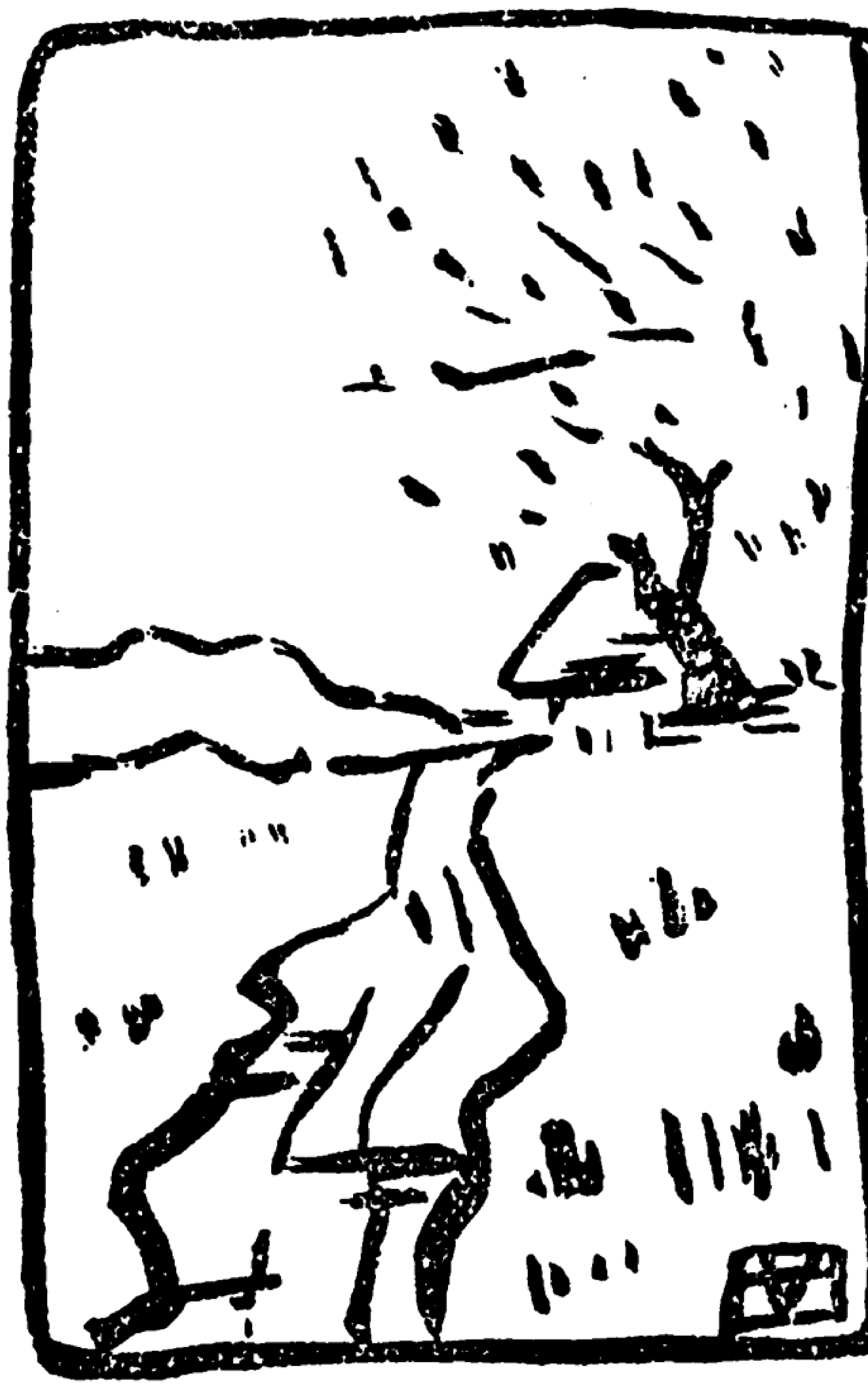
歌ひ終つて式がとじられた、もうこらへ切れなく成つて、頬に涙がしきりに下る、受持の小口先生が、「今一度教場へと云ふので、泣き乍ら教場へはいつた、先生は静かに「例へ此學校を出たとても、此まゝの心で、どうぞ無邪氣に人と成つてくれ。此世の風波がいかにあれて居ても、それは見事にのり切つて理想の岸についてくれ、風波の渦に巻きこまれぬ樣、美しい名を彼岸に上るのを、‥‥それをたのしみに私は待つてゐる」と‥目をしばたゝひておつやしやつた其御聲。今も耳にしかと殘つて忘れぬさゝやきをあたへるけれど――あゝ身は卒業後すでに三年、早くも世の風波にもまれ、生に倦んで世をはかなんで居る――あゝ恥しい、すまない!!との思が胸一パイに成つて、

まけては成らぬ!!彼の昔の、無邪氣なりし、眞正の意志と、今の我にさす感情の影とは、ほどよく調和させて、そこに堅い信を形造つて、あの先生の御恩に！報ひねばならぬ、宇宙に我は眞に存在させねばならぬ、とこう自覺した時、ふたゝび底から湧く樣に、

四とせの月日もろ共に――

とくり返してうたふ聲が何とも云へぬひゞきをつたへて、廣く成つた胸の中に、ゆるく〳〵流れ入る。鼓の音はぴつたりやんで、薄日の光が射してきて、天も地も静に〳〵此歌の、深い意味をさぐつて居る樣である。

人一倍の感應力の鋭い事は此一文にも現れてゐる、卒業式は女の身に取りて誠におもひ出のたれとなるもの、而かも此の日、此の時、此の人が感じは人一倍鋭く深く心の底から動いてゐる、周圍の光線も能く其感じと一致して現はれてゐる（評）



櫻の里　茨城縣　坂野ちれ子

三等

○若菜籠

攝津西宮 百一ノ一　春乃子

「姫樣お待ち遊ばせよ、いゝ事がムいますから」と數十歩後れた乳姉妹の八重は、菫だの蒲公英だのと頻に路傍の花を集めながら、私をよびとむるのであつた、

「いゝよ私こゝらで鳥渡やすむから」と私は手にした若菜の籠をソッと置くと一面に緑にもえて居る小草の上へ、袂のハンケチを布いてフワリ座つて零れた友禪とかさなつた二枚揃ひの格好のよい時色縮緬の袴の近

くへ片手をついて、ぢつと都珍しい廣野の景色にあかず目を放つた。

彼方の森から一筋細くうねつてくる絹の紐のやうな流れは、私の膝の近くで巾ひろくゆるくなつて幽に小鈴をふるやうな響をたてて居る、心付くと其水面に大きなリボンを掛けた私の下げ髪の影法師が落ちて居る、

「これ、私の心盡しの花束よ、貴姉は今日の此野邊の女神、八重が恭く捧げてよ」と八重はいつか造つた花たばを私の兩手にもたせ、頭にも添ゆるのであつた、

「マア可笑な女神ネ」と私は笑ひ乍ら下のせゝらぎを覗くと其處でも花をかざつた私の姿がある、途端、ひらりと何か空を舞つて水に落ちた、見れば私のリボンであつた「アレ」と八重は忙はしく汀によつて跪き、手をのべて一心に拾はうとする、さしのべた頸筋はくつきりと白く細く、肌繻絆の桃色と牡丹を白抜きにした絣縮めんとあらい籃縞のお召の襟とをかさねて、春風に少しそゝけた島田髷のあてやかさ、うつすりと紅さした兩の耳朶は宛ら淡色珊瑚のやうである。

「いゝのよ八重」と私は呼んで、「一寸お前之れお持ち」、「はい」と何心なく手にすると、私は二三歩退り乍ら、「お前こそは野の女神、眞に美しいわ」とニッコリする、

「マア姫樣たんとおなぶり遊ばせ」と優しく睨む目元から笑ひが零れて果は葩より美しい唇を綻ばして、これも莞爾する、

二人の笑ひ聲は霞に消えた。

白い蝶が二羽、ひら〳〵と四つの袂をくゞつて舞つて若菜の籠の上にとまるのであつた。

實に美くしい、まるで繪に描いた夢を見て居るやうである（評）

四等　○奉公第一日

布哇オアフ島ワイパフ本願寺附屬小學校内　上土井定子

白う塗つた垣越に隣の純白婦人と內の半白婦人とが何やら喋々と頻りに話して居る、同じ垣根の洗濯臺に敷布を洗ひつゝ聞くともなしに聞いて居る妾、ハア何を話すんだらう、今朝妾が來たんだから時々ワヒチの語がわかる、そして指を此の方へ向けるから、それを何とか彼とか話して居るとは妾が早合點、的中したやら今しバケットに水をたゝへて敷布をそゝいで居ると、臺所の方より、ワヒチ〳〵と呼ぶ聲、エースといつて顏を上げた時は、隣の婦人の姿も影も見へなかつた、泡の着いた手を鳥渡洗ふて行けば、何やらヂャビ〳〵主婦の言、問ひ返しても更に不明、ア、困つた耕地三ケ月間の修養も格別功なきものかな、こんな時に三國會話の本でもあつたらと悶ゆるも可笑、主婦は微笑してユーノーサーベと云はれて、初めて息の根通ふ心地、漸くアイノーサーベと答ふれば、あれよと指して示す

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

胡椒の木、ハア胡椒の事かと笑ひ乍ら五つ六つ摘みとりて與へてホッと一息、忘れじと繰りかえす胡椒の英語…………ふと床の下をのぞけば水の欲しそうな鶩鳥、長き首をズット突延して重き躰をドテリ〳〵二三歩進む、其後の方には一羽の牝鳥、多くの雛を連れてコーク〳〵と餌を求めて居る、ドアーを開いて桶に清水をたゝえて遣つて氣轉顔、鳥は嬉しそうに水を飮むと向ふのキャベの木の下に繋がれて居る斑犬が目を光して不平面、此奴空腹と見へる、オヤもう十二時そこゝに汽笛の音が聞へる、臺所からワヒチと呼ぶ聲、ハチ此度は何かと胸をさすつて行つて見ると、上陸後第一に覺へたカウ〳〵である、カウ〳〵とは布哇語で食事、テーブルに向へば主婦は二つの鍋を指して、ユーカウ〳〵と言ひ捨てゝ奥へ去りぬ、ハテ何の御馳走かビーフにライス、オヤ妙な香がする、てもうまそうな、フォークのさきに突かけて食ふとすれば勝手が悪い、アゝどうしても箸がいゝなとつぶやき乍ら食事を終へて食器を洗ひ、ヤレ一休みと芭蕉の葉蔭に行くと庭園一面青芝生、やをら座すれば心地よやの春風、さや〳〵と若葉の緑を動かして面を冷つとなでる、醤油樽に咲き亂れて居る秋海棠の花、危くもひら〳〵と動いた、醤油の空樽は布哇の盆栽器として青や黄色にペンターて塗つて愛せらる、今しも美しく塗つた樽の中に薔薇の花が綺麗に咲いて居るのを眺めて居ると、亦もやワヒチ〳〵、エースと云つた其聲が太とすぎて花輪の中に働いて居た蜜蜂が、驚いてブーンと飛んだ拍子に、妾も驚いた、オヤ今度は何をさせるのかしらん、一挺の小さい機械を持つ來て、ユーハナ〳〵と庭園の芝生を切つて見せる、コイツ奇妙な、ハナ〳〵ハナ〳〵とは仕事の事、どれ一つ遣つて見む、カーを押せば二つの車が轉んで三つの包丁が廻ると草の切れる面白さに餘念なくやつてゐると、後から靴の音、振反つて見れば主人公、腰を屈めて禮すれば鳥渡會釋して内に入られると主婦の笑聲が屋外に洩るゝ、夕陽鮮かに雲の峯赤く色どつた頃、グッドバイも投げる様に言ひ捨てゝ奉公第一日を終へて歸つた。

異風異俗、内地に居る者には面白く讀まれる、毛色の變つた美文として珍重するに足る（評）

五等　○ねられぬ夜

若狹國遠敷郡今富村伏原　津田汐汀

いつもの如くお母さんと脊中合に寢たけれど今夜は何うしたか穏に眠りに就くことが出來ない、山村の夜はいたく更けた、更けるに從うて妾は色々と思つた、裏山に薪取り！妾の職業は唯これきり、朝起きて飯を焚いて、木を伐りに出懸けて、さて唄の一つも歌ふとそれでもう單調の日は暮れて行くのである、一月一年

十年は時の間に過ぎて、何一つ新しい事も仕出來さず何一つ新しい考へも起さずに、其儘山中に老いて了つた人は幾何もある、否、お母さんにしろ、他の人にしろ、皆左樣だ、妾もまご／＼して居ればその一人に爲つて了ふのだ、

思はず太息を吐くと『何うした、まだ寢んのかえ』とお母さんは怪んで問はれる、『何だかどうも眠れなくて』『早く寢るが好い、明朝はまた、朝から裏山へ木を取りに行かねばならぬからね』、答も聞かずにお母さんは再び深い睡眠に入られるのである

妾はこつそりと身を起して、其儘下駄を引懸て、外に出た、月はとうに西に落ちて夜は眞の闇にあるけれど星が降るやうに出て居るので、遠くの山、鎭守の森などが微かではあるが、それと指點される樣に見えて居る、妾は晝間腰を休める石に身を凭せ懸けて、いつもの唄の調をも出さずに沈默して空を望めた、空にぎらぎらと輝く星の數は、濱の眞砂の限り知られぬ、と、見ると、其中の一つの星は淡青い光を引いて南へ流れた、あゝ此の大空の星でさへ、何時何れが流れ墮ちる事やら分らね、况して果敢ない人の運命は………

前半よし、後半よからず、作者は後半が得意で、前半は不用意に出來たかも知れぬが前半の方が好い（評）

秀逸

○得知らぬ罪　羽後　さゆり子

淡青色の空はおつとりとまだ暮にはよ程間があらうと思はれるのに空に只一つキラリとひかる乳色がゝつた夕星が美しくかゞやいて居る。私は今日も叔母樣の家からこつそりぬけ出て、さき亂れた矢車草を手折つて此處青原寺の裏手の墓場に遠く來し方を思つて居るのです。

世になき母樣の御名も芳とか申せしとの事、今此處にある御墓にも「長沼芳の墓」と記してあるもの、若しや……否、たしかに母樣の、私の母樣の奥津城に相違ないあゝ母樣はとむらふ人もない此の冷たい土の下でどんな夢を結んで居られるやら……。私は冷たい石にひざまずいて心ゆくばかり合掌、念佛をとなへました。

思へば十餘年の昔、私のまだ五ッ兄樣は七ッの年であつた母に愛でられて育つた自分は其時も母が乳房を上なくよろこんで居つた、丁度櫻のはら／＼散るやよひの夕であつたと思ふ、母樣は私を抱きしめながら「八重ちやんや、私の可愛いやあちやんいゝ子」つて私の顔をじつと見つめられて「やあちやんは母樣すき」「あゝ私母ちやん一番すき」「そう、いゝ子可愛い子若し母樣居なくなつたらどうするの」「あたいいやだワ母ちやんいくのいや／＼／＼」つて何がなし泣いたら母樣はパッタリぬれた頰をすりつけながら「おゝ此んな可

愛いやゑちやんをおいて誰が……、母ちやまはいつ迄も八重ちやんと一緒に居ませうね、でも若し母樣が、死……死んだらお祖母樣のことよくきいて……お祖母樣だいじになさいよわかつて？」私は何が何やらわからずに泣きたくなつた、とワーッと泣く音がして兄樣が廊下を走つていらしつた、母樣は「勇さんど……どうして」「母樣又お……お祖母樣に……」兄樣は泣きじやくりなさる、と廊下の方で、「芳や芳……芳……」とけたゝましくおよびなさるお祖母樣の御聲……はいと母樣が涙をおぬぐひ遊ばす間に次の間からわざとらしい大い聲で「いつも〳〵小兒にわる智慧をつけて……だから内の子は皆剛性だよ」母樣は又私の手に涙をお落し遊ばした、其夜兄樣は私に此夜は八重ちやんはねむらずに母樣にしつかり抱かれておいて、いゝかへ、ねむつちやいけないよと云はれた、私は兩の手でしつかりお乳をにぎつてねたのたけど（兄樣は祖母樣の方にねかされるの）あゝ私は矢張あの夜はねむつてしまつたのだらうか、翌朝目をさますと大きい布とんに私は只一人ねかされて居た、其日から八重〳〵つて云ふ母樣は居なくなつた、私は兄樣から大變しかられた、あゝ私がねむつてしまつたので母樣は……わるいので……



春の粧　名古屋　きよし子

其の後兄樣は小さい頭をまろくそつて墨染の衣にかへて青原寺に入られた、私は叔母樣の家に引きとられた、もの心ついてから私は漸く母樣の事を知り得た、ある夕私は姓ゝ名も同じ此の墓名を見出した、何となくなつかしく若しやと思つて毎夕こゝにしのんで來ては花をたむけてわびつゝ泣くのである、あゝ私さへあの夜眠らなかつたら……あゝ私の罪はいつ消えませう、「母樣許して……」と私は又しつかとさだかに得わかぬ冷石を抱いてよゝとばかりに泣きました。

今少しつゞめる事が出來たら宜しかつた、元來小說じみて居るからでもあらうが、つゞめ得ればもつと好い美文になつたらう（評）

○桃　林

上總　ひさ子

夢かと聞けば夢でもない、現ときけばまた夢のやうな……　桃の香が濃くなるのであらう……。夕日がお寺の塔に傾いて、淡い光が平になる程土藏の壁は彩られる。夢の樣な響は其裏をめぐつて又ちよろちよろと、桃の林の右へ左へ、やがて巴橋の下から懷しそうに寂しそうに、あの姉樣のお墓のあるお寺の傍を流れてゆくのであらう。……　姉樣は五年前に都で亡くなられたといふ……。

姉様！妾は毎も其汀へ立ては呼んで見る。夢の樣な響それは姉樣のお聲ではないかしら、月のおそい夜、桃の枝ごしに映つた星は姉樣のお瞳、ちら〳〵と黑う流れる水の綾は姉樣のお髮と妾は無理にも思て居たい。花を流れる夕日の影は優しいお手をのべて燃える情の御胸に妾を抱きしめて下さるのではないかと、寫しゑに見るゆつたりしたお顏が桃の染めなすお化粧姿の幻となつては、お髮の黑きも偲ばれて妾は堪らずふるひつきたい程に懷かしい。……姉樣も痛く愛でられたといふこの桃林、お墓迄の路も狹に手向けの料と花さく時は逝かれた姉樣とは更々思へず、お顏は見ねど矢張り都に居られる事と西の空のみ懷しく、花が咲いてとお便り申したも幾度、去年も今年も。……否え此度よ姉樣は亡りはしない……と、妾は然うのみ思て居た。

御返しなくも、御俥の今日もやと、妾は日毎にかくて桃さく路に心が憧れる。——夢の樣な水の音、おぼろに暮れそめた桃の林を巴橋の方へ行く人や誰、あゝ姉樣！と妾はまた低う呼むで見た……。

作りすぎたやうて、一、二度は好んで讀んでも終には興味索然とする、眞の情が動いて居ない、文字の才が勝つて居る（評）

○歸省の前後

麻布　町田靜江

「姉樣」と、私が力一杯に行李の繩をしめて居る後ろで、聲がしたので「何」と、ふりむくと派手な友染のかい卷をかけた澄樣が、「明日は何時に」とおつしやる、「二番ですから隨分とお早いのよ」と云へばきつと門迄送つて下さるとの事。

澄樣は寄宿舍にお殘りなさる相、お家が北海道なので「きつと〳〵お手紙をね」と、繰返へしてお云ひなさる、そうして一つの室で、姉樣よ妹よと、辛い時、淋しい時に、慰めもし勵ましもするもの何れ何かの定めどう云ふものか僅か二週間位の、お休暇の別れさへつらいのです。

荷仕度も終へて、晩の祈りもすませ、「澄樣お休みなさい」と云へば、もうお休みなさつたと見えお返事がない、ソツト冷たい床に入つて、眠らふとすれば尙々目がさえてそれからそれへと、なつかしい家の樣子が胸に浮んで來る。お友達とお別れに泣いたあの土橋、私等の遊び場所であつた廣野、さては村長樣のお藏の前の一本櫻まで、七時十五分に上野をたてば四時間で高崎へ着くはづ、それから鐵道馬車がかれこれ二時間、もう明日の午後には三年振に家の人となれると、思へば胸は徒らにさはぐ許り、お土產は輝さんにはお約束のショールも編めたし、その上リボンも少女界もあるから不服はないはづ、邦ちやんの人形は、ほんとに氣に入つた、あんな可愛らしい眼の子が、居るものですか、隨分大きいからをんぶも出來るし、着物だつて拡

しい試驗の中を、一生懸命に縫つたのだから、それにしても、母樣のお癖、嬉しい時でも何かおつしやるから、きつと今度も「そんな無駄な事を」と、お云ひなさるに違ひない。其時にお小使をためてと、云ふたら何とお云ひなさるでせう。そして父樣と母樣の好物を出してあゝもう嬉しくて〱、車屋もおくれなければよいが。今一時がなつたから後は四時間、早く眠らなければいけないのに、今夜に限つてどうしても眠られない。澄樣のかすかなね息が聞ゑる許り、外は風もない和やかな晩です事。

今まで幾度も作られた材料であるが此文を讀むと又今更らしく歸省の前夜が思はれる（評）

○師走の空

尾道　宮本たき

奥樣の咳二つと聞えぬに、温き夢破られて、甲斐〱しく脊戸に出づれば、殘んの月流しに氷り、霜吹く風のひゆう〱と、吐息さへも冴ゆる寒空に、車井戸汲む婢女の身かなしや。

夏冬なしに朝湯の支度、これもお道樂の一つとやらなれど、水は荷桶に十一ぱい、凍りし庭に轉りて下駄の緒切るも水仕の業に馴れねばか、と折焚く柴に思をこがすも今朝のみかは。昔を今になすよしは難けれど、父君世に時めき給ひし頃は、人の上羨しとも思はざりしに、如何なる御怒に觸れてか、情なき大海つ大神の御手にからめられ、其を苦に病みて母君も風の心地のふと改り、加茂の邊水清き里に、身は取殘されて一葉舟。母樣臨終の御枕に、玉井の家を起してよ、兩親なければあれ、あの通り、と人に仇指さゝれては先祖の御靈にすむまじぞ、と御言葉は短けれど、涙に籠るは千萬無量。いかに飛鳥川淵瀬定まらぬ世とはいへ、流れ流れて其の末は、布子一枚の御奉公に、町内知れての氣難さ、御主を持つも又定まれる神の御令旨や。お年よりはずつとお若う見ゆるは、華美粧りの御德、お後添とは知れど、母樣と仰せられぬがいぶかしと伺へば、泥水の果でもか、と御口にもれし孃樣の、僅十二の明暮を、喜代ならでは御寢も遊ばさぬが可愛しうて身を粉に碎いても、と曇り勝ちなる十五の眉を、やうやう包みし憂袂、束の間も斯かる主に頭低げむは口惜けれど、翠帳の奥にも嵐は吹くもの、雨露のかゝらぬはまだ身の幸か、御推じ給はれいと。

こは歲暮持ち來し小娘が、師走の空の涙語りなりき。さてもあさましき宿世かな。

古風に書いてあるから一層同情を催ふす人もあらうし、適切に感じない人もあらう、（評）

○櫻草

靜岡縣　富永朗子

あはれやさしの花の姿よ、庭の置石のわたりにあまた咲ける櫻草に、朝夕の水そゝぐは、妾と妹とのつとめとはなりぬ。

かはゆき花、優しき花、美くしき花、さあれ其の姿のあまりに艶なる樣はなけれど、妾と妹はこよなき花と愛でつ。

とある朝なりけり、姉さんまた花が四つ咲いたわね、面白相に水そゝぎつゝ語る妹は、今年十二の幼子なるよ、見れば袖裾は早やしと／＼と霧にぬれて、可愛き少女の猶一層、あゝ艶なる樣よ。

姉さん、何か心配なの、と、妾の顏を見上げつ、姉さん心配があるなら妾にもきかして頂戴な、ねえ、妾姉さん一人がたよりだから、無邪氣たるべきかよはき少女子のかくまでに大人びたるは、

いゝえ、姉さんには何も心配はないのよ、もう大抵すんだから、仕度をして學校へお出でなさい、後はまた妾が片つけるから、

まだ早いんだわ、と行うともせぬ樣を見ては全く妾一人が便りなるべし。

あはれいとしの少女よ、唯一人の姉をたよりに、あはれ愛らしの妹よ、其の何處となく大人びたるを。

妾はひそかに泣きぬ。不幸なるはらからかなと、しらず妾等は兩親なき身なり。

○留守居の一時間　仙臺　白菊子

午後一時母樣は買物に行かれ妹は隣へ遊びに行つたのて、家には私と環(猫)ばかり、怠屈てたまらないから机に向つて女子文壇を出して讀む、はじめの頁からだんだん讀んでいつたが後はいやになつて面白そうなところばかりを拔いて讀む、面白ければ二度も三度も繰り返し讀んで、これ位なら私だつて作られる、などゝ考へながら讀んでゐると、がつ／＼足駄の音がして誰か來た、母樣には少し早いし、はた誰だらうと耳を澄してゐると「紙屑はありませんか」あゝ屑屋かと安心して「ありません」といふと「ビールの空罎はありませんか」と又いふ、無いと言ふたら無いんだからさつさと歸つたらよからうにうるさいと思ふて默つて居ると歸つて行つた、又讀み始めると、今度は障子をがりがりするものがある、何だらうとがらり明けて見るとタマだ、タマが爪をといで居るのだ、すつと手をあげるとあわてゝ椽の下へ逃げ込んで仕舞つた。戸をしめて本を手にした、暫くすると玄關の鈴がチリン／＼なるお客樣かしら、と立つて靜に障子を開けると、何だ馬鹿／＼しい遊びに行つた妹が歸つて來たのだ、仲好の花ちやんも伴れて來た、兩人とも赤いメレンスでこしらへたきやつちやんをおぶつてゐる、座敷へあがるとすぐに暖いお椽側へ出た、屹度飯事をするのだらう私も机に向つた、あまり大人しいから小さな障子の穴からそつと覗かうとしたがあまり穴が小さくて見えない、小指を入れて大きくして覗いて見たら、花ちやんはお客樣になつて、ちやんと坐つてすましてゐる、お

かしくてふき出し度くなつたがこらへてよく見たら、私が大切にしておく福壽草の花を根本から摘んで來て御馳走に仕様としてゐるところだ、障子をがらりあけて「お花を摘んでは不可ませんよ」と言はふとする途端、玄關ががらり開いて母様が歸られた。客間の柱時計がチン／＼と二時を報じた。

○春雨の途　伊豫　曉子

糸のやうな春雨がしよぼ／＼とふりそゝぐ朝、例の如くバイオリンの稽古にと家を出た。庭の彼岸櫻もちらほらと綻び初めた頃であるから羽織も脱ぎたい程であるけれども、病後の要心にそのまゝ雨合羽を上にきて宅から出た花賣りの少女につゞいて泥の町を歩んでゆく。かよわき双の肩にかゝる小籠には白椿にぼけ、松に菜の花がさき崩れて――細う／＼ふりそゝぐ雨に白椿一輪ぽつりんと泥に落ちた。清い／＼其姿！あゝ、遂に何れの人に足駄にかけられるであらう？あはれ落椿の重着のむし暑く加ふるに歩みにくいので徐ろに歩んで居ると花うりは十歩前になり二十歩前になりて、はては「花召せ」のよき聲も可愛い姿も往來の人影に紛れ込んでしまつた。



井戸　兵庫縣　玉田やゑ子

法正寺の前を右に折れて觀商場の前にかゝつた頃、ふと投函すべき端書を袂に入れておいた事を思ひ出し、探りとつて右の手にもつて歩んで居ると、後から郵便屋さんが來て自分を知つてゞも居るかの樣にわが顔を見て居るので、自分は妙に思つて居ると「端書をお入れになりますか」ときく、「ハイ出します」と云ふとしばしためらふて扨「おかまひなければ持つて歸りませう本局へ」と優しく云ふので、知らぬ人であつたけれども「ではお願ひ致します」と渡して終つた。すると「女子文壇社賞品係御中　伊豫國曉子」とかいた表書を見て何と思つたかやさしく微笑して「御心配には及びません私は取りあつめですから」と云ひ殘して雨の中を南へと去つて終つた自分は心配等少しもして居なかつたのに。

後から中學生が「あんな奴に限つて試驗なんか出來やしない」と云ひ乍ら自分の傍らをゆきすぎた。すると同伴の紳士が「だから駄目なのさ」とすます。何の事か知ら。やがて先生のお宅へ着いた。今日ていよ／＼お訪ひ申すと奥樣が出ていらして「あの一少し頭が痛むと申して休んで居ますから、ほんとうにお氣の毒ですけ

れども……」困難な半里の道を歩んで來た自分は聊か失望したけれども御病氣とあれば仕方もないので、「左樣でございますか、どうか御大切になされませ」と云つて外へ出た、春雨は小止みなくふりつゞいて居る、御門內の紅梅がはら〳〵と我が傘をすべつて地上に散りおちた。

○舍內の夕暮

長崎縣　稻吉濱子

今しがた舍監室の時計は四時を報じた。

午後の課業が終ると、皆樣は外出や御洗濯物にそれぞれ出掛け遊ばして舍內は極く淋しく、初春の柔かい溫かな日光は心地よい程にさし込んで、御隣の敏子樣の机の上には淡き陽炎が立ち迷つて辭書の金文字がきらきらと輝いて居る。

妾は二三日前やつと床をあげた許りの弱身なので、一人自修室に殘されて別にする事もなく、愛讀の詩集を見てると、何誰の御すさびか音樂室から幽に優しい、「ピアノ」の音がもれて來て、何とも云へない感に撲たれて恍惚と何を見るでもなしに窓越に空を仰いで居たら、羽風騷がしう窓の所に奇麗な小鳥がとまつた。「あ」と思つて見て居るとやがて飛び去つた、あまりか愛らしかつたので好奇心にかられて急いで窓の所に行つて外を覗いて見れば、前の藤棚の上を、ちよろちよろと小足に歩きながら何かつゝんで居る、嬉しい樣な氣がして其の無邪氣な動作を見守つて居ると、玄關の小使呼びの鐘がけたましく鳴つたので小鳥はふいと跳り上つて運動場のあたりへ行つて失つた。自分も今の鐘の音に驚かされて正氣にかへつた樣に小鳥の行衛を目送してたが其の松の木陰にかくれて見えずなつた、空は高く晴れて卷雲が奇麗にたなびいて居る耳をすませば遠く市の雜鬧も聞える。何だか厭な氣がしてくりつと窓に背を向けて考へるともなく思ひに沈めば色んな感想が浮んで來て仕方がない、家に居る時分はよく兄樣に「そらまた濱さんの病氣が始つた」と厭がられて自分でも愼んで居たせいかぼんやり考へ込むこともなかつたいや少なくなつて居たが。舍では叱つて下さる方もなし却つてこんな淋しい所に空想をほしいまゝにするのがせめてもの慰藉である。さつきの小鳥のことを思ひ出してしみ〳〵と羨ましい、此の快晴な春の樂園を西に東に飛びまはつて淸々しい樹林に囀り麗はしい花野の床に戯れて思ひのまゝなる彼等の身はどんなに幸福で愉快だらうか等と、それからそれへ空想は空想を生んでつい想いは故鄕の空に馳するのである母樣の笑顏妹の門の所に遊んで居る無邪氣な樣が眼前にちらつく、なつかしさにしかと其の影をとらへんとすれば、「ふつと消えて失ふ。顏をあげて室を見廻せば少し薄暗い、まあ我れにもないこんな所で時間費してと今更のごとく馬鹿げてるよと我れにかへつて、「もー

暮れちやつたのか」と呟きながら耳をかせば下の方で外出からお歸り遊ばしたらしい氣配、忙はしげに「マッチ」する音も聞える。裏手の春德寺の暮鐘は押し出すように響いた外をながむれば日は港灣の彼方に沈んで、東の空に妙なる風姿優しう聳つ峨嵋山のほとり夕靄淡く、稲荷の森さしてかへる小鳥の群も夥だしい。中川の菊畠のあたり凧上げて居た小供の影も見えず、どこからともなく夕風に送られて梅が香のみ窓の下に訪れて來る。

エンヤコラ　三河　近藤道江



○朝詣で

京都　堤登久子

此所は御苑内の辨天樣で有る、此の頃の五時過ぎと云へばまだほの暗いのに巳の日の爲でも有らうが參詣人は澤山有る、社の隅の手洗所で手や口を淸めて居ると、柏手の音は恰るで竹燒く樣に聞へて居る、竹の杖幾本も手に、敷石の上を然も跳で何か口の中で唱へながら御百度仕て居る人も見へる、私は漸々洗ひ淸めて幾つかの段を上た、無數の燈火は座の左右に何段も美しう並で有て目ばゆい程で有る、神前の御鏡は煌々として、何んだか自分の心でも映されて居る樣に思はれて恥しく思はれた、今少し進で皆と同じ樣に神の御前に額突いて御祈り仕た、暫くして座を立て例の通りに御鬮を捧げたら末吉……あゝ末吉、迷信とは思ながら何んだか神樣の御告げの樣に思はれてオ、末吉々々と心の中に繰り返しながら何んとなう嬉しかつた、あゝ兄樣の試驗も今度は通るか必と神樣は通して下さるだらうと、再拜仕て歸路を辿た來しなに見へなかつた、燈籠山の大公孫樹や枯木の樣な楓の木も、黃に枯れて居る芝生の處々から現はれて居る、石や土や、木の根などもあり〳〵と好く見へる樣に成てる、ピユ〳〵と吹く明け方の風は身に染み込む、仙洞御所の茂つた木の枝から鳥が何羽も飛び出した、織物會社の笛は六時を告げて居る、寺町通りに出たら制服の乳配達仕てる人に三度出會た、苦學生で有らう歸て登校の用意もせねばならぬと急いで居られるので有らう走りながら西の方に行かれた、あゝ私も勤めてる身七時迄には出局仕ねばならぬと急に足を早めた、

私は斯う仕て毎朝勤め前に二十町許りの道を御詣りするのです、そして御籤の吉凶を此の上もない樂みとして居るのです。

○母まつ宵

京都府　梅子

父樣はお留守、兄樣は謠のおけいこに隣り村のお寺へ妹も今迄、母樣を待ちあぐんでゐたが、とう〳〵寢て仕舞つた。あとはまたひつそりと。

あゝ又嫌な雨が……まあ何て今夜はこんなに淋しい晩なんだらう。仰向くと天井の隅の方が、薄暗く、何だかおつと私をにらんでゐる樣なので、こわくてこわくて出來る丈、ランプの心をねぢ上げた。自分の家だのになぜこんなにこわいのか、自分でも分らない。けれど何だか、何だかこわくつて編物など仕樣と晝の、し差しを袂から出してし掛けたが、うつ向くと後ろの方が恐ろしうて、ア丶後ろにも目があつたらと、思つた。耐えかねて佛樣のおあかしをかき出し、亡くなつてからまだ、半期もならない兄さんの、お寫眞と、御先祖の位牌とをじつとみつめた。私も、妹の英子も兄樣と一緒にお佛壇にゐるのよ。

お線香はもう、半分程になつて二つの細い煙は、恰ど心でもあるかのやうに、ゆら〳〵と輪をゑがいてゐるあゝ私は本當に餘つ程、意久地なしだよ。明日の御飯も仕掛けてあるし、お床もみんなとつてあるし、もう何も用はない。

つと立つて門口の障子の引き手から覗くと、いひ知れぬよい香が鼻をつく。おゝこのよい梅の香り、夜は誰もかどないものほんとうに惜しいもんだよ。

今宵この香をかぐのは、母樣が先きだらうか、兄さんだらうか……兄さんなんざあ待つてやしないけどももう何時だらう。オヤまだ十時半、母さんがゐらしつてから一時半よ。あゝまだ雨は止まない、あゝ母樣は何してらつしやるのだらう。又あの嫌ひな伯父樣のお家で、この間のやうに泣かされてなさるのじやないか知ら。

あらつ。遠くて、犬の聲が聞えるよ。母待つ宵のさて長さことよ。

新版紹介

▲『日本女鑑』第一編出づ、中宮定子、淸少納言、紫式部、春日局井上通女の五人の傳記です、稻田游光氏の編著、評傳は詳しく、文章は健實て、女鑑たる名に背きません、女子の讀本として有益至極の書物です紙數三百二十頁、假綴四六版定價四十錢（東京府下染井內外出版協會發兌）

▲『二人巡禮』通俗文庫の第五編にはトルストイの二人巡禮、神の數子の二篇が譯してあります、附錄には「トルストイ伯の家庭」を添えてあります、譯者は白島冷泉氏、飲かな筆つきは少しも西洋臭くありません定價二十錢（仝上發兌）

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

短篇小説

小栗風葉先生選



△規定　純潔清新なる短篇小説を望む、凡て振假名つき二十四字詰八十行以内とす、用紙は半紙又は罫紙を用ゐ一人一篇を限りとす、締切は毎月十五日、懸賞品は甲種規定に據る。

三等

○暗流

三重縣阿山郡上野町車阪町　北村みつ子

ぽん〳〵と音がする。半ばやけ氣味になつて、強く一はたきすると、煙管の首はころッともげた。

健太郎は大きなどてらにくるまつて居る。ぢッと煙管の首を見注て居たが、急に、

『お蘭、おい。』鋭く呼んだ眼は血走つて居る。

鐵瓶の白い湯氣が、チン〳〵と音立てゝ居る。ランプの心を思ひ切り明るくしながら、

『お蘭……』一寸調子は鋭くなつて來た。漬物をチヨキ〳〵音立てゝ居たお蘭は、ぎよつとして其の美くしい顔を上げると、血走る眼して健太郎は、自分をきつと見注めて居るので、思はず凄とした。

今日此頃の夫——健太郎が身持ちと云つたら、全然人間は變つたやうになつて終つて、酒は飲む、女郎は買ふ。時には花札に夜更ける事もある。あゝ迄やさしかつた人が……とお蘭の小さい胸は、健太郎の聲を聞く度、我れ知らず皷動するのである。

つめたい水仕事に、眞ッ赤になつた手をふきながら、ランプの影に小さくなつて居ると、健太郎は酒くさい息、血走る眼、調子も鋭く云つた。

『お蘭、手前は一體まあ、何と思ふ。』

『えゝ』意味が解らない。夫の顔を恐る〳〵見上げながら、『何がです。』

『はゝゝゝ』大きく笑つて、『否、己の問ひが惡いのだ。己がさ、一體己が何う見える？』

『何うつて、それは……』淋しく笑つた。

『ね、お蘭』健太郎は改まつて、『酒を飲む、女郎は買ふ。それに日給五十錢の男だぜ。セチ辛い今の世に、こんな男……はゝゝゝまアこんな男さ、ねえ、こんな男に添つてるンだもの、文句云や一通の事ぢやあるめえさ、だからよう、何う手前は思つてるか、それをぶッちやけて欲しいんだ。

『だつて健さん、妾……妾は何とも思つてないので

すから……』
『ヘッ、べらぼうめ！』お蘭はおど〳〵して居る。健太郎は大喝した。『べらぼうめ、思つてない！そ、そりやあ何だ。手前は一體物を蔭す性分だぜ。いゝか、よく聞くんだ。物を蔭して何になる！』
大分言葉は亂れて居る。段々に酒が廻つて來た。熟柿くさい息を吐きながら、
『毎日々々同じ事ばかりで面白くもねえや、其れに手前は己に物を蔭す性分なのだから、何につけ彼につけ、面白くねえ事ばかりなんだ。いくら昔は士族の娘だつて、もういゝ加減にしろよ。己は人形を妻にしたやうな氣にならあね。』



語尾はかすかに振つて居た。血走つた眼も何だかうるみを持つて居る。お蘭は只うなだれたまゝて、一言も云はなかつたが、おくれ毛はかすかに振つて居る。
健太郎は職工である。日給五十錢の職工なのだ。單調な仕事に疲れた體を、酒と女に慰さめて居るもののゝともすれば强者に對する憤恨、恐ろしく强い火山のやうな反撥の炎が、羨望、猜疑、復讎、あらゆる暗膽たる分子を生んで、其れ等分子が健太郎の性格を作つて居るだけに、一面淚もろい點があると同時に、冷酷な他面は强者への復讎、此れが胸中一ぱいになつて居るのだ。でも强者は何處迄

も強者だ。到底健太郎の力が及ばざるを知つては、唯一つのはかない慰藉——それは弱者、さしづめお蘭に對する強者の態度を示して、其のつかの間を笑はうとした。けれども豫期は果されなかつたのである。お蘭は堅い父の教へ、舊來の道德で人となつた身には、服從を一個の美點と信じて居るのだ。健太郎の豫期は全然果されなかつたので、『人形のやうな妻！』とかう、健太郎は絶望して終つたのである。妻が苦しむ態度——それは健太郎が今日強者に追はるゝ苦しみと同樣なのだから、一面同情しながら、他面冷たい態度で、思ひ切り笑つて見たい。と唯一の慰藉、あさましい慰藉が、すッかり失敗した時のこゝろ持ちは、何とも云ひ得ぬ暗い感覺——地の底へても引き込まるゝやうな氣がして、酒を呼んだ。強いアルコールに醉ふのを樂しんだのだ。

『人形かい。え、お蘭。』

意地惡く冷評した。もう、健太郎の眼には涙のうるみは消へて終つた。冷酷な一部分は健太郎の胸一ぱいに廣がつて居る。

父の堅い〳〵教訓を胸に包んで、嫁入つたのは五年前の春であつた。當時の夫——健太郎はやさしい情の滿ち〳〵た、男らしいと云ふよりも、むしろ女々しい程の情の人であつた。店は木綿商で、酒一杯も飲まずにせつせと働いた夫、總てに謹直な、そして無口な、何方かと云へば、あまりに溫順なのが齒がゆく思つた位であつたが、ふとした事から店が衰へる。借金がふへる。止むなく店をたゝんでから四年も經ないのに、かうも變つた夫の性質を見るにつけ、亦きくにつけ、一種云ひ得ぬ哀愁の心が、つい暗然と涙になつて、小さい女心の、云ふべき事も口には出ないのである。

今の夫は妙にひねくれて居る。曲つて居る。とお蘭は公平に觀察した。けれどもかく迄變つた動機に就ては、只貧と云ふ一字にのみ歸して居る。小さいお蘭の心に解釋するにしては、あまりに問題が大き過るのである。と、其れから其れへ、回顧の糸を探つて、お蘭は思はずほろりとした。

『ふゝ。人形かい？』

健太郎は重ねて云つた。『面白くもねえや、おい、お蘭酒がないかい？』

『酒？』眉を寄せる。

『酒を呉れ、え、酒がなけにや死んで終ふ。』

『はい……』と立つて、戸棚から德利を出した。心

て泣いても、よし死ぬる程の苦しみがあつても、お蘭は口へは出さないのである。

健太郎は徳利の口から、がぶ〳〵と飲んで終つた。飲んで終ふとぶつ倒れる。お蘭は蒲團をそッと掛けて勝手へ立た。米びつの上へ倒れて泣いた。泣いては見たが、ふつと米――明日の米と云ふ事に氣がつくと直ぐ、米びつの中を探り初めた。

無い。僅にざらりと音がするばかりだ。父がやかましく云つた女の責任と云ふ事、此れを思つてはつとしたが、さて金もない。『米の變りに酒を飲む』と口癖の夫が、此の苦しみも知るまい。夫には攻められ、無い米の番をする。と急に淋しくなつたが、女の務と云ふ。此の一言に不快を消して終つた。

『いぢめ甲斐もねえ。』

健太郎はむツくり起きて云つた。

（評）達者な筆である。材料も好い。イラ〳〵した健太郎も、只服從と云ふことのみ知つたお蘭も一通りは書けてゐる。「米の代りに酒を飲む。」「いぢめ甲斐もねえ。」などの言葉に健太郎の性格が見られる。好い言葉だ。

五等　○山吹垣

上總國市原郡鶴舞町　ひさ子

四月も下旬の靜かな日である。

買物にと富子は婢を連れて出て行つた。椽側の長椅子に身を寄掛てる隼雄は未う若い書家なのである。

夕日は遙ふの工場の煙突の上に在て落ちんとして落ちない。灰色の煙が昇ると見えながら直消えゆく。何物をも溶かさねばやまぬ樣な軟かな風、其が落花の香を含むで愈々濃く愈々深くこの夕暮を包むのであらう。日のある邊はぼうつと紅いが空は漸々乳色になつて來る。隼雄は恍惚と見て居る、華やかな自然の俤に對する反動とでもいふものか心がまた妙に沈む。そして旋風に狂ふ落花の樣なと戀の追憶を胸に描いても見る。矢張り寂しい。けれど今の富子に落度のあらう樣にも思へぬ。隼雄は又思返して外面を見た。

暸亂と雪をみだして庭の櫻がまた散る。中垣を越えた山吹の花はたわゝに、淡つすりとした陰影が斜めにおちて暗からず明るからず然かも何處か明瞭した樣な晩春の特徴とも言ふべき風情が表れてある隼雄は今その作中の『山吹垣』の事をおもふ、それは一年前の此麼夕に見た富子の實家から構想したので――その花その垣、あの空この陰影と、色彩の調和や發揮すべきその特色を腦裏に描いて靜と目を瞑つた。

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

『叔母やもお出でよ』突如として靜さ破つた聲がある
從妹の道さんで富子とは一年前迄の學友である。山吹の枝越しに藤色の被布が半身浮いて門の方を見返つた風情——美しいと思ふ——此方を向いて、
『從兄さん』と甘える樣。思切つて大きくとつた庇髪には淡紅色の大きなリボンがかけてある。小刻みに足駄を運んでいそ／＼と入つて來た。
『何うも其後は御無沙汰致しました……あの、奥樣は……』と罪なく笑ひかける。意地の惡いこと、毎も富子さんと言つてるのに。
『一寸其處へ出ました。今歸りませうからまあお上りなさい』『有難う……でも乳母が待て居りますから』
『左樣？でも最う歸る時分ですよ先刻出たんですから……今日は何方へか……』『え鳥渡姉さん許迄……

彈箏　豐橋　加藤芳子



……あの富子さんに然有仰て頂戴な、先日の卒業式の寫眞が出來て來て居りますから、昔の友達にお逢ひながら是非來遊る樣につて何卒ね。妾また伺ひますから……
……。
『承知しました。……昔の友達が妙ぢやありませんか。』と笑ひながら追加すると『ほゝでも一年前ですもの……では何卒宜しく……』華美に言て頭を下げる。
『然ですか……では又入來い……』道さんは嬌態をしながら出てゆく。隼雄は見送つて、また椅子に寄かゝる。藤色淡紅山吹櫻乳色、此麼ことを唯茫然と、考へるともなしに考へた。
太陽は長い煙突を下りて屋根迄達いた。鳥が二つ鳴きもせずに飛てゆく。櫻はまたはら／＼と散る。
富子が歸て來た。無雜作に結んだ儘の飾らぬ束髪、白

襟をちらと見せて胸高にきちんと結んだ帶姿『只今‥‥‥』と鳥渡其處へ膝をつく。少時して『あの、お夕飯は彼室に致しますか』と聞いて夫の首肯くのを見ながら立ちかけた。素足がちらと裾を洩れる。

『お前その儘で出歩いたのか‥‥‥羽織も着ない、足袋もはかない‥‥‥‥』『ハ鳥渡其處迄でしたからつひ‥‥‥でも大變暖かですわねえ』と繕ふ樣に言た。隼雄はまた庭の方へ目を反して終ふ。結婚してから半年、華やかな少女心といふものが然早く褪める物かしらと疑つた。そして一つ違ひの道子に比べて見る。更に一年前の山吹垣の家に初て見た時の富子に比べて見る。何だか寂しい樣な心地がした。

やがて日は暮れた。花を殘して四邊はほんのり暗くなつた。『貴夫、冷えませんうちに‥‥‥』呼ばれて隼雄は室に入つた。散かして置た書物は整然と机の上に、洋燈の灯は明きりと鮮かに掃はれた室を照す。日の餘熱の冷めぬ座蒲團の上に座りながら、隼雄はしげしげと質素な富子の姿を見た。

『先刻道さんが來たよ』『あら然う。學校の方はもう御卒業なすつたんですね、妾はつひまだ御祝もしませんてしたわ』と食卓の上を按排しながら言ふ。

『眞逆その催促でもあるまいよ。同窓の寫眞が出來て來てるから昔の友達に逢ひながら遊びに來る樣つて』笑ひながら言ふ。『まあ然ですか‥‥‥然言へば大川さんや平尾さん赤澤さんなども皆今年の卒業だつたでせうねえ』『盛粧した令孃達の寫眞でも見て來るさ、何も參考だ‥‥‥道さんがお召の説明でもするだらう反映が好いの惡るいの濃いの淡いのつて‥‥‥』富子は此言の奧に潜むでる意味を解しなかつた。切言すればうら若い男の趣味を解しなかつたのである。

『ほゝゝまあ厭な、子供ぢやありませんし』と含笑みながら『おつゆが如何でせう』と聞いた。隼雄は默つてる。富子はそこに或る寂寥の胚胎してることを知らなかつた。

（評）艶麗な文章である。殊に及び難いのは其叙景の筆の巧みに美しい事である。結婚後、スヰートな歡樂の極まつた時、覺える一種の哀愁――男の心の寂寥を書いたものだ。短篇としては餘りに捉へた問題が大きい。其大きい問題を此れだけの短篇にまとめたゞけ、それだけ拵へた所がある。それが此篇の缺點である。

秀逸

○朝露　上毛　木内あや

祐さんが歸省してからもう三十日餘りになる。

二三日以來朝晩の風が漸く涼しくなつて裏の畑の南瓜の葉がくれに、とりのこされたのが淋しい。今朝はまたひどい露なのだ。

祐さんは最早二三日で前橋の學校へゆくと云てゐる。祐さんは今年中學の五年生家が財產家だから彼地に居るにだつて餘程氣樂だ。實家から十五里といふ遠路を、腕車でゆく位なんだ。

祐さんの家は酒藏で廣い通をへだてゝ村役場と向いあつてゐる。役場のとなりは百姓家である。

賢さん！その家の息子である、賢さんは今年十八、祐さんと同年輩ではあるが高等も中途で止めにして百姓をしてゐる、雜魚とりがすきで、仕事のうちでは草刈りが好きだそうな。祐さんは瘠てゐる、賢さんは太つてゐる、雜魚なら細いが美味といふが人の價値はどちらてもからがいゝ。祐さんが寐てゐるうちに草を刈て來て必らず遊びに行く。

祐さんは學生だから朝寢してもいゝ。賢さんはそうはゆかぬ『祐さんはまだねてるんだらう。』こんな事を考えながら毎朝早く草刈にゆく、連れには善太を誘うて。

祐さんの家の白壁をうしろに見て、道は赤谷川に沿うて一町ばかり、善太の家の前から橋を渡つて少しの坂を上りつめると名胡桃平原である。畑がある、桑畑がある。所々に雜木林も中に立てゐる。向うの山の麓は朝霧に包まれて赤谷川の流れに沿うた、朝の小川町は目の下に見える。風が涼しい、鷄の聲が遠く聞える。心もちのいゝ朝だ。

祐さんの家の所有て、一町畑といへば誰も知つてゐる。道はそのそばを通つて野原に通じてゐる。

『今日は露があつて刈りよかつたわねえ』

お梅と美代さんが話しながらくる。善太の南瓜冠を笑ひながら賢さんがゆく。しつくり行過た。

「お早う……」賢さんいゝ聲だ。

「お早うござんす……。」美代さんがつゝましげにいふ。

「兄さんは早寢坊ねえ。……」賢さんとぼけて、

「朝寢坊つてあるもんかい、今朝くらいたまに早いと

梅さんはすぐ、意張んさ。」

「だつて私なんざもう刈つて來たんだものうねえ美代さん？」

「どうしたの善さんは顏を、」

「どうしたつていゝぢやないか。」

「だつてをかしいもの」
「をかしいつてあるもんかい、鼻もあるし眼も二つあらア――」
兄妹の問答に美代さんも氣がつく。
「ほんとに善さんの顔はどうしたの」
「昨日蜂に刺れたんさ、」
「いたかつたでしよう。」美代さんは氣の毒さうにいふ
「何だかをかしいわねえ、」
お梅は又こんなことを言ふ。皆が哄と笑つたので、善太も術なさそうに笑ふた。
善太が妙な顔をして。
「梅さんの持てゐるのは何だい。」
「着物‥‥‥祐さんの。」
「どうして持て來たの、」
「あのう、拾つて來たの、」
お梅はとぼけた顔していふ。
「全體どういふ譯なのだい。」
賢さんも善太も眞面目になつてきく。二人はたゞ笑つてばかりゐて敎へない。人を馬鹿にしてゐる。
「おい、早く刈てこないと暑くなるぜ」
賢さんが思いついたようにいふ。

＊　＊　＊　＊　＊

賢さんなどが草を刈て歸る頃は大分暑かつた。
妹のお梅に聞て見ると。
「今朝ねえ、早く祐さんの家い。若い女が何か文句を言うて來たので祐さんは狼狽て家から逃げ出したつて。女には金をくれてをい出したんだけど。祐さんはどこえいつたか分ないんで、大騷ぎしたの」
「今朝の着物はどうしたの、」
「あれはねえ、祐さんが一町畑の傍で洋服を着かへて居て、眞ぐ學校へゆくから着物を家へ屆けて呉れつて賴まれたの」「をかしいねえ」
祐さんは學校へ出て何になるのか知ら？賢さんは百姓の子だから百姓になる。百姓に落第はないからいゝ。

（評）飾氣の無い放逸な好い書振だ。學問に出されて都會に墮落する資産家の子と、田園の間に心安く生立つて行く貧家の子とを對照したのらしいが、どうも心持がボンヤリして居る。描寫にも構想にも今一工夫を要する。

○理想のホーム

讃岐　白ばら

「まだおかへりがない」。
文子は、今まで通はしてゐた針の手をやすめ、そと丸窓を押して、氣づかはしげに外を眺めながら斯樣云つ

たゞ外はまだ糠の樣な小雨が、音もせず降つてゐる。さつきに、荷車が二三臺通つてからは、外はいと靜かだ。時々築山のあたりに、樫の葉末から大粒の雫が落ちる音が聞えるのみてある。最早日は入つたのだらう、夕闇は隣の家の屋根を越へて、早窓の邊まで黄昏れてきた、室の內は薄暗い。暮の鐘の音は睡げに聞える。

文子はなほも、雨垂の下をチヨロ〳〵流れる水を眺めてゐる、其の濁れ水に、小さい圓い舟の樣な泡が澤山浮いて居る、其等の泡が流れる內、スツト走つて他のと合し、次第に太つたと思ふと、急にパツト消える。面白い。文子はまだ見入つてゐる。此時、不意に、「まだ縫うてゐるの、もうお止しなさい」襖をあけて、斯樣やさしく云つたのは彼女の姑である。

「ハア唯今……」、文子はふりかへつて、貌を正した。

姑は靜かに這入つてきて、

「道夫はまだ歸らんね、お前まあ先き御飯おあがり……

……出來たから」。



夜汽車　牛込　岩谷綠子

「アラ、お母さん！お松かしますわ、お手傳ひなさらないでも」。「いーえお松は一寸お使ひにいつてゐるからよ」。

「マアほんとに濟みませんね、お母さんにして頂いては」「いーえお母さんは丈夫だから何も……それよりお前こそ、まだ十分に快くなつてゐないのに、左樣に仕事をしては……」

「いーえ妾は最早スッカリ快くなりましたから、これ位のことは……」。最早室內は眞暗だ、唯文子の美しい顏がほの白う見えるのみである。此時お松は置ランプを持つて來た、そして「あの旦那樣がお歸りになりましたよ」と告げる。

「アラさう」。かう低く叫んで、暫らく歸らなかつた夫が今歸つたので、逭に嬉しい。母子二人は、微笑みながら玄關にいつた。

「さぞお疲れ遊ばして……」と敷居に三指をつきながら」。

「フン今歸つた……してお前の病氣は最早快くなつ

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

たか」

「ハイ最早スッカリ……」

「そうか、それは何よりだ……僕も心配して居たが……何より結構だ」

「ハア……」文子は夫のやさしい心がうれしく、語が出ない。後は口の內に。

道夫は靴をぬいで座敷に通つた、妻も後からついて這入つた。早皆の膳がすわつてゐる。母子三人微笑みながら膳についた。

「今日は雨が降つて、困つただらう」と母が嬉しげに我が子を打ちまもりながら問ふ。

「いーえ小雨でしたから……それに私等はいつも歩きつめてゐますからね、今日も高松から歩いて歸つたのです」。「マア……」皆感じ入つた樣に云ふ。

母はまた語をついて、

「然し今度は割合にすむのが早かつたでは、ありませんか」。

「さうです、先方で皆都合よくゆきましたから……サアお松御飯だ、アア腹が空いてゐた」

「オホヽヽ、お早いこと」。

「オホホホホ」今まで少し羞みながら、默つて聞いて居た文子も、思はず米粒を並べた樣な齒をあらはした。

（評）輕く書けて居る。初めの叙景が好い。

○不足　　加賀　小島清子

私は昨年金澤の學校を卒業したのである。同級に佐藤増子と云ふ女が居つた、彼女は石川郡の百性の娘であるが、頗る當世流で言葉は江戸ッ子の片言交り、束髪も他女より目立つた結び振り、歩方も蓮葉である。髪飾、衣服、袴、靴、悉くハイカラ式である。て、學友は灰殻さんと異名をしてゐた。

私は別して親交と云ふ譯でもないが、平素揶揄つた事がないから、私を慕ふて居るらしい。卒業後は何度も書翰が來た私も臨機應變に何とはなしに返書を上げてゐた、今年の賀状には宮本増子とあつた私は不審しく怎麼事を想像た、「増子さんは必然、宮本といふ家へお嫁入りしたのであらう、兎に角同じ村に相違ない、ア、不思議ぢや、増子さんは軍人か官吏が理想だと云はれたに……して其結婚したと何故報知さないのだらう」など〻。而して平常と反對に今度は私から變な事を問ふた、が二十日經つても返事が來ぬ、私は失策つたと後悔して居つた。

　如月私は金澤の伯母の許へ遊びに往ッた翌日の事犀川櫻橋を通らうとする途端、彼女を見た、風通のお召に繻珍の帶、粋な銀杏返しに髪を結ッて絹張の洋傘を杖に、何でも品性の好い容貌である。増子さんか知ら……怎うも増子さんらしい、と私は小走りに追ひ付いて「佐藤さんでなくッて」彼女は振り向いて、喫驚した

「アラ小島さんなの久濶でしたね」と彼女は喫驚したのか耳の邊まで紅くした、挨拶も一通りすんで、

「眞實に逢ひたかつたわ、妾此頃懊惱てるのよ、お急ぎですか……妾の煩悶を打ち明けますから聞いて頂戴ね」餘り突如の言葉に呆れた、人や車の往來が激しいので私は川の下流を指して彼處で悠長話しましやうと土堤の上へ導いた、圖ある處に佇んだ、實際彼女は憂愁に沈んだ容子である、

「妾の欝いでるのが外貌からでも判るでしやう」と洋傘で地を穿いて俯向いてゐる、私は態と、

「貴女嬉れしい事があるのよ、解ッてますわ、アノー先達愚書進げまして誠に失禮しました、許して頂戴」

「戯談でないわ、妾こそお返事も致しませず失禮しました勘忍して下さいまし、彼麼事に就て妾が苦痛んで居るのですよ」私はさてこそと合點かれたが愼重の態度で「何を」と簡單にいふ。

「推量らぬ事がありませんわ……」と低い聲で呟いた「貴女だから申すのです、實は妾昨年の十一月、兩親と親戚とに迫られて嫁いだのです、妾元來田舎は嫌ひなのでした、今の家は多少財産はありますけれど百性ですもの……良人は無教育で無頓着で誠に情ないのです、品格も何もありやしないわ、迚も一生添ふてふ心になれないんです、子として親の命に盲從ふが義務ですが妾怎うしても忍びんのです、可笑しい話ですが良人には戀だの愛だので爪の垢程もない、マア肉慾の奴隷ですもの、二度と生れる娑婆なら兎も角、私悲しくて死にたい樣ですわ」涙ぐんで彼女の煩悶を殘らず語つた。

「貴女其麼事があるもんですか、在校中先生が仰しやッた事をお忘れでもありますまい、誰だつて此世は充分な事はありませんよ、貴女の樣に天才のある人は去ざ知らず、妻は夫に服從して一度は必ず辛捧せねばなりませんからね」私も眞面目になつて慰さめるより仕方がない。彼女は又恍惚と何處を見てゐるのか眼をすえて沈思て居る、思ひ出した如に帶の中から摸樣のある革筒を出して卷莨を私に進めた、私が嫌ひといふや

燐寸を擦つてスパ〳〵喫んでゐた。百性が不滿足な筈ぢやと密かに思ふた、彼女は烟を輪に吹いて、

「妾あ一層離婚して、一生獨身で外國へでも……」

彼女は諄々として未來の理想を說くのである、消極的其說を咀嚼すれば强ち一理ないでもない、が彼女は人世の理想を知つて自然を知らぬのではなからうか、

「貴女の話も無理はありませんが萬事忍耐主義でゐなさい」と私は云ふより名句が出なかつた、彼女は憤然としたらしい、十六形の銀側時計を出して「モー五時！」と訴へる樣に云ふ、一言二言餘談に移つて別れた。

一打ち眺むれば右方遥かに峙つ白山から蜒り蜒つて山から山へ北國特有の積雪はまだ半腹以上眞白である、前日來吹き荒びし金澤の空も、今日は劃然と雲の影だになく、梅も笑ふて櫻も蕾む、今し夕陽は鐵橋の彼方に血を吐いて沈んだ、私は增子の事斗り考へて伯母の宅へ歸つた。

一ケ月後、增子から郵便が來た、淸國上海に居るとの事、何をしてるのか知ら……。

（評）田舍に滿足することの出來ない、ハイカラな女を書いたものだ。細工に過ぎた節もあるが、空つと書けて居る。

○亂れ髮

小石川　明石光子

僕は斷然藝者なんか妻とする事は出來ない。昨夜仰しやつたあのお言葉、私は身に應へた。私は此樣な藝者風情、其が何うして勤さんの奧樣になれやう、けれど今迄のお情を何うして忘れられやうか。始めてお目に懸つたのは一昨年の春、伊豫紋で何か學校の會のあつた時、其から私は度々お座敷へ呼ばれておなじみが重なると色々私の不幸な事や、兩親に別れて鬼の樣な叔母樣の手から藝者に賣られた事、此先何うなる身やら悲しい私の身の上を泣いて下すつた。勤樣もお家できびしくて十時が打てば必つとお歸りになつた。昨夜も大變お醉ひになつて、お前と吞むのも今日限りだと仰しやつて、此度愈々奧樣をお迎へなさるといふ打開け話迄なすつて、お前の心は忘れないが此後は度々來る事は出來ない、僕の爲思つたら忘れて來れ、私は何うして忘れませうつて潸々泣いた。此迄思ひ返して君代は涙ぐんだが、其にしても奧樣にお成りの方は嘸お似合ひの可愛らしい方に違ひない、君代は寢亂れ髮にふと昨夜の事を小さき胸に問ひ返したのであつた。

君ちやん何考へて居るの？耳先で云ふのはお琴姐さん嫌だね此子は朝からぼんやりしてさ、例の元氣で姐さんはせつせと楊子を用つて居る。だつて私つく〳〵不

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

滿ないから、といへば、オホ、何かさ何うせ藝者は藝者だけの事さ」勤樣にでも嫌はれたのかい。勤樣だつた最早奥樣がなくちやならない年だもの、何時迄子供見たいにお前と遊べる物か、其よか腕を磨いて、藝者だつて玉の輿に乗らうの浮氣をしやうのと思ふ許が能ぢやあるまいし、たとへ外國人の前へ出てもはづかしくないやうにしたら眞實面白いと思つて居るんだよ、私だつて若い時は色々な事あつたさ、と相變らず一人でしやべり續ける。姐さんたら大きな聲して嫌だわ、其樣譯ぢやないけれどだつて考へれば情ないと、ハラ／＼と顔に袖あてて泣いた。

君代は今年十八の若く美くしかつた。

あゝもう今迄の樣にお座敷へも呼んで下さらないかし



五月雨

周防 AGWMT

ら、昨夜は無中で別れて了つたけれどもう一度あゝもう一度あつて思ふ存分泣いて見たい。

君代は益々思ひ亂れたがふと手洗水に自分の顔を寫して亂れ髪の、昨夜からの泣いた目の其儘なのを見て、私は昨夜よつぽど泣いたんだわ。

一人悟う云ひ乍ら頭痛でもするのか今更の樣にこめかみをおさへて島田重げに髪のほつれ毛をかきあげた。

（評）すら／＼と難が無く描けた。若い藝者の悲みと云つたやうな心持が、[illegible]つと書けて居る。

○夕暮

青森市 紅百合

櫻鼠色のお高祖頭巾で、面を包んで、銀茶色の肩掛掛けた雪子、俯き勝ちに歩いて居る。あゝ歸ろふか歸るまいか!?でも歸らなきあ、あれ程優しく事をわ

けて、諫めて呉れた、母樣や兄樣に濟まないし、それに二人の子供もある事なんだし……けど敏雄があんなじや迚も、行末が案じられるもの、あの小糸に迷つて、家になんか寄りつかず、昨夜の樣に、一寸愚痴らしい事を云つたつては、折檻する樣じや何時も體は迚も生疵が絶へないだらう、だが子供の事を思ひや、迚も思ひきれないし、あゝ愁い、いつそ／＼ひと思ひに……いえ／＼そそんな事まあ恐ろしい、母樣や子供がどんなに嘆くだらう、私さへ我慢して、今迄通り半巾の内職して、子供に食はして行けや、敏雄だつて何時か迷ひも覺めましよう、小糸もそうしてる中には、商賣なんだから、いゝ旦那さへ出來れや思ひ切るは知れた事、あゝそうしよう／＼、まあ私は俯甲斐ない、今迄迷つて居たのだよ、眞個に、私が居ない計りに、幾代は嘸困つて居るだらう。斯樣思つては氣に懸つて、初めには牛の樣に歩るいて居たが、せつせと下駄の音を高めて、横町の角をつと曲つて、狹い露路をコトコト二軒目の我が家の前に立止まると、もう四邊は薄暗いのに尙だ燈火もつけず、コソとの物音もない、格子から覗ひて心味に「幾ちやん――綾ちやん――」と呼んで見たが返事はない、まあ今頃何所へ行つたんだらう、と獨言ながら、家へは入らず、露路を出て彼方此方見廻すと何を見つけてか、（あら、幾ちやんだわ、まあよく背負はれたねネ！）其儘立止つて、ずつと同じ所を凝視て居る。すぐ三間計り間を置いた、電信柱の下には、八つ位の可愛らしい子が、三つ計りの子を重相に、ぐつたり背負つて彼方向きに柱に寄り掛つて居ると、其の傍には、身なりの美麗な同じ位の子が、ごむ鞠を持つて何か話し合つて居たが、背の子がむづかり出して、（綾ちやん眠いの？今に母樣歸へつてよ）老せた事云つて、（鶯や／＼梅の小枝に晝寐をして、晝寐の夢には何んと見た――）鈴ふる樣な聲で、鞠唄の一節を歌ひ出し、（花嫁御／＼、金襴緞子を縫せたら、ホトリ／＼と泣くわい／＼――）雪子はつと一足踏み出したが、コトと音がすると我に返つて、又立盡し、（何が悲しとお泣きやある／＼、私が弟の千松が／＼、七つ八つから金山へ／＼、一年待つても尙だ見えぬ――）（あの幾ちやん、貴女千松知つてゝ）（知らないわ）（私知つてるわ、お芝居で私位の男の子が、毒のお菓子食べて死んだの）（あら何所の子？）（それが千松だつて、姉樣が云つてよ）すると、丁度前の家の戸がさつと開ひて、（花ちやん、何時迄居るい、御覽なもうお

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

星が出たじやないか）若い女の聲がする、（えゝお星？）花子が空を見上げると、その通り、銀の砂をふるまひた樣に、彼方にも此方にもキラ〳〵、丁度もうお歸りよと云つた樣に輝ひて居て、四邊はもうとつぷり暮れて、寒い風がヒユーヒユー吹いて居る。（アラ私もう歸るわ、左樣なら）若い女の聲で、（幾ちやんもお歸りなさいよ、オゝ寒む？）ガラリ戸を閉る音。（アラ、花ちやん歸つちまつた淋しいわ、母樣歸らないのか知ら、お腹が空いて泣き度いわ）雪子は、耐らず、裾さばきも四途路に驅け出て、（い幾ちやん！）四邊を憚る樣な聲音、小さい影はふりかへつて、（アラ母樣！）背が重いので、いら〳〵しても驅け出せない、（靜かに、幾ちやん忍耐してお呉れよ、嘸空腹かつたらうネ！）（いいえ、だけど綾ちやんがむづかつて）（オゝそうだらう〳〵、もう〳〵何所へも行かないよ、オゝ綾ちやん眠つたネ！どれ母樣が）抱き取つてそつと頰摺して、（幾ちやん、何時からお飯食べないの？）（今朝は父樣が居たから食べたけど……）（あらまあ！堪忍してお呉れよ、今花ちやんの云つた千松の樣だわネ！）（千松？）（アゝ、歸つてから、話してあげ樣、さあ早く行きましよう）幾代は母の袖に縋つて、ひだる相に歩いて行く。晝の塵を掃く樣に、さつと一吹き寒い風が吹き過ぎると、町の方には微に、按摩の笛の音が淋しく聞える、同時、幾代の家からパッと燈火が射して、狹い露路を照した。



女姿　牛込佐野良子

（評）之れ迄先人の手に幾度か書き古された題材だ。且つ、文章も未だ幼稚である。けれ共、其眞面目な態度が嬉しい。

○氣隨

京都　寺田靜子

「姉さんお藥を召されますか、」と、妹は學校の用事も終つたので、長らく姉の看護して居られる、母に交代しようとて、且つ姉を見舞ふがてら昨日歸宅して、今日姉の宅へ來

て母と代つたのである、母は近所へ一寸行くので少時したら藥をと言はれたので、進めたのである。

「はア……私一人で飲みますよ、」

とて水藥の瓶を取り充分に振つてコップに二筋まで入れて飲んでしまつた、此の一言の動作で妹は姉の權幕に驚いた。

やがて遠く紡績の汽笛は響き渡つて來ると、床の置時計は十一時半を報じたので妹は勝手元に行つて下女が用意して置いた、煮た牛乳と雞卵四つとを盆に盛つたのを病室へ持つて來た、

「姉さんお晝を召されてよ、」

と言ふて先きの牛乳と雞卵を出すと、

「又た牛乳を澤山煮て、文さん、お松を呼んで下さい、」

何にも知らぬ妹はベルを鳴らすと、下女のお松は襷を脱しつゝ病人の床近くに來た、

「お松。なぜに牛乳を毎日々々言ふのに澤山煮るのです、二合を三度に煮て下さいと耳がたこになるほど言ふてしよう、」

下女のお松は又た例の氣隨だと思ふて居たが、

「先程御老母樣が御出ましの時牛乳は例の通り一合宛つと言ふてお出ましになりましたので……、」

とまだ言ひ終らぬのに、

「なんぼお母さんがお言ひなされても私しはね、毎日病床に居つて運動もせんのですから二合の牛乳と鷄卵三個を三度でよろしいの、」

下女をさん／＼叱り飛ばした、お松も屈服して勝手元に行つてしまつた、後に取り殘こされた、妹の文子は姉さんの氣隨に何にも言はず、障子に蠅の飛んだり、登つたりして行くのを見凝めて居た、姉は自分の病床日誌へ勝手に檢溫器で熱を計つて書ひて居るのを妹は横眼で見た。

母も歸つて來られて、學校の事やら東京の面白き話をして居ると、姉は重たげに頭を揚げて、

「お文さんお話も面白いでしよが、私しは何だかやかましひから別處でして下さい、」

と言はれて、母は散らかしてある雜誌や新聞を片附けて、妹は手持無沙汰で共に病室を出て行つた。

母妹の話して居る室は二階座敷で小ぢんまりした間であつて、姉の居室と定められた所である、床には山水の軸九谷燒きの元祿美人の置物がある、隅には手箪笥文箱等が整へられてある、壁には書やら油畫の美人

やらがある、硝子障子の外には庭木の向ふに他家の家根が二つ三つ見へて、其向は青々とした田地で、右の森の影には新しく建つた紡績の分工場てある、姉の主人も此の紡績の技師て充分の給料を取つて居るのてある、

「お母さん義兄さん、やはりあの紡績へ行つて居らしやるの、」

と硝子越に見へる紡績を言ふた、

「芳雄さんは中々勉强で毎日會社へ行つて居られるのさうしてね、病人が氣に懸るので看護婦を雇ふと言はれても、姉さん一寸も聽かないで、看護婦の代りに私が病床日誌も何にもかも致るつて言ふて雇はんの……、」

「姉さん氣隨ね……、」

「だから芳雄さんも其んなに氣を使はずに置けと言はれても一寸も聽かないので、私も閉口つて居るのですよ、」

はなし家　　名古屋　寺澤信子



「姉さん、何ぜに、そんなに氣隨になられたのてしよう、先きも檢溫器で熱を計つて日誌に書て居られましたよ、」

「それくらい安い事、ウン〳〵言ふて居つても加減が一寸宜いと車で醫師へ行くの、私が何んと言ふても聽かんから捨てあるの、」

「まあそう……、」

話しが最中に下女から晝飯を言ふて來たので、二人は下に行つてしまつた、とこへ芳雄の義兄が歸つて來た妹の文子も挨拶した、芳雄も今日晝飯に歸つたのは國から實母が嫁の看護に行くとの手紙を受け取つたので態々歸つたのてあつた、又妻やら妻の母に言はんとて飯を終るなり會社へ行つてしまつた

芳雄さんのお母さんは中々强かりしたお方だから、母のように思ふて氣隨は出來ませんよと、母は病人の

枕邊で言ひ聽かして居つた、如何な姉も口をきかなかつたが、母は心配の種が一つ出來たがそも姉の心中如何がだらう。

（評）觀察も幼稚、描寫も幼稚、然し、如何にも眞摯なその態度が嬉しい。

○あの晩

伊豆　高木喜代子

『村松在宅か。』士屋が來たのだ、直に上坐つて自分の側へ坐る。火鉢へ手を翳す。雨の降る晩だ。春雨と言つても實は未だ如月の始まり、夜は流石に寒烈い。折折風が暴ッと音をさせては通る。『寒いなァ勉强か。』『ムム一寸……顏色が不良ぞ。』『何んに……。』『また飮酒たのか。』默つてる、が奇態に沈思んでる。『困るなァ妻は何うした』『其のまゝさ』『もどしたのか』矢張り默つてる、言ひ惡いのだ、過分飮酒ので、許嫁て夫婦になつた妻の妻子も氣を揉んで、種々注意して手を盡力したが、岩角に茶釜だ當つて破碎けろて取合はぬ、親類も手に汗を握つて仕樣事なしに一旦、妻子を引取つた、夢が醒めるだらうと言つた夢は十日許りてまた、左手と出驅けた、自分も友達だ時々諫言めてもやつた、風馬牛だ、今夜ヒョイとやつて來た。酔つて居ない。『もどさんのか、困んなァ可愛想ぢやないか二子か』『村松君は親友だつけかなァ僕と』『下らんな、そんなことを』『告白するよ、僕は告白するよ』友は泣いてる、目は涙の海だ。『告白?!』『ウム告白する胸底の秘密を告白する、聞いて呉るか』『何故さ』『血だね……涙だね』友の涙に誘はれて、不覺に自分も涙ぐむ。『村松知つとるだらうな、正枝さんを、あの池沼で死んだ正枝さんを』『正枝さん、知つてる、正枝さんが何うしたのだ』

降雨は止んだのか點滴の音ばかり、ポッン〳〵と可憐に聞へる。

火鉢の火は灰を冠つた、机の上へ置いてある懷中時計のセコンドを刻む音が胸へ泌みるようだ、友は矢張り涙を流してる『何故死んだか知つてるか』『狂氣して死んだのだと聞いたが』『然うだ狂氣して死んだのだ、狂氣さしたのはこッこの』二十三の男、友の土屋は潛々と泣いて泣いた。

『ボ僕ァ好んで酒を飮んだんぢやない、僕のために一命を捨た正枝が飮ませたのだ、僕ァ酒を今夜限り止むる、村松酒はやめたぞ』凄くなッた、暫時して友は歸宅つた。窓を開けたら、月が朧平と中天に懸つてる。

* * * * * *

其後三日過つて友の士屋の死骸があの婆さん淵から上つたといふ。酒に醉つて落ちて死んだのだといふ。自分は思はずあの雨の晩のことを思ひ出して涙をこぼした。

（評）全然才て書いたものだ。筆が餘り走り過ぎて居る。捨へた厭や味な所があるのが疵だ。が、きび〳〵とした文章である。

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

和歌

佐々木信綱先生選



▲規定　殊更に舊派と言はず、從來の如く清新の調を望む、原稿は半紙を用ゐ一人一首を限りとす、本名を記入すること、締切は毎月十五日、懸賞品は乙種の規定に據る。

秀逸

下野　手塚花靜

◎夕雲は多氣のふもとに薄れきて石切る音もいつしか止みぬ

大阪府　祝綾子

◎張板に更紗はる手をそと留めて耳傾けぬ鶯の聲

埼玉縣　渡邊文子

◎行く秋の夕べ淋しき里川を鳥の古巣の流れて行きぬ

長野縣　瀧澤さつき子

◎月の夜や草かげ木かげ地に落ちて靈あるごとく搖きあへる

高山村　有野貞子

◎みちのべの名無し草花なつかしみくちつけて見ぬ毒あらばあれ

芝　ゆみゑ

◎幾筋の工場のけぶり空高くひとつにこむる朝霞かな

京橋　山下岩江子

◎夕月のほのかに薫る初夏を旅して聞けり故里の笛

仙臺市　岩田よし子

◎夕月夜かすかに匂ふ町のかげにさゝやく人の美しきかな

京都市　矢田愛子

◎心せよ露だにおもき青柳のいとに木傳ふ若きうぐひす

茨城縣　酒葉昌子

◎朝嵐白雲空を飛ぶが如我歌心天かけるかな

陸前　藤井光子

◎大銀杏白鳩のむれ下る見えて瑞枝若葉に夏の日さしぬ

滋賀縣　島田かず

◎萠え初めの嫁菜も床し芹もよしひなに供へん春の若草

奈良縣　工藤たまき

◎百合の花潮の香うかぶ磯山のかげに咲くなりしら貝に似て

千葉縣　醍醐よし子

◎故知らぬ神の力か我が望み水脈引きすなりあかるき方に

沼津　渡邊とよを

◎なつかしき我古郷に其まゝの梅さく村を汽車にてすぎぬ

下野　くに子

◎振り袖を背に結びて若菜つむ都少女の脛の白さよ

備中　大西好子

◎春の雨まなこ閉づれば心なき君と別れし日の浮び來ぬ

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

○鶯の聲や何處と見かへれば手なるさわらび小川に落ちぬ　下野　磯　みい子

○桃散りぬ障子にうつる花影の歌書く如き春風のして　横須賀　藤野百々子

○君問はゞ妾は答へむ朝もやの花野分けつゝ三里きませと　浪花　白露少女

○桑の花や御たまばめぐる順禮の乙女の衣を吹く春の風　神戸　千鳥子

○嫁く人の晴れ着の袖にちらめきて春の夜寒し淡雪の降る　神戸　那美子

○日の落ちし沖に君住む島ありとしばし望めぬ磯べに立ちて　舊里村　相川みよ

○いつはりの世にあきはてぬ朝な夕な神の御國のしたはしきかな　伊賀　關本逸子

○朝薮に鶯なきて草川の水の烟の夢とたゞよふ　石川縣　茶木ゆう

○少女子が小琴しらぶる窓際に花にまじりて小蝶舞なり　下谷　花園百合子

○窓の梅庭のくれ竹みることになく鶯をいつしかとまつ　山口　酒向敏子

○音もなふ更けゆく空に月消しれざめ靜けき春雨の窓　韓國　細川千里子

○大筑波北總國の中空を登やぐ眉を春の風吹く　千葉縣　葛岡花子

○笛の音や白毛ふさ〳〵春の野を手がひの牛に小羊のむれ　山城　入田文子

○獵二つ河を横ぎる影見えて閣上歸へる晩雲鐘聲　常陸　酒井ふく子

○花めてし春は蝴蝶のゆめと經て實をむすびたる庭の梅がえ　常陸　[illegible]子

○あさぼらけかすみの中の初櫻色ほのみへて香りゆかしさ　下北郡　今村芳子

○我背子か歸り來まさん頃なるに積りけるかな雪二尺程　大和　松本梅子

○深山の人も通はぬ此里も長閑けき春の心地こそすれ　後志　橋本千草子

○春の夜のおぼろ月夜にたゞひとり何おもひれの鐘の音ぞきく　秋萩

○すみれさく野邊をばよそに聲高くおもひあがりて鳴ひばりかな　群馬縣　茂登子

○憂き事も樂しき事もみに深く忍ぶは戀のこゝろなるぞと　智惠子

○吾が妹の薔薇の簪にひら〳〵と白き蝴蝶の戯むるゝ哉　金澤市　高村安江

○春の天かほる花の香うたの聲かすみの衣しづかに靡く　群馬縣　大沼染子

○うら若き妻の調ぶる琴の音を靜かに聞こす花むこの君　京橋　みさ子

○夕雲は鐘の響に消を西へ沈む木の葉の淀みかへして　京都市　大井順子

○春寒き關屋の里を見渡せば烟一筋夕暮の空　安房　みや子

○うき雲は時雨なりけむ行合し野路の車のほろのぬれたる　熊本縣　富丸良子

○神垣は梅よりおくる朝風にぬさのそよぎも香る春かな　大坂　鎌田春枝

○あげ凧のいづくのものと知られども今日も我家の上に來りぬ　茨城縣　清水ふみ子

○佐保姫の手すさみにおる布やらんちすぢに降れる春雨の糸　豐能郡　寺部君子

○　　　　　　　　　臺北　森本繁子
うらやましあなたこなたの花もめて柳もうつしながれゆく水

○　上総　鈴木梅子
春雨のなごりの露の花の上に影をやどして月匂ふなり

○　長崎　北尾燕子
橋の上に朝とく人や行きけらしかすれ〴〵に下駄の跡見ゆ

○　下総　すみれ子
皆人の心の玉をみがきなばやがて御くにの光とぞなる

○　遠江　藤野矢須子
長旅の心するらんやせ蚕のはらも越えつゝせなも渡りつ

○　下野　手塚妙香
友ゆきてひとり思ひにくれぬれば風なきに散る白桃の花

○　越後　梅香子
うたひうたふ聲も長閑に聞ゆなり梅もさかりの士族やしきに

○　横須賀　田口清志
行く雁の姿も見えぬ春の夜は月も霞みて見え渡るかな

○　横濱　安藤廣子
捧げんと文かくもとに通ふなり君が植えてし庭の梅香

○　佐賀縣　樋口御幸子
天地の物音たへてわびしくも五月雨の降る黄昏るゝ暮

○　千葉縣　三橋たけ子
梓弓春をはつげて梅のはなかほる園生に鶯のなく

柳　　京都　張田秀子



○　牛込　佐藤ふさ子
ふるの世の夢甦えのこる石垣に三つ二つ咲く朝顔の花

○　三重縣　川原操子
薄絹につゝめる玉と見ゆるかなかすみこめたる夕月の影

○　伊豫　某女
亡き友のありし昔の偲ばれて思はず手にす一管の竹

○　上総　内山雅子
歌風に鄙の俚唄節よせて夕野を歸る桑摘み小女

○　門司　瀰吉はるみ
白羽の鳥たつ見えてみんなみの空に湧きけり紫の雲

○　紀伊　林稔子
人しれず軒に忍へば門の戸をたゝくよりなほくるしかりけり

○　大坂　日高豊子
まやの山夕陽まばゆき汐さいに眞帆片帆ゆくちぬの海哉

○　臺北　稗貫美都子
人集ひ火影の匂ふ殿室にむかし語りぬ波荒き夜に

○　周防　粟喜子
春風や花かごさげし少女子の庭にこぼれぬ玉椿かな

○　靜岡縣　吉川啟子
君がみ手にいけられにけり我部屋の栞ある梅よかほれしぼまで

○　石狩　篠原靜枝
葦野に追いつ追はれつ鬼ごつこ下駄も草履もあちらこちらに

○　上総　關　芳枝

曉の月落ちんとす樹ばやし若葉の上に塔そびえ見ゆ

○　上毛　飯島きよ子

さら〳〵と枝に落花の音もして朧に匂ふ春の夜の月

○　德島縣　西野ひさし

ちる梅を針てひらいし幼時そゞろ戀しき今日の庭の面

○　呉市　神波はるゑ

麗日や君住む方を望むれば霞に見えて聞ゆ舟うた

○　神田　杉山常子

この川のしもに詩歌をめづる人居ますときゝて花ながしけり

○　伊豆　加藤爲子

みやまぢや咲く花かげを辿りゆかば幸ある里にいでんかと思ふ

○　岐阜縣　花井花子

絶間なく小雨そぼふる春一と日とのゐの舞妓と歌を語りぬ

○　德島縣　岡本さかえ

雲雀なく春の野道に分け入れば草のみどりもなつかしきかな

○　廣島縣　勝丸りよ

紫の雲かとばかりうたがはる小萩のもとは兎たわむる

○　宮城縣　梁川文子

そよと吹く風のたよりに鼻を打ち香はなんと答へらるべき

○　舞鶴町　菊枝

さし入りし弦月寒く如月の吹き來る東風に梅匂ひぬる

○　安藝　勝丸靜子

ぬかだれて美し人はさまよひぬ櫻吹雪をかたにあびつゝ

○　堺市　川野清子

初夏や深き緑の中にして朝の鐘きく天王祠かな

○　周防　相本たね子

美しき秋の紅葉もはや散りて枯木にとまる鳥ぞさびしき

○　越後　外山れつ子

梅の欄に兵刀とりてみつるかなながきわが髪下げ髪にして

○　たつ子

今年より八十の湊を舟出して行末ながき君が年のを

○　京都　濱部風窓女

紫殖三里かざす少女の繪日傘につがひの蝶のあとしたひ行く

○　八王子　小池咲子

殘月に廻廊冷へし殿の朝を海棠賞づる黑髪の人

○　岡山縣　小林雪子

鶯や梅の小窓にホーホケキョー文讀む人の心いかに

○　下總　目等君子

うちよする波の枕にこよいよりうらめつらしき夢やむすばん

○　常陸　平澤やよひ子

賤が家も梅見の月となりにけり薄月照らし梅香ふなり

○　和泉　高橋輝子

うららかな春の日中に庭に出て小鳥の聲を聞く嬉しさよ

○　宮城　すみれ女

手植せし庭のさくらの初花をかざしにせんと乙女子の乞ふ

○　大阪　岩瀬きん子

すぎし日の別れは今も身にしみてわするゝひまもありなんものを

○　中津町　やま川

垣こして路へとたるゝ八重櫻の下枝にものありいざ讀みてみん

○　茨城縣　鵜殿宇多女

めづらしき花とぞ見ゆる遠山の木の間〳〵に殘る白雪

○　紀伊　中田雪子

紅梅に黄金生るかと二度見ればこがれ色なる匂ひ鳥かな

○　相模　石井和子

故鄕を遠くはなるゝ春の日に紅葉の里をいかで忘れん

○　尾道　石原こいち

はら〳〵と文よむ窓に散る梅の花の香にほふ春の宵哉

○　豐後　都月少女

暖かき日は早窓に照り込みて猫は自分のかげとすもとる

○　千葉縣　中津すゑ

夕なきや朱の帆あぐる百千船今し磯馴の松を縫ひ行く

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

長閑さや帆柱並ぶ港口花の都は霞かゝれり　下野　川田よし子

○

君に別れ土樓わたれば夕陽は白壁の家を斜めにてらす　千葉縣　小澤てふ

○

筆取ればしたゝか濡れる戀衣時雨降る夜の君はいづこに　紀伊　笠松壽美

○

幕のまんまくうたせ御座近かう孝女召されぬ紅梅の里　往郷庚　青木政子

○

入海に三つ四つ見ゆるかの漁船かすみにきえて春雨ぞふる　遠江　藤野浜子

○

春風のまに〳〵かほる紅梅のさきたる梅ぞ春の初花　岡山縣　靜舟女

○

うらぶれの春風に吹かれつゝふむも恥かし古里の山　南豐　藤の家るり子

○

紫や源氏に註す上臈のありとぞ思へ紅梅の窓　四川謙子

○

池に浮く藻の間に遊ぶ魚に似て月よき庭の木影を歩む　長崎市　一瀬絲子

○

春の夜の師匠もどりの唄ひ子やつゝみかゝえて濠端を行く　四谷　入重子

○

賤の女が草をかりつゝ歸るさの野道にさけろ白すみれ哉　常陸　鈴木花子

○

逝く駒をとむるよしなし春の日は二十日ばかりになりにけるかな　茨城縣　佐藤靜子

○

あとけなう眠る小草の夢かともかすみは引くよ春のあけぼの　千葉縣　種村かすみ女

○

たれが來て何を祈るか神さぶるみ庭に寂し柏手の音　愛知縣　成田いし子

○

かげろふのもゆる春日にうちむれて若菜つむなり里の乙女子　香川縣　松井一枝

○

松風の音ならで訪はぬわが宿に春ぞとゆひて鶯の來ぬ　渡島　北澤白雨

○

山寺の鐘のひゞきに花散りて童やすめるうしふせのさと　靜岡縣　ふみ子

○

見る我の姿かたちは變れども昔ながらの庭の白うめ　京橋　野田初美

○

櫻花かさしてかへる夕暮はわが黒髪に春風ぞふく　能登　淺見春月女

○

夜もすがら友となしつゝ文や見んさやかに照らす燈火のかげ　那賀郡　和田岩子

○

賤が屋の庭にも床し白梅の道行く人も足をとどめて　周防　うめじ

○

秋の暮れ落葉の音におどろけば野道にいそぐ馬子のひな歌　青森縣　久保石子

○

山つゝじ紅きは見えて朝霞たが吹く笛や細りて聞きぬ　大阪市　山内溪子

○

日はくれて月も出でぬに星の影歸る乙女のにぎはひにけり　常陸　大崎芳花子

○

春の野に菫の花の咲く頃は色なき露に匂ふ紫　京都市　上原芳子

○

春の夜や笛をしらぶる僧正の昔をしのぶ嵯峨の御寺よ　伊勢　岡本しげ

○

雨あがりそゞろあるきも田の畔にしろきみすじや青きすじ見る　丹波　齋藤笑子

○

常磐なる御園の梅の咲き染めて杖引く人のおちこちに見ゆ　茨城縣　中山蓮江

○

身につらき今はなほさら樂しきのゆたかの夢も末に見るらむ　柏崎町　町田竹野

○

來人にわが紅絹うらを吹飜し花見とは言へにくき君かな　常陸　今泉磯千鳥

○

行春や椿ちるなる尼寺に響うつ人の美くしきかな　芝　長谷川靜枝

○春の日に丸窓開けて歌ふ子の姿かげろふ野の家にして　靜岡市　根岸れう子

○咲くむめに來なく鶯音をたえて又淋しくもなれる庭かな　栃木縣　豐子女

○江にうつるくろきみすがたゆら〳〵とゆれてきえゆく初春の夕　國吉町　今井しげ子

○忘れずに尋れ來たりて庭梅に我ものかほに鶯のなく　米澤　相田とく子

○いたつきの君へ參らす玉章を書く夜は寂びし梟の聲　羽前　白梅女

○梅の入頬紅染めて好き人に早く來ませと香の文送る　三河　鈴木いつほ

○愛らしき姿を花にたとふれば消さき心は秋の夜の月　三河　成瀨君子

○朧夜の花匂ふあたりうす絹に包みし如き月ののぼれる　美濃　內藤みち

○朧月みめよき人の門の桃に吐息もらしぬ何を思へる　深浦　船水白梅子

○冬の日に積りし雪の解るまにのきは時雨るゝ春日和かな　佐賀縣　橋口御幸子

○さほ姫の春の手染の玉柳雨降るごとに色ましにけり　大阪　川島あい

○さ小女が今日植渡す千町田のみどりの早苗風かをるなり　香川縣　松女

○あたゝかき天父の愛と春風は孤島を吹きぬ黑髮の人　伊勢守　岡季子

○流れ來るべに筆のあと岸にしてそゞろに忍ぶみなかみの人　越後　文枝

○谷川のつららも解けて春風に汀の若菜もえそめにけり　上總　古山はつ

○三とせ經し歌反古出し思ふかな亡き人こひし梅かほる書　山城　梅子

○夜もすがら窓うつ風に日記あけぬなみだのたれよ友の水ぐき　佐野くに子

○山つゞき一本松のかたかげを世に二つなく我は住み居ぬ　周防　熊野縫子

○花に香を風のたよりにたぐひてや夜さむの空に鶯なくも　栃木　はな子

○あわ雪の松かしつ枝にとけやらで春また淺き庭の面かな　日本橋　松岡千代

○ほの〴〵とみ須磨の浦の松が枝にうすらぎ殘る有明の月　兵庫縣　高倉逝月女

○緋縅に身をよろひたる初陣の若き勇士に蝴蝶まひよる　伊勢　一翠女

○立かへる春のものとて野も山も霞の外の色なかりけり　群馬縣　志賀はる子

○夕籬の身にしみ〳〵と響く時鳥の聲する故里おもふ　駿河　小長谷貞子

○枯草も今朝は思ひの化粧してうら笑くしき初霜の花　三河　天野淸子

○萬物の笑ひ喜ぶ野に立ちて歌ぬらしぬ昔思ふて　大分縣　平田小春子

○朝風に嘶く駒を鞭打ちつ大守ほゝゑむ千町田の秋　佐渡　本間みづほ

○朧夜をはのかにかをる花の野に彩衣迷ふ空思ひ居ぬ　越後　佐藤みき子

○世をうらみはかなく悶えかくしてそ終焉のさまをまたん身なれや　神戶　羽室夢子

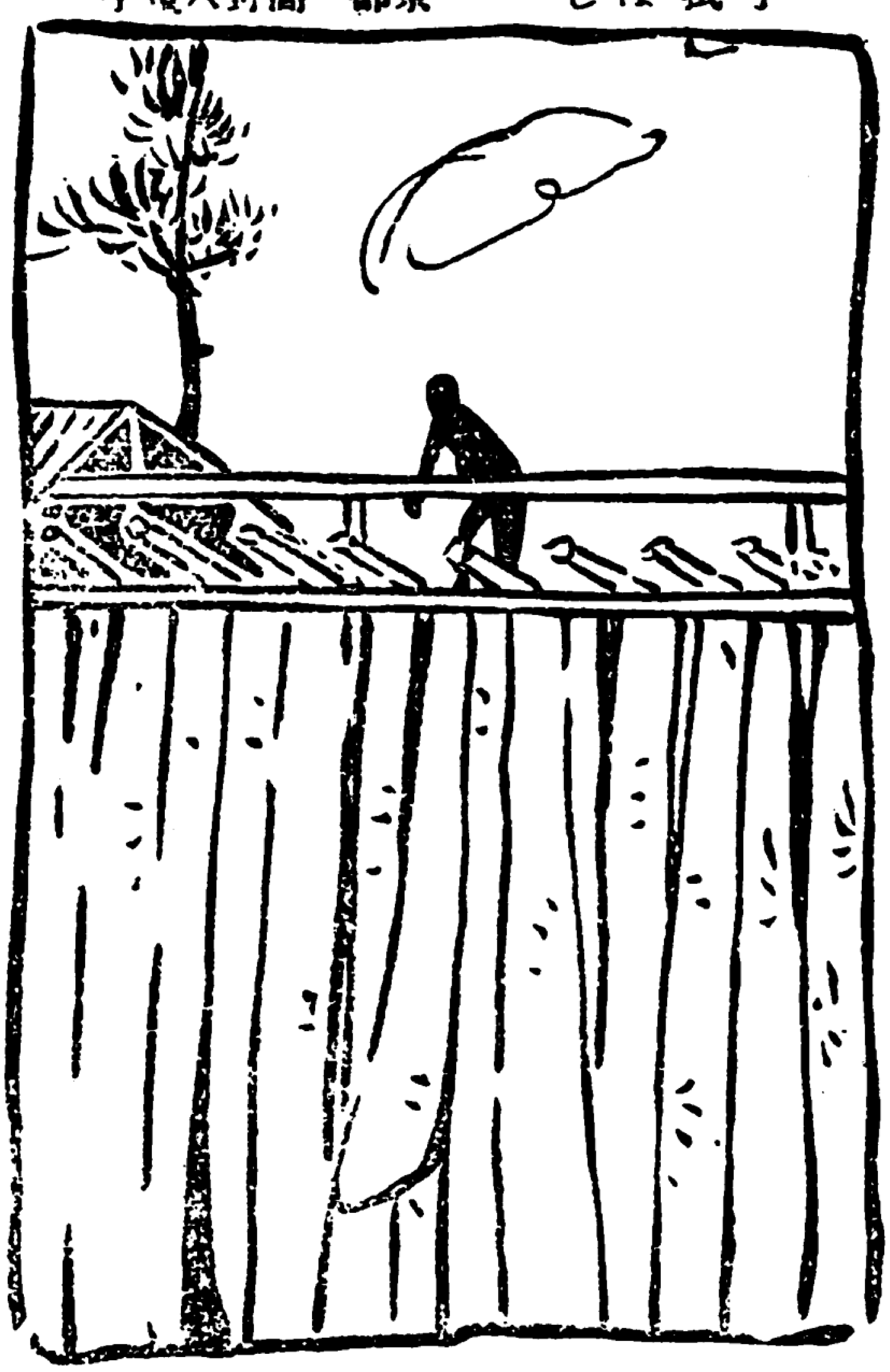
○君がすむやかたに咲ける梅の香を吹きてそ送れ東風にまかせて　尾張　淬金糸子

○咲く花にをくる春風そよ吹きて身にふさわしき初袷かな　德島縣　花びし

Digitized by Google　　Original from HARVARD UNIVERSITY

○山形縣　坂野琴子
桃色の裸衣よそえて手弱女が黄金くむなり月宿る井戸
○茨城縣　鈴木勝子
春日和菜の花匂ふ畑間道かげろう燃えて日は長閑なり
○岡山縣　國富榮子
必ずよ教へしことを忘るなと嫁ぐ門出に母ののたまふ
○筑前　田中とよ子
うす月夜菅笠一つしのび行く春日路はるか白き花ちる
○伊豆　尾崎そひや
秋風や小鵯むれとぶ院の夕うみ柿落ちてもの思ふ人
○牛込　梅宮子
人訪はぬ此山寺の古木にも春やきぬらん鶯のなく
○呉　白梅女
丸窓に香り床しく満ち満ちて月影白く梅の花散る
○千葉縣　關まさ子
山々の櫻かつ散る薄月夜天使の如き鳥鳴き渡る
○横須賀　濱田守子
降りしきる吹雪をまとに門に立つますら武夫が重きつとめは
○上毛　溪韻女
牧童のこまにまたがり夕もやのこもれる中を笛ふきて行く
○水戸　重子
昨日まで淋しかりし我庭も今朝より梅の綻びにけり
○加賀　小島清子
公園に櫻花見る美き人を女神と見たり春の夜の月
○京都　黒野信子
はたゝ神狂ひやみたるあけ方を關山越ゆる荒鷲のかげ
○上總　渡邊汀子
朧月しのびやかにとほとほと花の門うつ被衣の人よ
○丹後　鹽見千代子
亡き母に我聲似ると人いひし夜なり小さき雨の音きく
○和歌山　夏子
みやま路の氷やとけむ落たきつ瀧のきはひもはげしかりける

手拭ほし　京都　高野八重子



○周防　栗喜子
ひさかたの光りさしそう白銀を梅と欺く雪の朝かな
○下總　三森ゆき
菜の花のつづく野末に川ありや白帆三ツ四ツ見えかくれする
○津市　越村文枝
つみてける木のめ春雨けふりきて松風かすむ宇治の山ざと
○讃岐　白ばら
燈籠の光おぼろに離家の障子にうつる優影二つ
○美濃　佐野富美子
寒くなれば訪なふ雁はしげけれど君が訪づれなきぞかなしき
○大和　白衣
かへるへき里はかすみにとざされて花にやとかる春の朧夜
○仙臺　さだ子
ほのぼのとあけ行く空を仰ぎつゝ君のいさをを祝ふ今日かな
○岩代　入發すみ子
朗らかの聲に呼ばれて窓開けば鶯去りて梅の花散る
○美濃　やさしの子
おそろしき夢に今しもふとさめて憐れか弱き身をかなしみぬ

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

○　天鹽　秋雲女
病む姉の顔見る毎に曇り行く姉の手植の白菊の花
○　磐城　登利子
君か代の千歳のよはひにくらふれば濱の眞砂の數はものかは
○　因幡　宮本深海
春の海おちこちに鳴く濱千鳥夕日をあびて波の泡をふむ
○　奈良縣　清水春陽
うちしめる野づらの園に生ひそめし草葉の末に春雨ぞふる
○　大阪　生田みのり女
髮とくと草刈女笠はれぬ木かげの石に腰かけながら
○　神奈川　篠崎幾子
春雨はくまなく晴れて梅の花おく露毎に月やどるなり
○　周防　萬差子
たえ〴〵に鷄の聲きこゆなりあけがた寒き木枯の風
○　飛驒　千代子
除夜の鐘やみにひゞけば吾がふりし思ひをのせて年はゆくなり
○　濱田町　三明千鳥子
銀髮に木枯吹きて栗毛なる駒いなゝきて武者一騎行く
○　石川縣　稲岡久子
遠山に殘んのゆきと見ゆる哉今を盛りと咲く梅のむれ
○　遠江　浜崎照世子
友がきをむすぶえにしの白糸はいく世ふるともいろはかわらじ
○　上毛　津久井ふく子
眞淸水に映らふ月の影見れば心の底もすみ渡りける
○　相模　柏原美奈子
冴え返る夜寒の空の火事消えて苗代小田に月影白き
○　遠江　原木すみれ女
冬枯れし園生に獨り寐梅の吹く風をかこちがほなる
○　神奈川　木村はる
窓際を千々とさへづる小鳥さへ春は歌ふて秋は鳴くらむ
○　沼津　飛奈久枝

里の子が野邊の露間をかきわけてたづれてぞつむ初若菜かな
○　茨城縣　松澤爲子
しのぶの香微に匂ふ涼風に風鈴なりて人氣配する
○　宮崎町　卯の花子
行水に赤き花瓣そとうかせ小山めぐりぬ春の暮
○　新潟縣　森白蘭子
遲々として夕日を受けて小さき棺冬枯野道たどり行くなり
○　靜岡縣　永井淸子
鐘の音に涙をはらふすみうめの袖にこぼるゝ春の細雨
○　大分縣　太田千枝子
訪はまほし野邊の若草踏み分けて梅が香馨る君が庵を
○　和泉　さよ子
さ夜ふけて文かく手すら冷えぬるをつゞれ着る子の臥床思へは
○　茨城縣　花月女
暮にきりや霞の其の中に白帆隱るゝ櫻川かな
○　攝津　和久蕪子
彼岸會のうらゝ日和や京へ一里繪日傘つゞく菜の花のみち
○　京都　かをる子
春ながら霰まじりの小雨して梅の香寒し山中の家
○　信濃　金衣公女
紫に世界を掩ふ明け方の雲美しき中にわれ立つ
○　大阪　よしの
駒止めてこてかざしたる武士の鎧の袖に櫻花散る
○　越前　上原嘉子
窓押して秋の雲見る山里や微かにひゞく入相の鐘
○　大阪　鹿島あや子
須磨の浦浪のよる〳〵漁り火の淡路島山いと近う見ゆ
○　三田　小林順子
よく茂る四十二の坂は姫小松幾千代榮ふ深緑かな
○　山口縣　空野花子
端居して花見つくるゝ春の日は靜こゝろなき思ひますかな

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

○　横須賀　齋藤松代
朝晴や若芽ふく木の雫して日影透りぬ小草の下に
○　常陸　坂本みさを子
おのが影友と見えつゝあるゝかな糸につながる野邊の春駒
○　瀧野川　菊垣田鶴子
心あるに折りし小枝は梅ならでさあらぬ方にうぐひすの聲
○　埼玉縣　鈴木幸枝
ふりつもる雪ふみわけて訪れつるふかき心を人は知らなん
○　三重縣　川原操子
隙間もる梅のかほりに夢覺てあけかた寒き月をみるかな
○　四谷　山脇雪江子
取り出てゝは見ぬ世の姉を偲ぶなる花見小袖のその春廿年
○　新潟縣　川崎てい子
黒髪の香りにむせび鳴くかとも君と並びて鶯をきく
○　堺市　川野清子
美しう咲きぬる桃の下路を二人なみ行く人れたましき
○　京都　中村さち子
旅の路霞かかれる小村より鷄鳴きて梅の花散る
○　下總　花田しん子
春風に吹かるゝ妹の背負ひにし丈に餘まれる緑の黒髪
○　備前　藤女
夜をさむみ結びしつらゝもはる風にとけてたなびく青柳の糸
○　三重縣　北村みつ子
畑は菫姫は花びら六人の舞ふり袖に春の風かな
○　石見　八杉都志子



夕暮　愛知縣　成瀬つたへ

京の朝夢の街々めぐりつゝ花賣る乙女みめ麗はしき
○　津市　德田桑子
猶眠る鈴鹿峠の一つ茶屋眞晝靜かに桃の花散る
○　上總　鈴木よし子
しめやかに秋の雨ふるよもすから一人日記書く海添の宿
○　大分縣　後藤さえ子
潟あがりを紅さす春の宵の殿藻の灯戀ひよる濱千鳥かな
○　京都　上原芳子
鶯の初音聞ゆる一つ家に花の香誘ふ春風ぞ吹く
○　京橋　飯塚時子
月をきぬ風すずしく吹き出てゝはら〳〵と散る庭の白梅
○　奈良縣　下澄すま子
土筆つむ小女のむれもいそぐなりみどりにそよぐ夕暮の風
○　靜月生
ほの〴〵と朝日にとくる梅の雪靜かにうたふ鶯の聲
○　山口縣　秋野桔梗
青柳の下に若菜つむ童等のかすみの隙に見えつ隱れつ
○　淺草　まこと子
歌思ふこころはいつか紅梅の木の下かげにさまよひてゐぬ
○　札幌　服部はる子
大君の御代の光りに開けゆくえぞが島根も賑ひにけり
○　伯耆　船田時子
今こんとなくまつむしの聲きゝてあけてうらめし有明の月
○　群馬縣　飯塚美起子

和歌

風もなく散る花見ては人戀し亡き妹戀し春のゆふぐれ
○　下總　平川澄江子

春姫が愁につゝむ御瞳があはく小さきおぼろ夜の星
○　沼津山縣梅園

心なく吹くにはあれど大風よ戸まで破ぶるな今宵ねられぬ
○　名古屋　瓏子

逝く春やあたり小闇き川の邊にたゝすむ小女何を思へる
○　岡山縣　播磨吟子

梅匂ふ靜けき窓に書を讀めば鶯鳴けりわが机先
○　信濃　太田富志女

よそに見て歌のやうなる野の人の白き小笠に泣きたき吾れや
○　千葉縣　内藤秀子

梅咲きて鶯一羽客ひとりわが病む窓のさても靜けき
○　周防　谷満緒子

霧青う光りもかゝる湖にうつして雲に入る白鳥よ
○　大坂　加藤琴子

君こひて詩ものし泣く夕暮を櫻時雨の柴の戸を打つ
○　上毛　宮下美奈子

榾火焚く團欒よ翁の白き鬚昔戀云ふ笑若き歟
○　芝　やよ子

繪筆おき丸窓あけしいと若し東風あたゝかに白き梅ちる
○　伊賀　伏見蔦子

草笛にうつゝなかりし闘越へは櫻月夜の宵の間にして
○　越後　五十嵐みつ

君來ませいざ歌よまん君來ませ月影淡き梅さく堤
○　士氣　井内津加子

谷の水峯の嵐をよそにしてさわぐものなき山陰の庭
○　高知縣　美枝子

木の葉ちる寂い嵐の音のみかをしか通ふなり秋の夕ぐれ
○　相摸　野島里子

きらびやかに軒ごとかざる花瓦斯の龍宮めきし春の町かな
○　羽前　大谷部てい子

云ひしらぬ思ひを秘めし巡禮が破れし小笠に夕月のさす
○　千葉縣　池上信子

老人のなみだぐみても見ゆるかな昔の春やしのびいづらん
○　豐後　西野袖子

打ならぶ八戸の村の花紅葉すぞろに戀し京の夕ぐれ
○　大分縣　立川つや子

姫君の仰せ畏み夜の花に傘さしてけり五月雨月夜
○　和歌山　さき子

朝のいそ金羽銀羽のとりなきてほがらほがらと松風の吹く
○　新潟縣　孤り羊

燒跡に並ぶかり家のとま屋根を淋しく照らす冬の夜の月
○　秩父　近藤とく子

みしめなは春心地して神垣の松ものどけく年むかふらん
○　澁谷　好子

美しき初日の光背にうけて小川に遊ぶ鴫の一むれ
○　陸前　鶴木とみよ

月姫のみ手に懐かれ月の宮ゆ歩むと思ひ醒めにける夢
○　岩手縣　小野寺巻子

霧のなか道ふみわけて人來と見しは野中のかゝしなりけり
○　磐城　齋藤光子

新しき襖うたして灯して絵合せすらし雪の大奥
○　熊本縣　松本つい子

秋暮れて四方の草木は落葉して實は結ばねど雪の花さく
○　岐阜縣　柘植ちか子

雪ぐもり火を吹く山はほの白う朝窓明けて君と眺めぬ
○　君津濱　勝作子

梓弓はる日に雪もとけそめて里の少女子若菜摘むなり
○　陸前　小野とくゑ

のどやかにかすめる野邊に小女子の日傘群れ居ぬ若菜摘み居りぬ
○　栃木縣　宮島よしヱ

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

つづれ着に夕日をうけてさちうすきおうなひとりがあけの足袋ぬふ
○ 越後 松村芳子

秋風に須磨の浦波打ち寄せて心にまかす音ののどかさ
○ 青森 村林やす子

艫のとまり水にくる春の日に緋ぶさひとゆれ若き人ゑむ
○ 岐阜 篠田とみ子

人の目に遊ぶと見えて水鳥のあしに暇なき我が日毎かな
○ 備前 我澤素枝

こぞの露まだ其まゝに消えやらて峯ほの白き春の山かな
○ 北會津 白井絹江

思ひ出の夜半のねさめに時雨して國にさびしき灯火のかけ
○ 土佐 高橋白ばら

磯づたひ足なみかろき一むれを追ふが如くによせぬ春潮
○ 神奈川 花月女

亡き母のみ墓に佇む折からにあわれ落ち來る白萩の花
○ 大坂 木村春江

さすらひのわれにしあれは春なれどしじま身にしむ暮の色かな
○ 羽前 杉葉女

春の山わが戀ふ君も居ますやと聲を限りに呼びても見まし
○ 日向 村雨

君戀ひてあこがれ出てし我魂はかゝらず今はうつろなるかな
○ 愛知縣 内山文子

畑中に立てる墓場の二本松靜けき野辺を鳴くからすかな
○ 伊勢 濱子

朽ちにける垣根たよりに咲出ぬ露を命の朝顔の花
○ 大阪 守脇愛柳


子守 小ぎく

わがやどの垣根のもとに珍らしく三ッ四ッ梅の咲き出にけり
○ 下総 長田雪洲子

冬の日は見る間に落ちて枯澤の影に下り來る雁の一群
○ 静岡縣 清水幸子

なつかしき友に別れて其の夕べ淋しき姿月にてらさる
○ 京都府 中村さち

川沿やほのかに見ゆる水車夕榮の野に胡蝶舞ひ舞ふ
○ 府下 森田きよ子

むつまじう母諸共に張物の上に散りけり桃の花びら
○ 土浦町 前原かすみ

繪行脚のやどりもとむる梅の村月もおぼろに匂ひぬるかな
○ 駿河 深尾研子

何物のかげや追ふらんおばしまに星のきらめき見て立つ君は
○ 近江 藤岡とく子

志賀の浦や波も靜みて朝月のかすみ晴れゆく唐崎の松
○ 筑前 寒田ひさ子

五位の聲山の端近く消えうせてあたり靜けきあけぼのゝ空
○ 秋田縣 三浦月の舍

鶯や雨にぬれたる柴垣にうす煙はふあさの溫泉の村
○ 肥後 石寺とりゑ

緑なす松の梢に十五夜の月と千歳の鶴や舞ふらん
○ 播磨 孝壽子

吉野山うす絹の霧奥深うはづして見せよ峰の春
○ 石狩 小田なみ子

玻璃の窓からゝとひけはふりむきてまたふりむきて過ぎにけるかな
○ 横濱 新郷樂子

○大空や日影かすめて黒雲のかけり行くなり沖津島山　福井縣　小川よし子

○喰ちぎる袂にはかへりてにくきかな見はてぬ夢をくだくあられは　熊本縣　猿渡光子

○神の宮ほの〴〵かすみかすかなる箜篌の音もしてしづかなるかな　群馬縣　森下花子

○珍かに粧うる子も交り連れ歌舞伎ふれ行く春の町かな　大阪　ふさ子

○かたつむり小雨にぬれし大芭蕉の葉末しつかに首出していぬ　近江　太田靜花

○ふきすさぶ木枯やみて雲井より綻び出てし六ツの初花　熊本　山崎國子

○ちよろ〳〵流るゝ小川に花ちりて夕日靜かに山羊の聲する　亀井戸　鵜澤喜舞子

○出水あと泥足のころ破れ椽の日向に妹は人形ほして　仙臺　中目のぶ

○苔の香や春雨けぶる朝井戸に古き釣瓶ゆ水のみなれば　常陸　嘉月幹子

○千早振る伊勢の神風音なぎて吉野の奥も春や知るらむ　京橋　三好まさる

○大君の居ますみ城を拜まんと紅葉のみちに引かれ行く身は　美濃　傍島みゆき

○なぐさめて心ろすゝませ終ふ身かと運命思へば又もなかるゝ　磐城　天野美枝子

○咲きそめし軒端の梅にうぐひすの春めきわたる初音つげけり　熊本縣　池邊しづ子

○罪なげにすや〳〵眠るみどり兒の何を夢みてゝ微笑むやらん　葉浜

○君まちて悶ゆる胸にまど押せば二つの胡蝶すがたかくしぬ　下谷　橋本波子

○斧ゝたぬ神代の森は百鳥の戀の譜もよき朝日和かな

○降りくらす雨のひれもすわびしさに思は馳せる故郷のそら　芝　ひさし

○姉君は淋しう笑みてわが肩により添ひ給ふ櫻散る暮　信濃　世良田ゆう子

○鶯よ汝がなつかしき一聲をまちつゝけふもかくして暮れぬ　下野　くに子

○百數の都大路の初雪をふみ破りゆく牛車かな　京都　八重女

○牛引きて出づる童の宿ならん桃咲くあたり朝煙たつ　下野　野中とみ子

○小鮎とぶ堤のかたへ旭さして霜とくつる梅色美しき　白葵子

○花笑ひ胡蝶もおどる春の野にイエスのみ名をわれたゝへまし　臺灣　穂賀みつ子

○大晦日行來の年を一時に送り迎ふる除夜の鐘の音　安房　ゆき子

○ときはなるみ代のみゆきをいたゞきていく代かへぬる住よしの松　仙臺　相澤張子

○花と見し高根の雪はいつ消へてけさは霞の立ちわかるらん　靜岡縣　黒田繁子

○繪筆もたは染めて見まほし五つ六つ青海原を走る白帆や　紀伊　紫雲女

○長閑なる梅や柳の村はづれまだ白雲の消えやらぬかな　靜岡　しらぎく

○そだくべて都の客人もてなする山の夕をましらなくなり　伊勢　佐々木らく子

○若春に谷間を出てゝ里こひて梅にやどりて鳴くやうぐひす　伊豆　杉山すぎ子

○草の香の風にゆらめく露小みち驢馬の小鞍のゆられつゝ行く　飛彈　ゆき子

日記文

中村文學士選



▲**規定** 文體は問はざれど日記に限ること、實際の日記其儘にても可なり、二十四字詰三十行以内、用紙前同斷、一人一章限り、投書締切毎月十五日、懸賞品は甲種規定に據る。

四等

○去年の夏の記

本所區龜澤町一ノ卅一　秋山欣子

八月九日、朝の茶まゐりはてゝより夕顏の綠滴らん許の涼しき井の端にいて、裾からげ、衣手ぬらして、少し許の衣など洗ふ、けふもまたあつさ堪へがたかり。向日葵の少しく西に傾きし頃にやありけむ、雨をよぶ蛙のころ〳〵小田や山田にさはがしかりしが、そも暫して、雲の峯崩れかゝりし隙より西北かけて、ッッーと鞘走りし電火の閃き、追ふが如く蕭殺たる白雨は來りぬ、濡れつゝ走る農夫の一群、「黄金の雨ぢや、ヤー皆の衆、今年あ米の飯食へるだあ」さもうれしげに謡歌ひゆくなり、妹等はあはてふためいて、倒しまに蚊帳つり、それ御豆よ線香よと、人心もせぬさまなり。われは掾にいでて美しき稲妻を見ながら、「稲妻やきのふは東……の句を思ふ、すが〳〵しき麻蚊帳に、香の煙ゆるう流るゝ程、雨やみ風收まりて、空さりげなう、ほの赤き山王森の頂より物見やぐらへかけて、天なる姫が夢のゆらぎと許り淡き虹たつ、

八月十日、覺めぬれば細雨蕭々と雨戸うちて、枕邊の時の小車、正しき軋の音に曉深きを告ぐるが如し、起きいてゝ人驚かすも心うしと其まゝに、徐ら手を伸してよべよみさしの「蕪村遺稿」とりいて、そこはかとなくたどるうち、またうと〳〵とまどろみて夢に入らんとする時、芭蕉葉たるゝ裏手の窓にて、ほと〳〵と音するに、また例の水鷄にこそと、えも聞かで眠りき、

明けてよりおもへば昨夜聞きし音は水鷄ならず、愛宕神社の神樂太皷の音なりき、夜詣てての歸るさ、朝顏の大輪一鉢あがなひ來る。

八月十一日、朝の間に、紅白の萩取り交ぜ床に活けつ午後春子様いらせらる、あいさつもどこへやら、一しきり笑聲やまず、暮るゝをまちて、芝生に食卓もちいて、土曜日の家庭講話會を繰りあげて催す、やり水の名殘なほ殘る桔梗の紫に夕月の影さへ淡く匂ひ、植込のあたり、ほのにすだく蟲の音さへ我等が幸を祈るやと思はれて、いよゝ興湧き、九時すぐる頃やう〳〵袂分ちぬ。

（許）馴れたる筆つきなり●

五等

○おぼえがき

鳥取市　上山千重子

一月十日。晴。　寒暖計、五十度半。（金曜）

祖母様の御はなれにと、南天の赤い實の根ごめに水仙を切つて居ると、柴の折戸そと開かれて、お隣から琴借りに來る、お使ひの役は霜ちやん。「從兄さんが入らしつて？」と聞くと、大きく肯いて、新しい洋弓持つて來てね、何か合はさうとて姉様（雪枝さん）を強いてますの、お髭が出來てね可笑しいことよ……」。誰にまねてか身振可笑しく、妻琴抱へて折戸の方へ、送りて庭に立つと、音もなき春の風煙にふれて……。花を挿し終り窓によると、かすかに洋弓の音と琴の音とがもつれ合うて、垣を越えて聞える、曲は雪枝さんが十八番の千鳥!! コロリン〳〵と掛合になるあたり、しらず〳〵口拍子に乘る。午後一時より女子文壇の誌友會に赴く、河越様のお宅、お正月といふのでお忙しいのか會する友僅に九人、それでもなか〳〵興はつきず灯入れる頃やつと袖分ちて歸つた。

一月十一日。半晴。　寒暖計、四十九度。（土曜）

朝早く温泉にいつて、土堤づたひ若草を踏てかへる、にび色の雲の重なり合うた隙から、薄い光が洩れて、遠山は灰色に、紫に、白に、種々雜多に見える。もし私に少しでも畫が出來たなら、こゝの流に繪筆しめして、此の景色を寫して見むものを、口惜しいこと。

午前中乳母の許に小包を出す、私よりはよせ裂れの坐蒲團、妹は手工の糸まき、母様は半襟二筋。

午後小さき客人五人、皆妹の親友である、屏風のかげに袖かゝげて、まりあそびやいろはかるたの聲、願くはあどけなき少女のため春の日長かれと祈つた。

（評）雅にして健。

秀逸

○二日間

三河　桃山須磨子

一月三十日。　靜かな日で有る。今朝始めて鶺鴒が鳴く。三ヶ根山は眞白く旭に輝いて、軒には雫がポツリ〳〵と落ちる。窓へ身を寄せ目を瞑つて聞くと、宛然それが心弱き子の忍び泣きのやうに聞える。學校が休日なので隣家の常雄さんと弟とが戸外で大騒ぎをして居る。其の中に弟は厨に馳け込んでお母さんに「消炭をお呉れ」としきりにねだる。お母さんが「何にするの？」とお聞きになつたら「だるまの眼！」と答へたので大笑ひであつた。彼方でも此方でも餅搗に急しい。もう直に正月が來るのである。お爺さんは眼鏡をかけて椽側で障子を張つて居られる。

午後在京の友綾瀨もと子さんからお手紙が來た。果敢ない身のありさまを細々と認めて返事を出す。

一月三十一日。　お歳暮の送り物を持つて町の伯母さ

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

んの所まで行く。宅を出たのは七時半頃。まだしつとりとした朝の大氣の中に、ところ〴〵に殘雪が斑にしろく、うすら寒い。久しぶりで渡船に乘る。乘合客はたつた五人きり。二十五分で、町の入口松原へ着く。伯母さんはわらはの來たのを喜んで「ま少しの間に成人くなつた」と何遍も何遍も繰り返へされる。歸郷して居る大きい兄さんまでわらはを捕へて「ほんとに大きくなつた何歳だ」ときくので、「十八」と答へると「それではもうお嫁入してもよい、世話をしやう。」なんて調戯ふので睨へてやつた。ほんとに憎くらしい。

（評）達磨の目にてこゝ又文も活きたり。

米とぎ　伊勢　河村富子



○二月四日

津市　越村文枝

今日は新學士吐山の君御越しの日なれば、早く起き出て、御祖母様と散歩がてら挿花を求めにゆき、桃、彼岸櫻、菜花など購ひ歸る。父上御出勤の後、兄上様お祖母様と共に吐山の君を停車塲に迎へしが、昨年の夏避暑にとて阿漕浦に來られし時より逢はざれば、珍らしく懐し。歸宅後直に煮物にとりかゝる。暫くして兄上と吐山の君は一寸散歩にとて出て行き給ふ。下女に昨日の買物の殘りを求めにやる。

紅蒲鉾二枚、三拾錢。摘入れ二合、拾錢。つと豆腐、三錢。伊達巻二本、四拾錢。總計八拾參錢。

十二時すぎ漸く出來上る。去年は蓮根と慈姑と同じ味に煮ていたく不評判をとりしかば、今年は蓮根を少し鹽辛く慈姑を甘味に、其の他それ〴〵一生懸命に調進しぬ。二時兄上様方御歸宅。今日は西洋料理を製らへるとて臺所に出で來り給へど、兄上のは御大名料理とて、他人許り手傳はせ、あたり四方油だらけにして、あと仕末に半日もかかることとなれば、下女と共に切におとめ申すされど、折角のお心づきなれば父上のお歸りを待ちて「オムレツ」スノーエックを製すオムレツは度々こしらえたれどスノーエックは先日先生に敎へて頂きしまゝにて、今日は初めてなれば、加減分らず漸く出來上りたれど、スノーは色に上らず、何やら外見きたなげにて「これてはとてもお客様には上げられぬ」などと御小言を頂戴しぬ。

夜に入りて例のヴワイオリンを奏すれば、吐山の君得意の尺八を弄し給ひ、兄上に例の琵琶歌の奥の手、祖母樣の一絃琴をと父上の申されしなれど、老いたればとて止み給ひぬ。

（評）佳。

○反古日記

栃木縣　藤掛孝子

十一月二十二日。

御庭の菊に置いた、霜の麗かに榮える美しい日。

兄上の御出掛の後、御書齋を掃除する。男と云ふ者は皆仕方の無い無頓着な者。兄上も其數には洩れず、綻びた御召は其まゝ衣紋掛へ、私へおつしやれば宜いに十時頃久し振で河原の好樣入らつしやる。御髪の丸まげが好くにあふ。花やに言うて御すもじを取寄せる、御午飯を一緒に。四時頃御歸り。入替りに兄上御歸り中學時代の御友達の、吉岡樣とか云ふ方が御一緒、直ぐ御飯食べに御二方で御出まし。洋燈の下で花やは縫物、妾は御祖母樣への御手紙。風が出た。兄上の御寢卷を御炬燵へ掛ける。

十一月二十三日。

御日樣は、顔も見せない。外は黒髪風が。大路を掃つて居る。吉岡樣はよべ御宿り。十時に東都へ御歸り慶一とか云ふ御名前。停車塲迄、兄上は御見送りに。花と寫眞ブックを出して見る。五頁の右側の半身、早大の制帽は吉岡樣、裏に『贈松村兄卒業に際し』と。オヤ製紙塲の汽笛。もう御午飯かしら。大分風がやんだ。花やの髪を結ぶ。いそ〳〵御使に行く。留守居して紅葉全集の六卷を讀む。二十頁ばかりで、國元から端書が付く。花の歸つてから御夕飯のしたくする。

夜三人して炬燵へ入る。書見してゐた、兄上が『幸さん明日は日曜だ一緒に寫眞寫しに行かう』と御つしやる。子供の樣な喜しさを感じた。外面は月が冴えて居る。明日は霜か。

十一月二十四日。

ずいぶん深い霜、けれ共小春日和の美しい日。

花を留守居に置いて寫しに行く。私はいつも寫眞顔惡いので心配な。歸途樗牛全集五卷を求める。正午過吉岡樣から禮狀來る。美しい繪はがき。夜兄上の好物なおしる粉をこしらへる、御かちんを火箸へかけはなして、臺所へ行つたので眞黒にこがした。それでも兄上は御椀を御替へ下さる。編掛の手袋を編上る。北風が吹出した空曇る雪かもしれない。

（評）叙事精緻、又日記文の一體といふべきか。

○木枯日記

岡山縣　花子

一月二十日。木枯つよく吹く日なり。東都の兄上より手紙來る。母上例の嬉しき面もちにて、くり返し〳〵讀み給ふ。夜あられにや、板庇を打つ音いと烈しく。思はいつか都の兄上に及びていとゞ嬉しき心地す。

一月二十一日。朝より白きものチラ〳〵と降りて、道

行く人少なし。されど今門に遊ぶ子供等は、平氣にて「雪は一升あられは五合」と口々に呼ばうもおかし。つもらぬ内にと裏へ水仙を取りに行く、三輪程花開きて氣高く可愛らし。夜、今朝よりの雪止まず、益々つよく降りしきる。

一月二十二日。門を重たげに掃く音に夢破られて、さては昨日よりの雪積りたるなるべしと、直ちに雨戸くれば、昨日と見違ふばかりのあたりの景色、今あきらかに見え居たりし二の字二の字の跡も、見る〳〵うちに眞白くなりて、門はくも甲斐なし。過ぎ行く牛乳賣りの小供の、足も眞赤なり、靜かなる天地におのづから物思ひにふけらるゝかな。

二十三日。雪とけの道惡しく、學校の行きかへりいと難儀なり。夜あまり徒然なるまゝ、古簞笥の中片づけんと底を探れば、忘れもせぬ亡き姉上の幼き折の晴衣出てぬ。思ひめぐらせば十とせの昔、花の如き電燈の下に、蝶の如き舞をし給ひし時の晴衣ならずや。あゝ今に其の姿のうすら〳〵覺ゆるよ。思出て多き此夕、我は思はずも紅模樣入りの小さき着物の上へ、あつき涙を落しぬ。

○狂蝶日記

伊豆　佐藤安子

四月四日。氣も進まぬ緣談。義理と人情の足枷手枷にのつぴきならぬ双親の心苦しさ思遣られて、涙を呑んで「ハイ」と不承無性の諾ひ。善は急げと取定められた婚禮日も、片手の内に數へらるゝ樣に成りて、いとど心躍せらるゝを、彼處にも此處にも嫁入の取沙汰して笑ひ興ずる人のさても心憎くや。薄曇。雨になりてあたり一入靜かなり。文子の君この頃訪つれ給はぬは何故ぞ。

四月六日。宵の雨暖う滴りて、晴れたる曙のさても麗かさ。花も咲き、鳥も鳴き、草も匂ひ、陽炎も躍る、戀しきまゝに文子の君を訪ふ。すぎし日の面影どこへやら。病の床に伏せり給ふいとほしさ。快活の君いつに似ず此の世を儚み給ふ。病の故にや。よき程に辭して歸る。母樣あれこれと衣裳選び給ふ。

四月七日。花見に人の狂するならん。懷しき少女の境を離るべき日は近づきぬ。明日の仕度に急げる人々の騷々しや。文子の君の氣遣はれ獨たれこめて居ぬ。

四月八日。一生のはづかしさを綿帽子に隱して花嫁御とうたはるゝ身。夢の心地に遠山家の閾を越せば、急に押付けられし樣に覺えて主婦と云ふ言葉はわらはを蔽ひぬ。華かなりし春の日は俄に曇りて宵の程より狂風天に荒び豪雨地を裂く。銀燭はためきて物凄ゝ、蓬萊たふれて人驚く。歸雁一聲闇中に叫ぶ。折柄對岸に灯飛ぶしきりなり。心にかゝるは文子の君の身の上。

四月九日。狂せる天地靜まりかへりて細き雨のみ霏々として降る。悲しき報せは哀れなる玉章と共に妾が手に入りぬ。文樣ゆふべ歸らぬ人となり給ひしとか。妾にとの文振ふ手に開き行けば薄墨ににじめる水茎の朱

き焔と燃えもせぬべき怨の數々!! 許し給へかくまでに君戀へりとも知らずして心にもあらぬ人に嫁ぎたるわらはが心根汲みてたべ。訪ひし日に一言漏し給はばかくも果敢なき最後を遂げ給はざらましを。此方こそ一入の恨なれ、吁々戀にはもろき人の身を憐み給はぬ御神の怨めしや。妾が悶えの歴史は更に哀なる悲を交へて永久に淋しき卷をや繰るべき。

（評）筆は熱したれど、あまりにこしらへ過ぎたり。

○わが日記

南葛飾　ゆづ子

二月一日。晴、今日は一月おくれの元日、地方の人々はさぞめて度いお雜煮を祝つて居るだらう、祖父樣の御命日故墓參に行き香花など手向けて歸る道すがら自分より三級程下てあつた同窓の友に逢ふ。昔も今も同じつもりて、おや花ちやんと呼びかけると、今日はしばらくなんて大人びたお言葉に一寸狼狽、午後本箱の塵ほし。毎日電報紙上の小諸騷動をよむ、惡人供のにくらしさ。

二日。曇。今日は舊曆の元日。誌友に出すべく手紙をポストへ入れに行く途中、或る家の主婦が煮飯を喰べて居たところと見え、茶碗を片手にお湯だか茶だかを飮みながら、往來へ出て大聲に子守を呼んて居る樣はあまり見よくも思はれぬ、二六紙上に、迪宮殿下の御活潑と題して記しまつれるを幾度か繰り返す。午後六時神佛へ御燈を上げ乍ら女子文壇を見母上に笑はれる。

三日。曇後晴。「海苔すき」て朝飯が十時、曇では海苔が乾かないと母上と心配して居る中、晴れ上る。午後使に行く道て、或る家のお爺さんが、日向に目鏡をかけておはち入の造作をして居るを見て、わらはも祖父樣がほしく思ふ。夜は女子文壇と首引。

四日。晴後曇。例の通り「海苔すき」て正午までまごまご。今日の小諸騷動は、誠忠なる老女千代野がお役御免となる、口惜しく思ふ。午後から豆蒔の用意、またーッ年をもうける。つくづく嫌になる、しかし寒があけると思ふとうれしい。寒中は寒く暑中は熱いに極つてゐるが、老たる御兩親が毎日寒いくくとの御聲を聞くのが、何よりつらい、今日から立春と言へば、少しは凌ぎよくなるか知ら。どうぞ餘寒の烈しくないように。

（評）今一いきのところ。

○病床日記

山形市　土井ちとせ

三日。南の丸窓より入り來し花びらは、我が病みやせしほそき手の上に落ちぬ。あゝ、運命の神のみ手に抱かれし身は、此の落花を見ても誠に思出多き事哉。吹き來る風につれて絕えず散り來る花の、そこには、千萬無量の深き思ひや殘るらん。

四日。終日强き雨横ざまに降る。小川の淵の紅ばらはいたくくしう、うつむき、いとあはれなり。夕方、寄宿舍に在はす仁子樣よりお手紙くる。あゝ、同じ學び

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

の友垣には、日に日に、進み行かるゝものをと思へば熱き涙頰をつたはりぬ。

八日。數日來の雨名殘なう晴れいと快し。十時頃年子樣來られお見舞にとて卵一箱下さる。西空の華やかなる夕暮の色は、次第にうすれ〳〵て、世は恐ろしき惡魔の呼く闇となりぬ。我は、床上にてひとり、小さき胸の小琴を抱き、はかなきこの身の運命をかこちつゝ、しみじみと物思ひに沈みぬ。ふと、障子開けば、若葉吹くそよ風衿につめたく、乳までもしみとほり、灯くらき燈火、危くさゆらぎぬ。

（評）原文句點のつけ方誤れり。この文をみてさとりたまへかし。

〇一日記

すみれ

一月七日。里の子等が罵しる聲の中より猿曳來たる、十あまり三つ四つと覺ゆる小娘の、面は美はしきが、赤き頭巾赤き衣まとへる小猿をおぶへるなり。優しの猿曳よよくも亡き我が妹に面ざしの似たることよと母はのたまふ。

あまりの憐れさに國は何處と問へば、長州萩なりと答ふ、父母やいますと問へば父も母も在さず、ひとり旅なりと答ふ。あはれ年端も行かぬ乙女子の身をもちて遠く故郷を去り見知らぬ他郷にさすらひて、便るはただ一疋の小猿、小猿は小娘をたより、小娘は小猿を便りに、其日其日を稼ぎ行くいとしき猿曳よと、そゞろに悲しく思はれて銀貨一枚とらす。

節面白う小娘が歌ふ唄につれ、或は舞ひ或は跳る小猿の姿のおもしろさ、信田の森の舞とか云ひて、小さき市松人形に乳を與ふる身振りの愛らしさ、よくも敎へよくも覺へつるものかなと思ひぬ。

やがて篤く禮述べて再び小猿を背にして出でゆきぬ、門には亦も罵しる里の子の聲々。

さても吹きすさむ今宵の木枯よ、思ひ出す可憐の猿曳き、いぶせき旅籠屋の燈のもと、いかに淋しくねむるらむ。

更に憶ふ彼の哀れなる小猿は小娘の傍に添ひ伏して如何なる夢をや結ぶらむと。

（評）かゝる少女の行末やいかならん。この處よむ身もそゞろにおもはれて。

傘屋　牛込　岩谷綠子



實用文

谷江風先生選



▲規定　所謂日用の往復文にして、手紙文又はハガキ文の實用を主としたる文字を歡迎す、二十四字詰十五行以內用紙も締切日も前同斷、懸賞は甲種規定に據る。

四等

○嫁ぎし姉へ

備後　井上年子

姉さん淋しくはありませんか、私淋しくつて仕方がありません。姉さんがお出に成つてから早や十五日になりますね、其頃まだ堅いつぼみだつたお庭の櫻がもう眞盛りですよ私一人で見てるが何んだか惜しいやうな氣がします、一度見に入らつしやい。

姉さんのお部屋を私が貰つて一昨日宿替しました。あの本箱のあつた所へ机を据えて、そして本箱は床の脇へ取りました。額は姉さんのお大切だつた白百合のと私の好きな三人兒童と、福德人と二つ並べて掛ました。お寫眞掛は私のと姉さんのと武坊のと、それから母家の兄さんのと都合四つ掛て居ります。部屋の內が初めとはすつかり變りましたよ。

武坊がね、昨日初めてお頭てん／＼をして這ひました皆の、ジョンだと云つて笑ひました。

鸚鵡はね、まあひどい事を云ひますの「敏ちやん………花ちやん……御夫婦」つて、屹度誰かゞ敎へたんでしよう。お三じやないかしらんと私思ふて居ります。

今朝母家の兄さんがお出でになつて、姉さんはもう他家の姉さんに成つてしまつたのだから私の姉さんじやないと仰言るの、姉さん眞實、うそでせう、屹度うそよねえ姉さん、もし眞實だつたら私つまらないわ。

姉さん是非一度入らつしやい、そして眞實かうそか聞かして下さい。私行きたいけどもお許しが出ませんのだから私今度姉さんの入らつしやるまでに手袋を編んで置かうと思つて一生懸命こさへて居ります。

屹度成功さしてお土產にさしあげます。

（評）厭味もなく苦しさもなくさら／＼として面白きが中にどこか哀しげなり。

秀逸

○故郷より

美作　澄子

霏々として降り頻る雪の日の淋しさに爐かこみながら噂はいつも父上樣――此頃の寒さに御病身の御身如何に苦しくおはしまさんと心配致し居候處こま／＼との御文嬉しく直に皆に讀みきかせ申候此方母上樣始め打揃ひすこやかに暮し居候近所の人も何くれと御世話下され候間御安心下され度候、御留守中は萬事御敎へ通

り寢食共に定刻を違へず勉め居候まゝ決して家の事は御心配遊ばさぬやう願ひ上候。淨子の入學試驗も近寄り候ことゝて精々勉强致居候又光夫もますく壯健にて通學致居候昨日も大雪を冒して歸宅し早々雪合戰を初むる有樣に御座候先日通知簿を見しに例の如く甲の成績にこれあり候。御尋ねの歌文會今日參り候まゝ母上の仕立られし綿入妾の編みし靴下、手袋と共に郵送致候間御受取下され度候只今母上には幼弟を連れ例の如く國司樣に參詣いたされ候まゝ其暇に書きしるし申候かしこ。

（評）かかるをこそ實用文の名に負ふべけれ、飾りも要らぬなり衒ふにも及ばぬなり須らく眞面目に正直なるを要す。

○田舍の姉より弟へ

京都　田口今子

初冬の風つめたく山姬の心をこめて織りなせし紅葉も一日ごとに散り行きて秋の名殘りぞかなしくも惜しまれ候

名だたる都大路もさこそ寒さのまさりつらんと御身の上も忍ばれて……

小夜更けて雨戸打つ木枯しの音に夢破られ空行くかりがねの聲に目さめては定めなき人の身をはかなくも悲しと泣きしも幾夜都の便り聞く毎に昔しの夢思ひ出しては此の山奧に一生を過ごす事かと身も世もあるにかひ無き思ひ致し候數なき女の身には理想も希望も無之候前便にて申し候通り、妾は最早今日かぎり此の家の者にあらねば御身は何卒妾に代りて搖ぎたる此の家の石づゑを昔の如く堅くなし下され度候今となつては御身は實に此の家の大黑柱に御座候

嗚呼あすは風か嵐かあすさへ分らぬ人の身の御身は何卒御壯健にて御勉强なし下され度妾が一生の願ひに御座候。

（評）情切なり。

○はがきにて姉上に

落葉

姉樣、妾昨夜嫌なくく夢見ましたの！裁縫室でね、皆樣と一所にお袴の紐を絎けて居ますと針がね不意に三つに折れましたの、別のを持つて來やうと思つて外へ出ますと、今度は姉樣のお居間のやうでね、鏡臺のお鏡が見事にわれてる、と見るとすぐ目がさめましたの！皆樣おかはりがなくつて？米國の兄樣はお達者で御出でせうか？夢なんか氣にかけてとお笑ひなさるか知れませんが妾氣になつて仕樣がありませんわ、姉樣どうぞお大切にね、お無事で入らつしやるやうにして慣さいましな、後で又上げますから此れてお別れにいたします。さようなら。

（評）さりとは可愛らしき心根かな。

○都の友へ

靜岡縣　ふみ子

御なつかしき御玉章うぐひすの初音承る心地してうれしくうれしく拜見仕り候さて君にはます〱御すこやかにて學びの庭にいそしみ給ふ御事とめでたく存じ上げ候降りてこなたも日々寄宿舍の中におきふし致し居り候へば憚りながら御心安く思召したまはりたく候お思ひ出せば風清く波穩かなる興津の驛に袂別ちまゐらせしは昨日の如く存じをり候を早や二年を異郷の空に過し申し候さても其頃美はしかりし御黑髪はいたくのび給ひつらんなど思ひては御なつかしさに堪へかねて更け行く夜半の月を仰ぎても君を偲び夕べの嵐に誘はれて雪かとまがふ落花にもありし其上思ひ出で候それよ君紅のリボンを二人かざして嬉しさのあまりまどふ蝴蝶を面白しと暮るゝも知らて春の花野に追ひ廻りし事も候らひしはた清き小川に笹舟うけて其行方を共に眺めし事もおぼえ候を今は早や笹舟のそれのごと別れ別れて雲山萬里へだてまゐらする悲しさ日毎日毎に御目にかゝりてもなほあかずのみ思ひ候らひしに今は御姿だに拜する事も叶はねばたゞ〱春を見捨てゝ行くかりがねにことづてんのみに候さて昨日は休みにつきしづはた山下をそゞろありき致し候に花賣る少女桃の花を抱きてかなたよりまゐり候いつもながらの花好きとてあまりの愛らしさに恍惚と致し居り候ふところやがて花召せよと呼ばれて一枝求め候君よふるさとは今桃の盛りに候ふぞ封じ込めしは其一輪こをやさしき御手に開かれん時せめては雛樣祭りに餘念なかりし桃の節句も思ひ出たまへやさらばよ君つゝがなかれよ。

（評）美しき筆のゆきかひ。

○羊羹に添えて　茨城縣　中山道江

母様私は昨日午後の六時少し前無事にこちらへ着きましたから何卒御安心遊ばして下さい先日お話し申上ました水戸の名産梅やうかん五本程只今小包でお送り致しましたからどうぞ召し上つて下さい其の中にはやうかんよりももつと母さんのおよろこびなさるよい物が入れてありますよ又此の次には何か變つた物をお送り致しますどうか御身をお大切に遊ばして下さいませさよなら。

（評）幼けれど其の意明なり。

○春色を報ずる文　八王子　富本登美子

山里も此頃はさすがに、春深うなりて、花見にうかるる人の美しう、そこゝにほの見え申候

佐保姫の裳裾のやうなる、華やかの野の色うるはしう紫なる菫、黄なる蒲公英、みな春の光を現して、白黄の蝶の舞ふ姿、雲雀の聲空高う匂やかに、これもみな春の艶に候。

讀書の樓の欄に身を倚せて、吹き來る風の薫香に、今は暖かき春の女神がみ膝に、夢むすかのやうなるに思

ひ起されて筆とり申候。
先日は懐かしきお文にて、都の春のまことに花やかに御許様の優しき情に私はあまりの嬉しさに、幾度となく繰返しては拜讀致し候。
昨日今日、蕾の花の優しうほゝ笑むに、麥三寸の畑にもゆる糸遊、若柳の緑の糸ゆら〳〵と、水に映ずる様の面白さ、——眞晝に近き頃は、牛の聲睡たげに、小鳥の聲長閑に、若菜摘む少女の美しき唄も遠近に聞え申候。
昨日、武夫様が私の家へお出てなされ、御許様の様子を御尋ねなされ、お喜びの御様子にて、宜敷く傳へくれ、との仰せに候ひき。
三年前の春、袂を別ちし鎮守の森も今は青葉めきて御許様が手植なされし、桃も今年は三五輪咲き初めて小庭の眺め美しう見え申候。
故郷戀しと思ひ給ふとや、日頃の御氣象にも、似ぬ事よ、そを思ひ出し給ふ時は、三年前村外れにて唄ひなされし勇ましき歌を、今一度、心の中に唄ひなされかし御家族様みな〳〵御無事に候、かしこ。


やくはらひ　大坂　奥西ゑい子

○別れし友へ　神戸市　名無し小草

とはに盡せぬ日月さへも、むしばむ時のあるものを、定めなき人の身の、昨日は東今日は西、逢ふも別るゝも浮世の習ひとは云ひながら、斯く山川の雲水をへだて候ては、戀しさに堪えがたう、はるかなる空仰ぎて飛ぶ雁の行衛を眺め、松吹く風に耳傾けしも幾度。さるにても、長く短き二十日に候ひしかな。今の二十日の間の君は、はやかざしの大きなるもりボンのたけ長きも打捨て、天晴りゝしき娘姿となり給へるか。甘える聲の可笑しとて君に笑はれし私、今猶かざしよりボンよと母困らせ居候を、君は白手拭に襷掛け、巾廣き前垂に、母君の笑み給ふを嬉しとや思されん。お袴の紐胸高に、下髪の長きを誇りたまへる君の、わづか二十日の間にさぞや大人ぶらせ給へるならんと、おうつしゑとり出でゝ、今も今、ほゝゑみとゞめがたう候。お顔拝したらんには、美はしの島田髷に色紅きリボンかけまゐらせて、……さらば長しなへに安らかにおはせな。とことはにあたたからおはせな。かしこ。

○繪はがき便り（都の友へ）　三河　新藤春江

（イ便）これは、江南に見える、牧場の全景です、向うの小羊の群が、親羊のあとを、ぞろ〳〵と、追ふて行くでしよう、其跡を、檜笠を被つた牧人が、牧唄うたひながら、悠々とついて行くさまなどは、手にとるやうでしよう、あの牧人と、羊らは、さて何處へ行くでしやうか、さぞ〳〵、樂しからうと思はれます。

（ロ便）これは御存じの多摩川の寫生です、あのちちら見えるのは、白い鷗が二三羽、汀にそうた、小松林の葉隱れに飛んでる所なのです、その向ふの芝生に居るのは、編笠を被つた翁で、今鮎釣の最中です、貴女何んと奇麗じやありませんか、繪の領分が廣いので、遺憾ながら、こゝらで御免を蒙ります。

（ハ便）これは秋の野の夕暮です、白い野百合の花や、淡紫の女郎花が、あちら、こちらに咲いてる、小さな野みちを、可愛らしい、牧童が、牛の手綱をゆるめて、手づくりの笹笛吹いて、何んとかいふ鄙歌の節を合せながら、歸る所です、其端に白く、細くのたくつたのは、野川のちよこ〳〵水で、其小さなせゝらぎに、夕日の光がさゝめいて居る處です。

（ニ便）これは、里の夕暮の繪なので、年とつた村爺が、籠を背負つて歸るもあれば、田草取の妻君の歸るもある、今まてけたゝましくないて居た、百舌鳥の聲がと絕えると淡靑い夕靄がこの小さな里を包んでしまふ、あとは夕餉たく煙りが、ほそく豐かに登る所なのです。繪が下手てすから、よくは分りませんが。

○友の許へ（病床にありて）

臺灣　稗貫みつ子

御水莖の跡も匂やかに慈愛あふるゝ御文給はり病床に呻吟せる妾が嬉しさ此上なふて候御言葉は一々御もつともには候らへどもかゝる陰氣にして冷たき病院の一室に日々苦しみつゝ生きながらへんよりは死して此苦痛を忘るゝはいかに勝れる事に候らはん人生わづか五十年何のなす事もなうていま〳〵しき病魔のために朽ち果つるはいと〳〵口惜しの至りに候らへどもいかんせん不治の病ひにおそはれて散る秋の木の葉のそれよりもろく朽つる妾身も今は早や終りを告ぐる頃と相成り候或るは餘りの苦しさに堪え得でわれとわが舌をかみ切りて死せんとまで心狂ひ致せし事もしば〳〵に候らへ共ハット心付けば今更ながら親や兄弟はた親しき友の事を思ひ浮べ又しも此世戀しうて未練がましうも今日までながらへ居り候、されど君よ遠からず自然は我身を彼の世に導く事に候らはん無常の風さつと吹き無情の鐘は奇しかる響をたてつゝかくて血しほかれし妾を未だ見ぬ世に誘ふ事に候らはん又妾もあまんじて黃泉の客と相成るべく候君よ今より幾日かの後に彼の光泉寺の椿の根本に新しき墓を見給はゞこれぞ薄倖の少女が冷たき靈の埋もれる所と思召し下され度く候亂れし筆調はぬ文色々の愚痴言は病魔のためと宜しく御推察下され度く候、かしこ。

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

新體詩

横瀬夜雨先生選



凡て振假名をつくること
懸賞は甲種の規定に據る

三等

○悔

岩代　天以子

夢の香ゆらぐ慢幕に、
爛熳たる夜の櫻、
絹ぼんぼりの灯ゆらぎて、
鼓は花雲に音ごもれば、
夢路の旅人聞き恍けて居つ。

行くところ皆樂しき道にして、
邪無き歩みのあどり輕く、
ゆきゆきぬ――かくて春たけて、
憩ひの石に耳をあつれば、
いづくともなき――濤の音、

あゝ世の荒波の音――
若葉はむ蟲の、白く育ちて、
眞夏はあへぐ、めくるめき、
燒けし梢に、喰みかけの、
葉は網脈ばかり、殘されて、
萎えし硬葉は、巣にと卷かれぬ

ほつれそめたる羅に、
風はやふけば、
夢の香のたゞよひはるに、
うすれゆきぬ――。
戀の焔に燒切りたる、
額垂れ髪の毛のちゞれ、
切らずばのびむよすがもなからむ。

處女の絹をぬぎ捨つれば、
迫りくる妬みの風や、
人は閲ぐ、肉喰むと前に後に。
恐怖に墮ちて今更に、
走りぬ切に、悔の道――。

またうすものを被ぐとて、
戰きつゝも手にすれば、
いとぐちは、煙のごとほつれ／＼
て――。

涙ぞながる。

かへりみすれば、
罪のわだちの跡ぶかに、
嘲笑の水濁みて、
白雲はながれゆきぬ――
あゝ黄昏。

「少女の絹」は「少女の衣」か、「羅」は畢竟何を指すか、「罪」や「悔」やそれほど威厳のある語とは覺えぬが、しかし詩はうまい。

四等

○魂の墳

常陸　小泉はま子

扉かたき胸園に、
忍び咲く小さき花、
蕊薫ゆる紅きをば、
啄みて香を吸ひて、

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

倦み果てとび去りし、
白羽鳥――そは君よ。
鈍色は羽ぐゝみて、
空ろなる胸の園、
開き得て花萎み、
寂しげにそゝり立つ、
魂の墳に、
なきよるは黒き鳥。

君の住める町にはわが叔父も住みて、君とおなじ程の從妹もあり、たよりあれば君の名を聞かぬにもあらず、つとめたまへ。

五等 ○暗きをのゝき

關　三輪葉津惠

我そゞろ、そのゝきぬ、
はた疑ひぬ、かくて今、
眞如の甘き、接吻に、
醉はむとすなり。
（歡樂のうたはとりまく盃や、

銀の灯にきら〳〵と、
黄金の水の滴りて、
また喧しき祝のうた）
うら〳〵に、胸をどる、
若き懊惱の、せまき海、
暗きをのゝき、ひた〳〵と、
波こそさわげ。

新婚の夜の男の歌と見ゆ。げに結婚は戀の墳墓なりといふ、かなしめば涙落ちざるを得ず暗愁、うたひ得てよし。

秀逸

○囚れ人

靜岡縣　橘　たか子

十八なりき囚はれて
閉ぢこめられし闇の室
かゝる日なりき――眞白なる
幻の化鳥二羽、かゞやかに
羽の色は雪のごときらめきて
闇の扉に羽ばたきぬ、含み來し

香の包み、封解きては高なきぬ
――愛の美酒滿したる歡樂の小野の
みか甕は戀の二人ぞ掬ぶべき
君よ來ませな愛の酒、酌むべき醉は
永久なるを、人の掟が何の罪――
つと消え去りぬ――歡樂は
いと淡く、影もなき、夢の間と
鳥影は、あゝこれも心の迷ひ
愛欲の渴苦はた、肉の苦や
堪へがたや苦しやと
闇の扉に喘ぎよる――ゆるぎなき
檻の扉は、黑鐵の鎖繩、閉したる
錠錆びて、――
名のみなる人妻の、われは永久なる
囚れの人。

「名のみなる人妻」とは自分を指すのか、それとも「人の妻になつてゐる人」をいふのか。

○馳する雲

豐後　桃のや眺子

今し空青きに澄みて、
「雨の子」をはらめる雲の、

二三片風に追はれて、
廻轉に姿もみだれ、
東に遁れ走れり。

しかはあれ、行手はおぞや、
日の神が金矢まばゆう。
あゝ雲は前にうしろに、
妨げの敵に迫られ、
「雨の子」は產みもえずして、
ぐる／＼と廻り苦しみ、
醜の影いよ／＼みだれ、
いづこにか姿は消えぬ。
あゝそはも、悶えうめきて、
難產に、遂に死に行く、
產婦に似たり、と馳する雲見ぬ。

奇想天來とはこれなるべし、これ程の想像をめぐらす人が桃のやというたら花子と名のりさうなものだと思ふ、これは反語てはありませぬ。

○暮るゝ春　野の花

春雨は　シトシトと
羅漢松の葉に　泣けるごと。
蜘蛛の巣に　とらはれし
紋白の　蝶の骸。
風あれば　はたはたと
はゞたきす　生けるごと。
眞向に　罵りの叫
女の泣聲も　まじらひて。
また隣　鳥肉の店に
鷄を殺す　聲亂る。
大路には　はした男の
たゞひとり　素足して。
こはあはれ　春の王の
御座崩る　日なりけり。

洸溜　八王子　乙幡秀江



○暗愁　福島縣　坂内銀鈴子

雪消の水のしたゝりを
つゝみたゞへし大沼に
今朝白鳥の一群が
默せる水に羽すりて
北なる方にかけりしと。
里の子あまた集ひては
凶相やあるとなやましの
うわさに充てる夕暮を
森に狂女を見たりしと
言へるはたが子――月出てぬ。
月は曇りぬ春なれば
匂はぬ花は野にあれど
其の花多く黃に出てゝ
愁は絕えず人おそふ
路しとゞちる草徑にして。

○藻刈舟　富山市　小林芳枝子

西に靡きたる山裾の、
松の林に日は落ちて、
くれなゐ流す雲長く、
里しづかなる黃昏や。
白壁はげし山寺の、
鐘にかへるか馬子唄の、

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

聲は林にかくれつゝ、
鈴の音のみ幽かなり。
山ふところの池水に、
ゑまひをつくる新月の、
影をし碎くそよ風に、
鳥の浮巣は搖ぎけり。
芦間をいづる藻刈舟、
小唄おかしき頬冠の、
手なれの棹の雫にも、
夕の聲のひそむらん。

○冬の湖　　下妻　中内泉子

大寳の湖、水涸れて、
日光颪顏そぐ如、
みぞれ頻り、時々暮れ行く、
誰が捨てし船ぞ、半ば沈みて、
折れし竿、やれし籠、
潜むか鮒よ、其かげに、
森より洩れぬ、燈二ッ三ッ、
鳴り初む、宮居の大皷、
堤行くは、牛乳の車。

○小鳩　　長野縣　若林かをる

もさもうれふるたそがれを。いちの
木隱れ物に怖ぢ。再び獵矢のがれた
る。小鳩の背に夕陽落つ。眞白和毛
の微動は。汝が生れる柔胸に。血汐
騷ぐか湧き出か。影地に落ちて罪多
し。されば天なる宮に入り。愛に充
たるなが胸を。神に抱れて令旨受よ。

○君待つ日　　筑前　田中とよ子

今日も又磯の小春を
櫻貝一人數へて
君待んかなかへりますを日を
慕しや水天の彼方
碧雲の連なる果ぞ
君居ます地よあゝ嬉し
かへりますか君故郷に
情熱溢るゝ南洋の
美しき詩の寳や
堆高くつみ上し君が巨船は
靜々と入り來るよ此の海に
あはれ君四年の昔此の磯に
御手にすがりて泣きにしを
あゝそのかみの追想に
胸の緒琴はさゝなるを
奇しき青春の譜奏でつゝ
ひたもつれ合ふ女夫波
海の女神の息吹かも
玉藻の奇香くゆりきて
若き笑の子よはじむる

○灯　　丹後　鹽見千代子

風の夜の靜寂刻を、
行燈の灯またたく、
あはれそはわが若かりし、
生命なる希望の光、
愚と罪の黑き破衣に、
世隱れて輝かぬ如、
はた消ゆる力もなく、
ゆらめくよあるかなきかに。

○森　　釜北　稗貫みつ子

身はさびしらの魂と共に
恐怖の心はげまして
なえはてし足たづ〳〵と
轉びも入るか森のうちに
聞くは怪しの鳥の聲
見るは千とせの夏木立
太古のまゝの森の香は
われを呪ふ如苛責る如

Digitized by Google　　Original from HARVARD UNIVERSITY

日暮と共にせまりくる
妖の神はきら〳〵と
ときし刃を手にもちて
われにせまるよ犇々と
あゝわが身は目の前に
近き「滅亡」をながめつゝ
今も迷へり道なき森を

○病床にて　長野　紅菊

快樂の夢の目をあけば
春の日影はのどかにて、
たとへば冬の宵寒く
木暗小路に迷ふとき、
慈愛の權化たらちねの
乳房にふれし思ひかな

○かんざし　岐阜　篠田とみ子

去年のくれ
魔の神すさぶ冬枯を
浮世の他見の箱に秘め
芥にはあてじ色褪せな
愛兒はぐゝむそれの如
痛はりなせし菫草
忘れな草の花かざし
今日見れば
想出多き年暮の
樣なりピンさへそのまゝに
芥もとまらず色褪せず
面のやつれわかねども
胡蝶の夢を結び目に
さやかに輝らすリボン哉

○召使　京都　岩淵くに子

奴元結きと結び
みどりの黑かみつや〳〵と
文金島田小間使
媛のみそばに侍るべく
お露はかたち代へにけり
彌生の花かちら〳〵と
庭にちり來る六の花
媛東屋に人呼べば
椽を傳ひてからころと
お露は遠くかけ來る

○相泣く春　甲斐　勝村もりよ

花香ふおぼろの宵を姉君は
泣きたまふ慰めまつる妹の
くちこものこのくりごとに胸いだく
細き手を解きたまへかし、頬紅の
うするるを、憂ひて月に泣きまさば
み力に足らぬ甲斐なき少女の身
たゞ泣きて涙を添へむおん肩に

○嫁ぐ姉　京都　箕浦梅子

喜び玉ふ父のこゑ。
祝言受けます母のこゑ。
此室は姉の室隔たれど、
人の騷ぎは聞ゆるよ。
樂しかるべき此宵を、
嬉しかるべき姉上は、
我手をとりて淋しげに、
妹羨ましと泣き給ふ。
父母のみそばに十八を、
憂事もなく生ひし身の、
何悲しみの在すらん。
姉上の意中を思ひては、
緣の糸の絕れよかし。

○里がへり　上毛　納尾子

嫁ぎて二日はや故鄕の

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

あゝはづかしの里歸り
さこそ我顏見るならめ
おゝ一昨日の花嫁と
三里の道を村人は
のらで夫と里へ行かば
村の習慣と車にも
明日のかへりぞ樂しき
われ十八の嫁なれば
母の戀しさ身にしみし

○雲　横濱　玉津澄子

人の憂愁を苦痛を
夕の雲のそをのせて
熟睡の神の懷の
夢の領にぞ入らしむる
そも歡樂や活動や
晨の雲はそをのせて
紅玉榮ゆる東の
山の高根にかへるなり
さては旅人泣かしむる
荒野の空のちぎれ雲
山の男神の冠と
黃金あやなす峯の雲
あゝ詩人よみ空の園に
憂愁の花とさきいづる
雲をしなどか歌はざる

○愛　大分縣　太田千枝子

蝶狂ふ春の園
野邊皆花の臺にて
若き牝馬も戀歌ふ
草籠をそと投げて
美しき少女憩ひぬ
蝶飛んで籠に眠り
死に就ける草徵に笑ふ
吾夫は何處へ……
溫き風頰を舐むりて
黑き髮ぶる〳〵と振ふ
脊たゝく若き人
あゝと叫ぶ少女子
熱き接吻送りて
おゝ慕はしの君……
陽炎は赫く照り
少女の頰美しく冴えぬ

○無題　京都市　かをる子

朝は朝霜かげに見え
夕は夕風枝になる。
小川にそへる樫ばやし
踏めば母すむ故鄕の
小百合の園のおもひあり。
えやは忘るゝ武藏野に
君を待ち得し蔭なれば。

○文筥　京都　宮原みどり

いにし夜の
床しき袖の移り香の
身に染みそめてやるせなく
積もる思ひを鹿の毛の
短き筆にこま〳〵と
人目を忍び書送る
文筥の紐も濃紫。

○灯の光　神奈川　木村はる

痛はしや奥に點せる燈火の
高う低うぢり〳〵と
消ゆれば暗となるものと
心細くも思はれて
見るや焰ははと消えぬ
あゝ兄君もかくて消えしか

○夜　信濃　太田喜志子

人なき夜のしづまりを
辱かめる弱き子が
思の髮はみだれ氣味

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

なやみもて梳く長たりの
しるべの小櫛たゞ一つ
そはさら〳〵と音立てゝ
意志のまゝの黑き影
他人に知られぬ秘め事を
鏡に見るか春の夜

○妹の生れて　千葉縣　高濱　尚尾

柳にけぶる月影の、
ほのかにいとも淸うして、
夢の如くもむら〳〵と、
梅の香こむる窓にして、
あゝ妹は生れたり。
生れて早やも世の中に、
幸をもとむる聲なるか?、
藪鶯の初音にも似て、
優しく泣ける其の樣よ。
さても美しき今宵月に、
詩のみ靈や得たるらん、
花の顏うるはしう、
點ずる眸の星に似て、
快樂の影はたゞよへり。

○天縁　備中　林　婦美子

靈魂なにか新たに甦りて
この胸濃青のうしほ今湛へぬ、
彩ある幻想波たちときめきては、
夢の香したひ追てぞ逍遥ふ
うつゝか愛の泉を酌みそめては
希望は若き血潮の高鳴り來て
ゆらめく天地の永の夢に醉ふよ
あな今新生こゝに虹をよびて
匂へる聖き瞳の淸やかにこそ
さは愛炫燿あふる天縁なりや

のどか　南多摩　中島銈子



そゞろや幻の舟詩の舵取り
さしゆく戀の水棹のしずくあまさ
幽かに香へる若草のかげ
幸ぞ漂ふあえかの榮の岸邊

○冬の日　德島縣　水口　近子

晨なり　逍遥へば
寒風は　身にじみて
呼く息の　白うして。
一二輪　笑む梅の
さゝ枝に　目白鳥
唄ふなり　樂しげに

○野の夕　門司　彌吉はるみ

籠をめぐる紫の
煙の幕に黃昏れて
露踏み分くる我裾に
草の香りの高きかな。

お伽噺

巌谷小波先生選



▲規定　新しきお伽噺を創作すること、投書は總振假名つきにて二十四字詰八十行まで、用紙は前同斷、締切は毎月十五日、一人一章以上を許さず、懸賞は甲種の規定に據る。

三等

○花の渦

松山市二番町、富田方　草村瑩子

はら〳〵と櫻の花の散り頻きる下で、美紗子はひとり、亡くなられた母様のことを思つてゐました。涙がとめどもなく湧き出て、袖で顔を抑へて、しく〳〵と泣き出しました。すると、何所からともなく、

『美紗子さん〳〵』と、呼びかけるものがあります。美紗子は吃驚して顔をあげますと、不思議、今まで只ちら〳〵と散つてゐた櫻の花びらが、さながら舞でもまふやうに、上に飛び、下に亂れて、雪のやうに、巴になつて、眼も眩はんばかりに美くしく舞ひ狂ひ出しました。

美紗子はあまりの美くしさに、兩方の手に袖を抱へたまゝ、たゞもう夢中になつて見惚れてゐますと、又してもどこかで、

『美紗子さん〳〵』と、前よりも、もつと大きい聲で呼びかけるので、美紗子はあたりを見まはしますと、どこから來たか、ひとりの可愛い、翼のはえた小人がにこ〳〵として立つてゐます。

『妾を呼んだのはお前なの？』

『えゝ私です、私は花の精です』子供は笑ひながら美紗子樣に近づいて來ました。美くしい櫻の花の冠を戴いてゐます。散る花はやはり、雪のやうに蝶のやうに、舞ひ上り舞ひ下り、幾千萬片とも知れませぬ。

『美紗子さん、あなたは今、お母樣のことを思つて泣いてゐてなさつたでせう』

『まあ……どうしてそれを知つてゐて？』と眼をみはると、花の精は落ちついて『私はどんな事でも、みなちやあんと知つてゐるのです』と笑ひながら云ひます

『どんな事でも知つてゐて？』

『えゝ、何でも皆よく知つてゐます』

『さう、ぢや妾のお母樣は、今どうしてゐなさるか知つてゐて』嬉しさうに悲しさうに問ひかけました。

『その事です、私はあなたに、その事を話しに來たの

です』と花の精は、やさしい聲で話し出しました。

『あなたは、今お母様が何所にゐてなさるか知らないでせう、お母様は、今天の花園にゐでなさるのです』しく／＼と泣き出した美紗子を、花の精はなぐさめながら話しつゞける。落花の渦は二人をとりまいて舞ひ回る。

『お母様は今、天の花の神樣の下に使はれて、毎日毎日、花の彩色をしてゐられるのです、櫻の花は薄紅に桃の花は濃紅に、菫は紫、菜は黄色と、樣々の花を樣樣に、繪の具の筆で叮嚀に一つ／＼色を塗つてゐられます、死んで天へ上つた人は、どうしても百億輪の花



をぬられねばならぬのです』

美紗子はじつと聞いてゐます。

『それでゞす、美紗子さんよくお聞きなさいよ、もしあなた達がいつも／＼母様のことを思つて、泣いてばかりゐなさつては、折角美くしく、染めあげた花の色がその涙の露のために、とけて流れて了ふので、いつまで經つても百億輪ぬりあげることが出來ないで、樂しい國へゆくことが出來す、苦しい／＼仕事ばかりしてゐねばならないのです、ですから美紗子さん、眞實に母様が、お戀しいなら、これから決して泣いてはいけませんよ』花の精は

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

じつと美紗子をみつめました。

『え、おやあ妾もう、これからは一寸もなかないから、お母様にも、さう傳へて頂戴な』と、美紗子は花の精に縋りつからうとしましたが、その時花の精は『さよなら』ともう、何所へか消えて行つて、花の渦ばかり、舞ひ散り狂るふてゐました。

* * * * * *

その晩美紗子は、亡くなられた母様に、美くしい天の花園で會つた夢を見ました。その翌日からは、早く母様が樂になられるやうにと、心の中で祈つて、もう一寸も泣かなくなりましたとさ。

（評）かなしみを寫すに爛熳の春の景を以てし悲は化して喜となりしが如し。

秀逸

○玉手箱

若松静枝

猫貝や櫻貝やさう貝等名も知れぬ美敷貝を優敷波はチャポ／＼音立て眞白な砂の上に打寄する其波打際を美敷少さな素足を潮にしたしながら何かしきりと、さがして居るのは花ちやんて有升暖かい春日を脊にしながら「此度にはもう無いのか知らん」と一人事を云ひながら又餘念無く、噫いよ／＼此處には無いのて有ろう、と腰をのばした時餘り下を向いて居た勢か顔は眞赤に成つてほか／＼として居るのに時々冷たい風がじんと身にしむ樣て風でも引そうなから今歸ろうと思つて居る處へ「花ちやん貴孃は何をさがして居ましたかと大きな蟹が裾はさんて居るので花ちやんは大變驚きましたが何を思ふたか急に身の上話しを初めました「蟹さん聞いて下さい私の家はお父樣もお母樣も姉樣も何も無い唯私と婆さん限て有ます」それでお婆樣が私に「花や私も澤山年を取た故直に死なねば成らぬ故お前も一心に勉强してえらい人に成つておくれよ」と涙を流して云はれるので私はお婆樣に死なれたら一人ボッチに成るのでそれが悲敷くて／＼てどうかお婆樣が死なれぬ工夫は無いかと思つて居ると先達近所のお伯母樣の昔話にホラノ貝の實を食たら百年も千年も生ると聞いて毎日此の濱へ來てさがして居ますと話しました蟹は花ちやんの優敷孝心なお話しに思はず涙をほろりとこぼしましたそうして蟹は氣の毒そうに花ちやん其貝は此の世には有りません私に着て御出なさい龍宮と云ふ處へ御案內致し升と不思議では有ませんか打寄する波の中を冷たいとも寒むいとも感じないて陸

て云つたなら丁度波のゆるゝは春風でも吹いて居る樣て鯛や平目其他見た事も無い澤山の魚のおよぐのは、空を、ひばりや蝶がまひあるくより、もつと〳〵奇麗なので花ちやんは夢心地で海草や珊瑚の上を蟹に引かれながら行きますと「向ふに見ゆる大きなお城あれが龍宮城ですからあの中の大將乙姫樣に願つてホラの實をおもらひなさい」と云はれて向ふを見ると誠に〳〵眩ゆくて見へない程の大きな美敷御殿が見ゆるので花ちやんは大欣びてそこに着きますと御殿の中には澤山な官女が幷んで居られて其一番上の一番立派なのが乙姫樣で有らうと花ちやんはうや〳〵敷く今までの事を物語りホラの實を下さいと願つたすると乙姫樣は花ちやんの心をためそうと思つて「私は貴孃の樣な孝行の子が好きだから貴孃が龍宮の人に成ればホラの實をお婆さんに上る」と云ひましたすると花ちやんは急にお婆さんの事を思ひ出し自分も此度から歸へれぬのでは無いかとわつとばかり泣出しましたすると乙姫樣が花ちやん泣いてはいけ無い此の玉手箱を貴孃に上るから早く御歸へんなさいと云はれて花ちやんは泣々玉手箱をもらつて元の濱邊に來ますと日はとつぷりと暮れて居るので細い路をたどり〳〵燈のちら〳〵見へる我家へ着ますとお婆さんは花ちやんの姿を見て大變欣びお前はどこに居なさつたか其玉手箱はといはれるので今日一日の出來事を殘らず話しましたするとお婆樣は昔浦島太郎のお話しを花ちやんに委細聞かしてどうしても玉手箱を開けさせませんからさあ其夜床に入つてもなかなか眠れんので根が利口な花ちやんですからこう考へました「お婆樣に死なれたら私一人に成るのはいやだそれて若しお婆樣の話しの樣に玉手箱を開けて白髮の婆に成つたなら私もお婆樣も一同に死なう」とこう決心して夜中頃そろりと箱を開けて見ますと思ひ掛無く其中からホラの貝の實が出ました花ちやんはあまりの事に小踊をして欣んで居ると物音にお婆



花ふゞき　　下谷　岡野さかへ

樣も目をさまし之は乙姫樣が御前の孝心に感じて下さつたので有らうと大欣びでそれを食べましたとさ。乾度花ちやんも其お餘りをいたゞいて長く〳〵二人で樂敷く暮したに違ひ有りません。

（評）玉手箱は少し舊い樣ですが一體におもしろく見ました。

○からす物語　鳥取　みどり子

私は今夜お城山の中で私の友達と雪のふり重なつた椎の木の枝にさばつて眠りながらかく思ふのですよ。實に私等ほど不自由な身の上はない、此の樣な寂しい山の中で暖かな家もなく懷かしい親兄弟にも離れて。何時何んなこわい物が來て捕へてにげるのか分らぬ梢で雪が脊にたまるのも物も云はずに眠らなければならぬのかと。嗚呼實に悲しい身の上ですよ。

夕べもてした皆が或山の中で靜かに眠つてますと、突如大きい者がくらつてバラ〳〵〳〵と下葉を打つたものですから何物ぞと驚いてすぐ目を開きばた〳〵向に飛び去り升と、さあ大變、連共も皆起きてがや〳〵と大騷ぎとなりました。幸ひに雪の明りに闇にも迷はないでゐましたが何しろ思ひがけない出來事な物ですから峯の夜嵐に梢が驚いて雪の固まりが辷り落ちたのをあの恐い梟がと思つて寂しき闇の夜に立ち騷いだのです。而しそれから音も靜まり木の葉も落ちつきまして事も起りそうに見へませんから、又元の枝に止木を尋ねて遠い谷川の音を聞き聞き其の儘眠つてしまひました。

風雨が荒れる夜などはどう致しませう。あの物凄い梢の音や、今もさける樣な木の動搖の中で、父や母やが『こはい〳〵』となく聲を聞いては、どうか無事で居て呉れゝばよいが。早く夜が明けてくれゝばよいにと一刻の間も眠られず。救ひを賴むにも暗闇の夜にはどうする事も出來ませんのに……。あくる朝母と二人が幾ら尋ねても父の姿は竟に見へぬでした。斯く長い歲月の中に山を越え野を亘つて居る間に又懷かしい母も亡くなつたのです。受けた親の情も返す暇もなく別れ分れてしまうたのかと思ひ幷と悲しくなり升。山烏と言へばたゞ明暮山の上野の空で啼いて居るのみて何の淚もない樣ですけれど、矢張り山烏でも親は親ですよ。目を瞑つて幾年の昔を繰り返へしますと、或る夏母と二人が彼の前濱の寥しき波の音を聞いて岸にうち上げられた藻鹽草を分け乍ら蛤を拾つて岩に破はして食べた事も覺へてます。又或る朝、峯の大松の

頂て東の空から登つて來るお日樣を拜んで朗かな聲を上げて母と二人が亡き父の靈を慰め共にあらぬ涙に墨染の袂をしぼつたことも覺えて居るのです。噫其の母ももう居ません。彼時何處に迷ひ去つたのであらう。どこにお母樣は行つてしまつたのであらうと悲しさ戀しさに、空飛ぶ時にも「母々々」と尋ねてわたる聲に力が出ぬのです。

聞けば人間と云ふのはあの立派な家に居て、あの暖かい衣を重ねて、樂しい父母とおいしいものを食べ乍らなほ愚痴ばかり零して居るとの事ですが、私等はそんなおろかな話をきゝますと、嘲けるやうですけれど、思はず「阿房々々」と云ひたくなるのですよ。あ、皆はすや〳〵とよく眠つて居る樣子。自分はくだらぬ事を長く考へて居て足も目も凍へて泣きも動きも出來ぬやうになりました、夜も大分更けたのでせう。何處やら人里の方で犬の吠えて居る聲が聞こへます。あはれ自分もこの寒さ悲しさを忘れて今宵のはかなき夢を結びませう。

（評）あまりに悲觀的ではないでせうか。

子もり　　宮城縣　佐藤しげ子



〇七福玉

岐阜縣　林　毛里子

ある山中によし子さんと云ふ親孝行の娘がありました三つの年お父さんはかへらぬ旅立をなされ尚ほお母さんも足を煩ひ體の自由さへも利かず誠に貧乏でありましたからよし子さんは毎日々々奥の山へ行き芝を刈つて來て少しづゝのお錢を貰ひそれで淋しい暮しをして居ました今日もいつもの樣に籠を負ひ鎌を持つて山道を段々登つて參りましたいくらいつてもよい芝がありませんので立ち留まつて四方を眺めて居りますと何處からか一羽の美しい小

鳥が其前へ飛んで來て樂しさうによし子さんの顔を見て「私は神のお使じや。神もお前の毎日の、其働きに感心され。今日は呼びに參つたのじや」と聲美しく啼くかと思うと又何處からか一群の雲が下りて來てよし子さんをだん／＼上の方へ「エンヤ、エンヤと乘せて登つて行つてしまひました。

よし子さんは何處へ行くかと案じて居りますとやがて雲の間から黄金の大きな御殿がテカ／＼光つて見えだんだん近くなるにつれて面白い音樂の聲も手に取る樣に聞え美しいお姫樣達が行列してお迎ひに出て參りました。

よし子さんは雲より降りて黄金や水晶で飾られた門をくゞり奥の方へ參りますと正面には立派な神樣が樂しそうによし子さんの來るのを待つて居られ其傍らには前の美しいお姫樣達がズラリと打ち列ばれ下手の音樂の音が神々しく聞える所をよし子さんは恭しく進んで行つて神樣に御目にかゝりますと神樣も大層御喜びの顔色で「お前の行ひやお前の實家の事は皆私が知つてるて今日はお前に好運を與へ樣と思つて呼んだのだ」と又何やらさゝやかれるかと思ふとたちまちよし子さんの着て居た襤褸の着物が黄金の筋で織つた樣な着物と變つて見て居る間に立派な御姫樣になりました。

又神樣は言葉を續けて「何か馳走をして返すが本意ではあるが實家でお母さんも嘸ぞ待つて居るであらう。此寶玉は七福玉と云ふ何でも欲しい物の出る寶玉である。馳走の代りに此寶玉を授るから早く歸つてお母さんに孝行せよ」と云つて立派な寶玉をお授けになりました。

元より孝行の娘でありますから早く歸つてお母さんに安心させ樣と思つて厚うお禮を言つて前の雲に乘つて大勢のお姫樣達や音樂隊に送られて下りて來てお母さんにお目にかゝり今迄の事をくはしく話しましたからお母さんも大層喜び早速授つた七福玉を出して「どうぞお母さんの足がなほる樣に」と云ひますと不思議にも今まで體の自由も利かなかつたお母さんが不意に立ち上られましたから二人の喜びは何とも云へぬ程で又「絹の着物や立派な家が出る樣に」と云ひますと又絹の着物や立派な家が出ましたのでもう大喜びお母さんに其着物を着せ立派な家へ入れて其後もいろ／＼と孝行をしましたとさ。めでたし／＼。

（評）これもよくある種類です何とか今少し工夫ありたいものです。

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

新派和歌

與謝野晶子先生選



△規定　新興の短詩と稱せらるゝ新派の和歌を募る、原稿には新派和歌と明記し、半紙に認め一人一首限り、原稿には本名を記入すること、締切は前同斷、懸賞品は乙種に據る。

○　弘前　佐野てる子

悲みの面をかざる笑のごと消えがての灯はゆらぎても居ぬ

○　周防　谷満緒子

頰にふれて人ぞ戀しき黒髪のにほひもまじる春の夜の風

○　相模　鍋田靜子

船ばたや磯の並木の道こえてうれしはるかに君が家見ゆる

○　靜岡縣　増田せん子

初日影世は歡樂の幕あきて小琴とる神幸を祝ぐ神

○　安房　秋草子

萍の芽の紫のほの見ゆる池の波ふく春の朝風

○　備中　大西好子

胸の野に飼ふなる駒はよろこびに蹄ならすよ君見る時に

○　佐渡　本間たかれ

君思ふ日に春雨はそぼ〳〵とふりぬ花ちる山かげの家

○　上野　大沼染子

綾衣に梅が香しめて走ゐ子よ袴の裾に風やはらかき

○　伊賀　關本逸子

雪深き山の空洞にましらなく夜はかなしけれ爐はかこめども

○　兵庫　田中春子

別るべき時にのぞみて言葉なき少女子なれば死ぬべくおもほゆ

○　芝區　眞崎靜子

薄氷の朝の戸ひけば黒髮も衣もにほへる子に似つさくら

○　甲斐　綱野矢壽子

木枯のいや吹きすさぶ古寺に一夜をかりぬ雨の信濃

○　筑前　深町よし子

つらかりし人の面影しのばるゝ人をも見たり花梅月夜

○　府下　森田志満

美しき少女のむれは笑顔して桃咲く村にわれむかへける

○　本所　三森ゆき

よみにある君を思ひて何にとなう悲しうなりぬ初霜の朝

○　伊賀　伏見蔦子

つかの間の夢路も君のあとを追ひある身をおもひ涙ながれぬ

○　北會津　白井絹江

人ならばとがやおふべき山ざくらわれめてしれて接吻てみぬ

○　名古屋　奥村晃子

白と黃と君がいまはの枕邊に水仙の花淋しう活けぬ

○　土佐　高橋白ばら

少女子はふとのすさびに御前のもたひにひたす白桃の花

○　茨城　酒葉昌子

小町姫たらむと云ひきをさなきにわが眉うつる鏡を見ては

○　君津濱　勝作子

鶯のこゑもしめりて山里の雨しづかなる春の夕ぐれ

○　新潟縣　孤り羊

野茨の花の白きに口づけて去りわづらふよ人おもふ子は

○　豐後　立川つや子

わが思ひ駿河の國の峯に降る白雪なれば解くる日しらず

○　相模　野島里子

まぼろしは人か天女かあはただし蝶のもろ羽をかつぎて去にぬ

新派和歌

○　美濃　傍島みゆき
ほとゝぎす夜毎きてなきいたましき面かげ人を胸にはこびぬ

○　上総　四之宮あき子
夕月に踊りけいこの少女子の唄なつかしや下総のやど

○　磐城　美都子
眞葛野の青き草食む小牡鹿の背の斑を君とかぞへ見しかな

○　茨城　はぎ子
花さける春の木の間をそとぬけて消え給ひける幻のきみ

○　下谷　橋本波子
覺うれどこふれどわれに吾が魂にそのかゞやける花はうつらず

○　千葉縣　高梨芳子
日の神は夕に綺羅とりますや十色なゝ色雲はかゞやく

○　駿河　深尾研子
時刻む秒のひゞきに絶え間なう我れ老いてゆくさびしきかなや

○　熊本市　六花
かくてわ小指をきりて歌染めて君住む許におくらむとする

○　伊勢　佐々木くら子
春の夜や君がたまひし人形によき衣着せてわれほゝゑみぬ

○　京都市　山口愛華
萬物の幸ある如く思はれぬ我戀をえし此宵にして

○　阿波　むらさき
山に入る灰色の雲あはれなり打ち破られし寬軍の如く

○　本所　秋山蓮子
ゆきずりに見てける人を今宵また夢見しあとの云ひしらぬ胸

○　盛岡　ゆたか女
やまざとの雪も消えうせこゝかしこ梅の花さくころともなりぬ

○　山下武子
夕まぐれふく秋風に桐ひと葉色どりなしぬ文の心を

○　駿河　ゆきえ
我が船に鳥のいく羽は驚きて走りていにぬ君住む島へ

○　近江　竹村芳枝
夕日さすおくつきどころ亂れたる髮して立てるかなしき君よ

○　周防　村谷芳子
なぞましきなみの響をきゝながら思ひぬ海の遠方の國

○　龜井戸　鵜澤喜舞子
相おもふ二つの玉は美しき光をはなち闇のよに立つ

○　調布　原よし子
初日影紅友禪の袖にさし朝の道行く人美しき

○　熊本　金子片枝
大空は百片千片雲とびぬすみれ花さく春の野の上

○　北海道　長谷川ます子
なにとなく古巢戀ふごとしめやかに鶯啼きぬ春の朝雨

○　石狩　小田たみ子
旅やかた小雨そぼふるおばしまにかこち顔して海見ます君

○　仙臺　中目のぶ
花の靈地球さりし日の追憶の空にかかるや虹の七色

○　下野　梅澤哲子
つめたかる世にめづらしや火の山は燃ゆる焔のたえやらぬかな

○　周防　繼子
心地よく朝もやの戸をわれひきぬいづこか馬のいななぎのして

○　名古屋　井關多歌子
南國の故鄕戀ふやつばくろのわれも旅寢の春の夕ぐれ

○　信濃　依田花園守
さびしさに樹々はみだれて打ちふるふ花ちりはてしわが胸のその

○　土佐　深瀨ます子
なにとなく人なつかしき身と生れ菊咲くゆふべ君にまみえぬ

○　茨城縣　永井誠子
谷あひにそまや焚くらむうす煙斧打つ音の高く響きて

○　青森縣　久保石二
波の琴入日とともにしづみゆく夕べに取りぬわが歌の筆

○　千葉縣　竹澤ちか子
葉櫻の吉野は淋し雨の日のま晝暗くなり山ほとゝぎす

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

○梅が香に人なつかしき心地して月夜にいでぬ君きませかし　伊豫　曉子

○何ものをあまさずさては火につゝみ胸を驅けりぬ戀の小車　名古屋　渡邊慶子

○君歌をうたへば山の花に居る老鶯も同音に啼く　京都府　二木ゆき

○春の山戀しき人と歩む日の袖に散りくる紅梅の花　佐賀市　田中よを

○風の夜の花散る音の身にしみて涙こぼれぬ何故となく　富山縣　殘月

○五月雨に水はにごれど加茂川の堤の柳緑りますらん　京都市　上原芳子

○いつの日かかれし恨の草の根はきえて涙に又もえ出てぬ　上毛　藤波ゆき子

○七色の糸の下かげ額たれて梶の葉とりて物想ふ人　但馬　小西八尾

○若菜除日をさへぎられ朝露の芝生にわぶるちひさき花よ　越後　和歌波

○ちぬの海白帆の船のかずうかび播磨おぼめくよき春日かな　和泉　辰井ふみ子

○里人は鵜飼するらし數百の篝火あかく水をいろどる　相模　北島たつ子

○杉木立晝なほくらき山門にうぐひす啼きぬ高野の御山　相模　鍋田美代子

かみゆひ　　八王子　乙艀もん子



○見し夢の俤そゞろ胸に湧きてそと窓押せば栗の花ちる　泉　たつ子

○葉もちりぬ小枝も枯れぬ初冬の夕さびしきいてふの大木　長崎市　平田すみれ

○朝ふめばゆめの宮居の霧柱金の音してくづれけるかな　長野縣　瀧澤さつき女

○里人の馬ひきかへる影あかき月夜の橋にこほろぎなくも　越中　かをる

○木像の如く坐りてわれを見てほゝゑみ給ふ伯父の御かな　伊賀　木原須美子

○山里の竹の林に宿しめて蠶まちぬきさらぎくれば　伊賀　秋山伊册諸子

○なほ君を戀しと思ふこの心とらへてゆけなひとやのうちに　下總　えい子

○師の君の玉章抱きて涙しぬせめて幼なき日をおもふらん　神戸　たつ子

○相見しは加茂の祭のみあれの日笛もどかしき月の夜にして　牛込　薫子

○海ほのに君が御船の白帆見る吉日をおもひ荒磯に立つ　越後　山本やす子

○緋桃ちる門より出てし五人の少女何ゑむゆく春の日に　大阪　生田みのり

○さゞ浪のよする磯曲に詩誦せばかなたにきこゆしろがねの笛　土佐　竹林俊子

○ささがにのおこなひしるし誰まつといふ身ならねど人の來むかも　岡山市　池田芳子

○　篠山　室谷ひさ子
なつかしの姉と語らふ夢さめてまぼろし殘るともしびの影
○　陸前　大場千代世
夕あられたてつゞけたる下町の屋根に碎くる玉のひゞきよ
○　上總　古山香花女
銀屏に蓬萊うつる宵の灯や三日になりぬ年あけてより
○　備中　杉山梅子
兄君が七つの年の御手植の紅梅の木に鶯の鳴く
○　千葉縣　內山まさえ
我が心香る栞し芍藥に似る芽をふきぬ君見つるより
○　下總　平山宴英子
いてふの木黃なるころもをぬぎすてて素肌さむげの冬の日はきぬ
○　信濃　昴波子
冬の日は愁の人のとぼ／＼と道たどり行く姿にも似て
○　長野縣　內山けさよ
春風は丘越え野越え川越えて白梅薰る君が戶にくる
○　鹿島縣　笑花
彩雲の奧に居ますやさくや姬きれめ／＼に裾のこぼれて
○　加賀　小島清子
落日の彩雲映る我窓に寺の夕鐘花はこびきぬ
○　青森縣　松尾俊子
夕立のふらむとするや南よりかすかに聞ゆ遠雷は
○　淺草　とみ子
春の花まだらに匂ふ野邊にしてこひしき人の夢を見む哉
○　羽前　松山秋海棠
貝拾ふ君が干潟の足のあとに陽炎もゆる春の海かな
○　岡山市　池田芳子
朝のまど白鳩づれに餌飼しぬ秋海棠の花めでながら
○　伊豆　時子
花やかに木の花ちるに淚しぬなにとはなしに少女子なれば
○　秋田縣　鈴木紅子

紅梅は清らに笑みぬ朝の雲影をうつせる池の汀に
○　靜岡縣　貞水女
夢延びて風やはらかに春たけぬ君きませかし山もとの家
○　伊豫　曉子
ゆかしさをおぼろの月にいひなして花のついぢを幾めぐりせし
○　伊豫　福井さゆり
天童の天よりきたり小琴ひくこゑとも聞きぬうぐひすの聲
○　野村光子
誰がおきし笹ふれの上の紅梅の花ともしらずなつかしきかな
○　備中　林白芙蓉子
花さかむ草のかぎりを垣にして君とあらまし春の三月を
○　豐後　加納豐子
窓による戀の人は髮長く夕の風になびかせて居ぬ
○　備中　須賀森しすい
紅梅にたこかゝりけりはしごして屋根に人ある春風の街
○　牛込　櫻井美園子
うぐひすのさゝなく聲すなつかしと障子細目に明け給ふ君
○　佐渡　本間みづほ
母を見し夢はさめけり神無月草の扉を打つ落葉の音に
○　岡山縣　小林雪子
袖垣を一重へだてゝ君の家の連翹にふる雨を見るかな
○　熊本縣　池邊しづ子
あらぬ事ふと口にして俄かにも淚さしぐむくるほしき人
○　伊賀　關本逸子
佛に跪し無我をたどれる信念のくづれむとして心をののく
○　越後　志賀美代
琴の音にあくがれ出てゝ月見れば月も聞けるやこゝちよげなる
○　上總　ひさ子
相ゆくに道のけはしさはた狹さきのふのわれをはたおもふかな
○　板橋　白百合
はだ寒う鐘消えて行く夕もやに人おもふ子は淚こぼるゝ

○　伊賀　伏見篤子
来まさぬを恨みて泣きしわが聲にふとさめし夜の夢はづかしき
○　静岡市　根岸頁江子
夕鐘はひとつ〳〵に尾をひきて闇に立つ子の胸いたましむ
○　豐前　霞女
松のかげたかどのゝ影動きけり入江に春の月のぼる時
○　羽前　近野野菊
菜の霞の棚引く高峯や天津少女ら花手折るらむ
○　若狭　長谷川英居
冬姫の銀の響の鈴おちて水仙さきぬ水のほとりに
○　伊賀　菊山かれ子
紅梅や祖母が茶せんの白髪のうしろ手を見る日ののどかさよ
○　後藤源子
木枯にふく日も消は忍ばれて磯辺に佇てば袖凍りにき
○　播磨　生田むつ
鶯にならばや君が玉の手にかはれて日々に歌さゝぐべく
○　埼玉縣　龍宮光江
夜しづか君吹く笛の細し音におのづとちりぬ紅梅の花
○　府下　森田なか子
船に居て海の面に涙するわかうど見たり春の夜の月
○　君津港　錦かつ子
田子の浦のぼる朝日ともろともにさしくる汐のおときくわれは
○　北多摩　原よし子
春の風梅花をめづるよき人の黒髮ふきぬ夢のこゝちに
○　和歌山　榎本千鳥
舟に寢て千鳥なく夜をさみしみぬ三十路の冬は歌もあらずて
○　伊賀　岡本梁子
友はみなわがひとり身をうらやみぬ昨日をおもひ涙する子を
○　紀伊　杉若文子
紀の國の雪の夜明けぬ遥方に牧場守る子の小さく立てる
○　東京　濱田楠緒

霞ひく野面は春の氣に滿ちて小蝶は醉ひぬ花はねむりぬ
○　鳥取市　上山千亜子
なつかしき新妻ぶりとはやされて伏眼して居ぬ十人が中に
○　岡山縣　黒住くに子
古寺や庭に椿の花一つ二つ三つ落ち春の日くれぬ
○　泉南郡　金田芳子
花の枝に歌ふ小鳥の聲聞きて胸を痛めぬ春やむ人は
○　長崎　平田すみれ
小川べを行けばすみれのよき香して風やはらかき春の夕ぐれ
○　牛込　栗田たづ子
春の日に燃ゆる若葉に袖おほひ若き少女の胸をとひませ
○　長野縣　宮島清子
降る雪はいつやみにけむ灯をおきて文よむ窓に月さしてきぬ
○　福井縣　片山千里
梅の花の香かげば幻の目にこそ見ゆれそのかみの人
○　西多摩　森田喜代子
春來れば花咲くものと思ひてきわれに悲しき世としらずして
○　信濃　二葉子
長閑なる松の小枝のさゝやきは女神の春の秘言ときく
○　金子かたゑ
花よしとかたらふ春もともすれば小さきといきすうらわかければ
○　日本橋　神崎喜代子
はる姫が空に舞ふ手の花扇よき香にゆれてたつか春風
○　姫路　尾田淡美子
終焉の時來と胸の鳥なけば刻一刻と寂しさそひぬ
○　小石川　加茂宮さく
五月雨や君がみうたをとりいてゝ昔をしのびわれひとり泣く
○　上毛　なみ枝子
春の月ほのにてるなり大鳴門雄渦雌渦を船よぎる時
○　愛知縣　數子
美しき少女に似たる花すみれ流にさきぬ朝の野ゆけば

新論文

編輯局選

▲規定　論文と云へどむつかしき事に限らずやさしき議論を歓迎す、同じく二十四字詰三十行以内半紙又は罫紙に認め一人一章限り、投書締切は毎月十五日、懸賞は甲種に據る。

五等　○女の武器

京都市上京通東竹屋町六十番地植野様内　小笠原　あき子

昔、武家の女子は、皆懐劔を帯に挾んでをりました、お主様の身を守り、又我身を護る時の用意と致しました、去れどこは女が持つ可き誠の武器では有るまいと思ひます、可弱い女の振翳す、匕口の切尖が、如何様に鋭く御座いましても、劍は矢張り一人の敵に過ぎますまい、世の古今、洋の東西を通じて、女の身を護る可き武器は、斯様な物では御座いません「弱き者よ爾が名は女なり」と謡はれます女子の武器は、決して、人を害ふ凶器では御座いません、女は女らしき武器を求めねばならんと存じます、優しみと申し、柔和と謂ひ、詰りは愛の心！是ぞ婦女が身を護る可き唯一の武器では御座いますまいか、武門の女子も亦是に依て身を護つて居たので御座います。枝垂る柳は雪折は無く優しきを挫く力は、神まだ人に授けたことが御座いません。

體格、力量が男子に及びません代りに、造物主は女に之を補ふて、又更に之を強からしめる爲にとて、愛てふ心を妾共に下さいました。

體力は人間存在の只一部で御座います、軀が冷けき墳墓の下に眠ります時に成りましても、勝利の榮冠を、尚其聖處にかざしつゝ、死したる我身の精靈を救ひ、世界の有らゆる姉妹達の爲に、凱歌を擧げます様な、無窮偉大の救護を謀る最鋭の武器は、只、これ愛の心で御座います。

振り分け髪の稚きをり……花顔月眉の娘の世……赤き手がらに丸髷を飾る時……追慕乳を求められる慈母の時代……果は壽老ひ、小照を殘して、無限不醒の生涯に就きました後までも、婦女は只愛てふ心の力に依てのみ、體を護り、人を救ひ、世に盡す事が出來るので有らうと思ひます。

史上に不死の英靈を留めて居る烈女の偉業は、皆この愛の心の咲き出でた、精華では御座いませんか、この心こそ、婦女が自他を護り、世を救ふ、最鋭の武器で御座います。

確論、但し平板にして他奇なきは未だ文の至れるものではない（評）

○ハイカラの説　沼津　八代美代子

皆さん！此ハイカラと云ふ言葉の意味は一體、如何云ふのが眞となのでしやうか、多くの方々で随分種々なお説も有りましやう、先づ此處に私が、過日或る二人の方からハイカラと云ふ言葉の解決を聞きました事を述べましやう。

或る誌友のお方で御交際云々の御芳墨を恵まれた方に對して、或る場合に此ハイカラの言を私から申進めました處、意外のお氣を損じるやうな事となりまして、此樣な御返信に接しました。

ハイカラー、(High collar,)即ち高きカラーの義普通より丈高きカラー、及び其を着用する者、西洋風を好みますること、及び其者、新しき流行、新しき服裝、流行を追いて服裝を飾ること及び其の者、ニヤケたること、輕薄なること、及び其者、私は失禮乍ら右の五要素を持ちません。と。

又或る方は私に對して、ハイカラの言を下さいましてこう、申されました。

ハイカラは、生意氣とは大いに違ひます。

ハイカラは退歩的でなく、舊より新による、即ち進歩的である、また消極的、マイナス的でなく、積極的、即ち進歩向上的、プラス的である、故に理想の高尚に適したものであるから、ハイカラは宜敷、愛すべきものである——。と、

僅か二人に二説が有ります、皆さん！皆さんは此中の何れを御考へに近い御説と思召ましやう、斯かる無學の私には、必ずどれこれ、と云ふ慥かな説は解りませんが、勿論此言葉に依つて一度に立腹する事は更に有るべき筈は無い、と云ふ事は確かに頭に存して居り升、皆樣の御賢察を仰ぐ次第で御座います。



お針　愛子

○挿畫論　府下　中島縫子

▲假令ば雜誌と云ふもの丶總てが、活字許りで出來上つて居てカットも無ければ挿畫も無いとしたならば、其の記事は如何に寂しく讀者の眼に映じ、且つ讀書力の倦怠を來たすであらうか。

▲挿畫の目的は、實に右の缺點を補ふに外ならぬ。

▲故に挿畫は、展覽會等へ出すものとは其の趣を異にしてゐる、から、材料の取場所なども方面が多い。

▲人間は兎角好奇心に驅られ易いものである。都の人がたま／＼山間を跋渉して自然の奇景に憧がれる事があつても、現在そこに居を構えて居る村人は、毎日見慣れて居るので何んの珍らしさうな顔付もしない、か

へつて市人が常に交通の機關とする彼の電車を不可思議のものよと思ふ如く、挿畫も、着想奇拔、筆法無類、たくみに人の好奇心に訴へ、始終新陳代謝的に、新しいもの〳〵と描いて、見るものをして眼を蔽ふ暇が無い様にしたいとは、妾が挿畫を描く時いつも頭を離れない理想てある。

▲「天下を取るものは眼にあらず、舌にあらず、力にあり」と云ふ事がある、妾は今後本誌投書家諸孃の力を待て、挿畫界に新軌軸を出されん事を熱望するのてある。

○讀書の樂しみ　下野　たか子

草深いゐなかに月花をのみ友とせる私に論文などゝ申してもとても立派な事は言へませんが、感じました事を一寸申上ます、凡そ人として生存する者に苦勞のない者はないでせう、又其を慰むる樂しみがなくてはなりますまい、酒食を樂しむとか、金錢をたのしむとか、一々數へ切れませんが、其人の位置境遇によつて異ります。

酒食の樂しみは唯一時の樂しみてあつて、後日の苦しみがあります、又義利人情もかまはず金錢をためて滿足してゐる者は多くは世の人にいれられず、自分ても自分の良心にせめられて心中常に愉快てはありますまい。何程樂しみても盡きず、後日の苦しみなく、永久に精神を樂しまするは讀書にまさる物はないてせう、讀書は居ながらにして國の動靜を知り、世界の地理を覺え、古人の來歷を偲ぶ事を得ます、又いかなるいやしい境遇にをちいるとも此の心懸さへあるならば、決して心までいやしくはならず、淺學の者ても自然に字も覺え、文章も上手になります、それに何程深入りしましても、後日に至つて悔ゆる事などなく、いよ〳〵智識も發達してまゐります、實に是程高尚な有益な樂しみが外にあるてせうか、ですから世の中の人達は出來る限り、境遇のゆるす限りは讀書に心懸けられたいと思ひます。

○目的と活動　下谷　蕉雨子

或人は曰はむ、快樂は凡べて活動の中、活動の後に生ずるもの故、其快樂を求めんがために活動するに、何の不可かあらむと、これ一を知つて未だ其二を了せざるものなり。若し人生の目的が快樂なりとせば、始めより之を求むるに若かず。然るに世には單に快樂と稱すべきものなく、何れも活動に伴ひ、或は之に接して生ずるものにて、活動して始めて快樂なるものを知るなり。加ふるに世には。其事の苦痛不快を來すべきことを知りつゝ、之に從事するもの少なからず。これ人生の目的は活動を主とするの所以なり。世の中に『タダ居ル』といふ事の平易なるものより、平易なるはあらざれ共、人世『タヾ居ル』程辛く難くして不快なるはあらざるべし。而して眞の樂しみなるものは、家に

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

巨億の財産を積み、出づるに車あり、座するに褥あり、飽食暖衣して、終生何の爲すべきこともなき者と、朝に星を戴て出ては夕べに月を見て入り、風雨寒暑を犯して、勞働に從事する者と何れにか多かるべき、何れが大なるべき、眞に高尙多大なる快樂幸福は、酒池肉林を充たせる、金殿玉樓の中にあらずして、夕顏棚の下、蚊遣を焚いて、一杯の濁酒に微醺を買ふ賤が伏屋にあるなり。世を安らかに送らんとするものよりは、勞働せざれば口を糊す能はざるものゝ手にこそ宿るなり。

玆に於てか吾人は、人生の目的は社會的に活動するにあることを、斷言するに躊躇せざるなり、故に志す事の時に逢はず、意に合はずして失敗するも、失望落膽の底に沈みて、遂に挽回し得ざるが如き狀態に、陷ることあらざるなり。成就するも失敗するも、問ふ所にあらず。唯其事を樂しんで爲す、これ吾人の目的なればなり。

○感じたまゝ　　伊東曉子

男子は常に社會の大なる事物を取扱ひ、壯大なる景色に接しますから其心は從つて廣く寛やかであります、けれども女子は之れに反して學校生活でも終ればかまどの前都と云ふ風に家に計りたれこめて居ますから心も自然に狹少になつて來ます。細事に動く心が惡く傾けば嫉妬などを起し、はてはヒステリーなど云ふ恐ろしい病氣になつてしまひます。女子は表面こそ溫和に見受けられますが嫉妬の焔が一度胸中にもえますと、尊むべき友情も破れるやうの事が出來てくる、其は新聞紙の三面記事がよく證して居るではありませんか。佛法に「三界一心」と說き古人は「內心如夜叉外面如菩薩」といつて女子を評して居ますが、實に女子の嫉妬心深きものは角こそなけれ鬼にも蛇にも等しいものであります、九州の山中には妬女の一念がのこつて化石となつて存して居ると云ふてはありませんか。愼まねばなりませんね。

それと云ふのも女子に見聞の狹い事が源因なのですから、女は廣く學問して世情に通じねばならないと思ひます。家にあるものも雜誌や新聞や或は婦人會などによりて世情を解し嫉妬をのぞきて心を高潔にもたねばなりませぬ。さすれば蛇とか何とか云ふ事も止んで終つて、即ち女權がそれ丈け上るわけてございます。それてなくつて男女同權などゝ叫びましても駄目だと思はれますね。お互に大に努力せねばなりません。

昔在原業平卿の妻女は「風吹けばおきつ白波たつた山夜半にや君が一人越ゆらん」と詠んで、夫の心を感化したつて云ふてはありませんか。淸き德ある婦人の感化は實に大なるものであります。

然しこゝに一つ注意せねばならぬ事は少し學問して聊か世情に通じたればとて、慢心を發し或は生意氣になつてはならぬ事て、靑葉紅葉相映じて始めて美はしき

が如く、女子は松にまつはる藤かつらと云ふ風にならねばなりません。しかも柔和なる奥に堅き決心を秘めて。終りに私はお互に心情を高潔にして社會を感化し女子は世の花であると云はれる日の近くならん事を祈ります。

○理想の家庭に就て

仙臺　原　霜峯

人様が理想の家庭、とか、スイートホーム、とか、未來に就て色々と空想を、描て居られますけれ共、實際になつて、御覧なさい、夫れは、萬事が思ひ通りに、いかないもので、私も學校時代には、二六時中、此んな事て、何んなに、小さい心を痛めたか、知れません、或は樂しい家庭を、つくり度いとか、子供の教育はこう、交際はあゝ、財政はどう、と云ふ風に色々の方面に、渡つて、考へる時には、既に恰も自分の胸の中には立派な家庭が組織されて居るのであるけれ共、又此れが、一朝、或事情に遭遇すると、忽ち悲觀的に陷つたりして、終生獨身主義を唱へたり、終ひには淺墓な、考へを起したりして、世の中を恨む様になるのである、然し何んなに樂しい空想を描たり、反對に悲觀的に、陷つたとしても、實際其場合になると、例へ少々否な大大的、不滿足な點はあつても、勢ひ、其れに、從はなければならぬ樣に、なつて來るので、此れが、所謂、浮世の習ひとでも云ふのでしやう、例へ、滿足に一家を持つたとしても、さあいざ、となると、一から十まで、皆んな調子が違つて、思ひ通りに、行く事は一つもない、何うすればよいか、何うすれば家庭が樂しく暮せるか、財政は何うすればよいか、交際はどう、子供の教育はどう、ともう此うなつてからは既に、遲ひのである、此れと云ふも、唯、前後の考へも無く、世間を度外視して、矢鱈に、向上主義に走つて、空想に耽つた、結果ではあるまいか、成程理想の家庭、スイートホーム、もいゝ、然し物には各程度がある、身分を省みず、世間の狀態に暗く、何んでも思ひ通りになると思つたのがそもそもの誤りである、尤も青春もゆるが如き、ロンテニス時代の夫れてあるから、無理はなからうけれ共、少しく冷靜な頭を持つて考へてみたなら、此の邊の所に、氣は附きそうなものであるのに、去りとは、餘り情けないてはなからうか、私も昨日、今日、漸く此んな事を思出す樣になつたのです。

○私の滿足

長崎市　野瀬あい子

是迄御友達の誰れ彼れを見ますと皆各女學校へはいつて、えらくなつて居らつしやいます、それて、私も宅は富有てないとは知りながら、なぜ女學校へはやつて下さらないのだらうかと、常々勿體ない事ながら、御兩親樣を、御怨み申して居りました。然し、今思へば、愚かな事てした、かう申しちやなんてすが、私どもよりまだ一字も讀めない方が、世間には澤山あるのてす

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

ものほんとうに、上見ても下見ても、限ぎりなしとは、よく云ひ傳へたものてす、最早何事もあきらめました、私今ては、人の勸めてある新職業について居りますもの、最早今の境遇に満足して、いろんな望みは、起さず、御兩親樣に、御孝行かた〴〵、此の事業を、熱心に務め樣と思ふて居ます。

〇郵便の樂み　茨城縣 須口鹿子

世の中に妾位不仕合せなものがありませうか、妾の父は一昨年中より難病に罹り、地方醫は申すに及ばず帝國大學病院、朝倉病院、池田病院、此外學士、博士の診察の上五週間位づゝ入院致して居りましたが一寸も効が見へません、ます〳〵重くなり博士に見離されて家へ歸る事となりました。母樣や妾の悲みはどうでせう、妾は口惜くて口惜くて父樣にすがりついて聲を立てゝ泣き悲みました。といふて家に苦み居ては益々惡くなる許りてす、又土浦齋醫院へ入院致しました。それから父樣の事許り考へて毎日々々悲みて神や佛に「南無父樣の難病を救け玉へ」と寢ても起ても「悲しい時の神頼み」て一心に念じて悲しき月日を送つて居りますのに、妾は父樣よりの手紙が一番樂みて郵便配達夫さへ見れば直ぐ駈けつけて聞いて見ると來ません、妾の胸中いかばかり、オッ足音がした郵便てはあるまいかと立あがつて見ると嬉しや配達夫、受取見ればこは如何に女子文壇心の悲しさを忘れやうとして女子文壇を讀み始める、面白さに少時父樣のことを忘れ、母樣はしく〳〵泣いて居る、妾も其の樣を見て眼に涕一杯耐ゆる事能はず遂に母樣と二人泣き悲んで居る處へ父樣よりの手紙、急ぎ封を切りて見れば「前とかはつた事はない醫師のすゝめにて熱海の溫泉に入浴に行く」とある、母樣は悲みながら「もう行つて終つたのか一旦家へ歸つて來てくだされればよいが」と急ぎ封書を認め郵便函に投ず、翌日熱海溫泉塲より無事到着の手紙並に熱海溫泉塲の風景立派なる繪はがきも來て妾の許に着した、妾の嬉しさいかばかり、其夜返しを認めて送る、早く治ればよいが、若しや。



學生　北多摩 原よし子

〇近頃の女　上毛 青木もり子

明治四十一年が來た、即ち讀者諸孃の文章の上にも餘程上達して來ました、その爲に寫眞の交換やら文のやりとり男女混合のかるた會やら、又は小説を以て人生最上の目的とせる人も少なくない、どうも天狗ゝ天狗

の鼻の比べつくらばつかりになつて來た。中には男女同權などゝなまぐさい主義を持出して、得意然として吾は何々學校卒業生徒ですから何々如き賤しき者と言を交はすと人格が下がると云ふて、ツンツンして居る、道路上ても身に反りをかけて、前様のくるにもかゝはらず老年と云ひ小兒と云ひ道を人に讓づらず、平氣然として行き過ぎ去るも全く美しく見えない、女の癖に人に道を讓られたら何とか云ひさうなものだ、私は實に此れ等の主義には全く閉口だ、日本人が西洋の眞似をして男女が手に手を連ねたところが西洋風の糟粕を祇る様のものだ、西洋て男女同權などゝ云ひます様子てすが、それはホンの記號て都會にある時だけてあるさうてすよ、女は常に謙譲の二字を御守にするのが一番藥だと思ふ。百合の花見ても蘭の花見ても水仙の花見てもだ、女は女の様にしとやかに落付て粗忽のなき様にしたうござります、近來文章迄にも大へん女らしくないのがある、女の品性上から云ふと大いに注意すべきであらう。

◎偶感

神田　水野照子

理想と云ふ語はこの頃の流行語てす。今の女學生て理想と云ふ語を知らない人は無い様で御座います。而して其所謂理想と云ふのを聞いて見るとどうやら空想と間違ひ相てす。先づ理想の夫を持つて（この夫には華族、博士、學士、富豪、等が候補者て）スヰートホームを作つて、御自分は交際社會の花と稱せられ、國中の羨望を自家一家て背ふと云ふ様な誠に好都合な御話て御座います。

然し立派な人となるには其れ丈けの資格が要ります。實力が要ります。而して自ら其地位になる様に働かねばなりません。實力も無しに又自ら力も用ひずして徒らに夢の様な事を云ふたり神様の前で無理な御願ひをしたり、僅か壹錢の開運御守て思ふ通りに成功が出來ると思ふて居ると大變な間違だらうと思ひます。こう云ふ人が即ち空想の人と云のてせう!! あまり空想ばかりを畫いて居ると失望の次ぎが華嚴の瀧と云ふ順序になります。妾は若し迷信や空想に費す時間があらば一歩でも自分の志す方へ近く様にはげんだらよいと思ひますの。いつてしたか斯う云ふ掛軸を見ました。其掛軸は大黑様が例の俵の上へ上つて槌を振り上げて居らつしやる繪で、其畫讚が面白い。

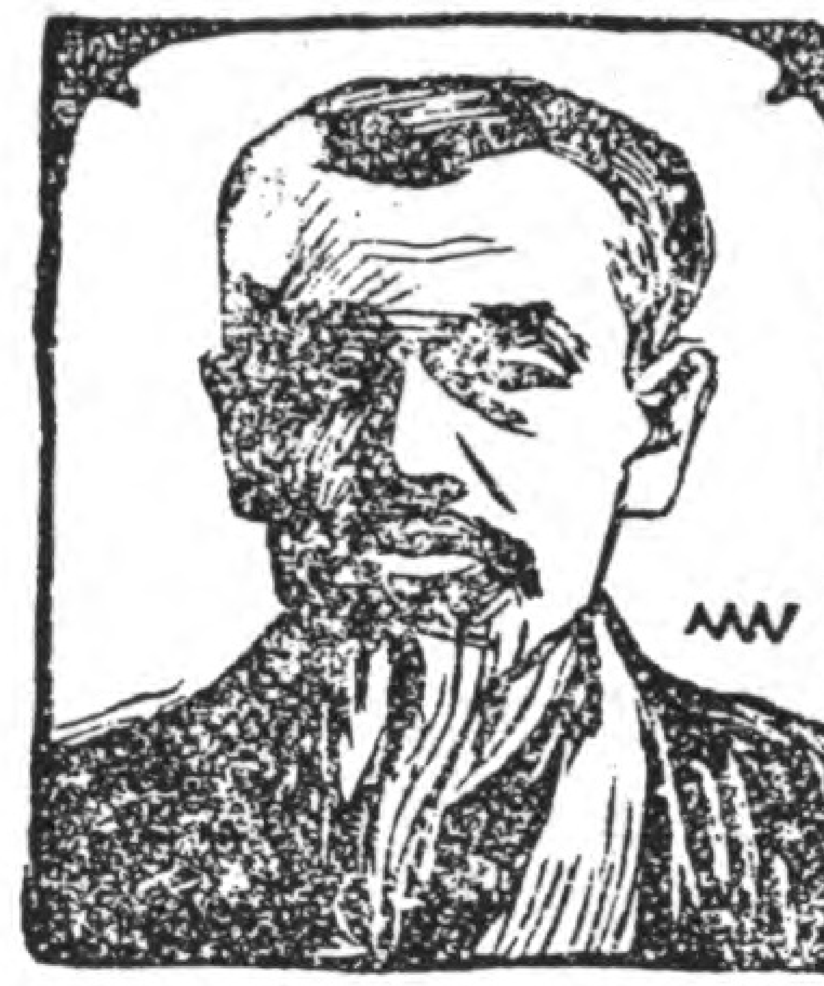
わが槌は寶振り出す槌でなし
なまけるものゝ頭打つ槌

と云ふのてす。これては何程御願ひ申しても御寶が貰へ相にもありません。

何うか誠實な眞面目な心を持つて自分の力て自分の汗て所謂理想通りに成功したいもので御座います。おや生意氣な事許り申して御免遊ばせ。

俳句

内藤鳴雪先生選



▲規定　先人を模倣せざる獨創の佳句を望む用紙は半紙を用ゐ、一人一句以上の投吟を許さず、締切は毎月十五日とす、懸賞は乙種の規定に據る。

春の水妹の草履を濡しけり　伊豫　福井さゆり
手をうつて鬼呼ぶ聲や花の中　京都　田中琴子
春の宵寢顔並べし禿哉　上總　吉野みわ子
春はまだ鶯色の景色哉　常陸　平澤やよひ子
水仙に靈やこもれるほそ灯　伊賀　菊山かね子
風呂に聞く芝居話や春の宵　札幌　佐藤千代子

桃の花緬の小袖に散りにけり　大阪　よしの
嫁が君そと通ひけり小殿原　備後　小林靜子
里川の芹寸にして水溫む　千葉縣　内山まさえ
念佛のかれチヤン〱と夜さむかな　沼津　靜山
紅梅や障子繕ふ歌の反古　京都　みどり子
鶯の聲も冷たき小春かな　岐阜縣　日置桃花
おばしまの月に美人の假寢かな　上總　四之宮あき子

つるし柿軒端の月も老にけり　津市　越村文枝
凉しさや森に草喰ふ放れ馬　熊本縣　富野かず夫
梅さげて師の門たゝく月夜かな　京都　村上とく子
髮洗ふ水に若葉の恨かな　越後　河島和歌波
白藤のかげもなつかし山の井戸　伊豫　あかつき
絶壁に雪崩れ落つ月夜かな　備中　篠原繁子
山寺やかけ樋音して冬の月　下野　梅澤哲子
卯の花の散ろに音なき小雨哉　千葉縣　竹澤ちか子
雁なくや曉の松宵の松　大阪　辻廣子
春の風店の江戸繪を吹きちらす　名古屋　渡邉慶子
春雨に濡て美くし鳥の聲　八王子　三谷かれ子
菜のくゝり枕や春の宵　岩代　露女
春雨や二階の下の蛇の目傘　相模　鍋田靜子
小冠者の踏み潰しけり路の薹　丹波　清水白菊子
終夜凩するや女人堂　越後　藤原文子
吹く風も秋に嬉し今朝の春　下毛　波眞子
蝶幾つ中にまぜりて花吹雪　丹波　伊東菊枝
鶯はみのがし給へ鷲明神　越後　山本白萩
岩角に鹿あらはるゝ月夜かな　泉たつ子
かたむきし納家の邉りやすもゝ咲く　大和　久保榮子
月落ちて水車のきしる寒さかな　岐阜　花子
春風の袂いつぱい吹きにけり　愛知　天野やえ子
ゆつたりと大船着きぬ春の海　北會津　白井絹江
船の灯の水に親しむ朧哉　千葉縣　深山りゆう子
菜の花の中に山あり家もあり　上總　齋藤もと子

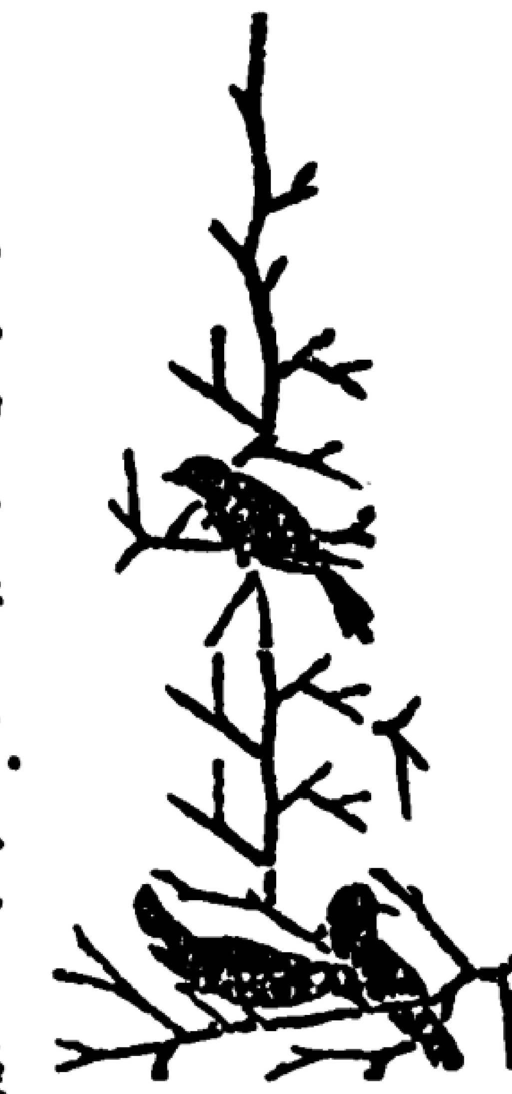
Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

春の子に乳を與ふる長閑かな　尾張　井戸田ぎん子
篁溢けさは棚下にこもる深雪哉　鳥取　島村かつ子
行く舟に謡の聲や春の海　柳河町　野中玉芳
笹舟にのせて流しぬ花一つ　千葉縣　鈴田しづ子
打開く窓ありたけや今朝の春　上總　北田美知子
春の雲暖かさうに浮びけり　千葉縣　松ヶ枝浜江
名月や廣き流れに橋一つ　西多摩　森田きよ子
逢ふ戀を二人濡れけり春の雨　愛知縣　永田鶴野子
みたらしに夜をほの／＼と落花哉　富山市　小林芳枝子
若駒は外に繋ぎて極屋敷　磐城　眞砂家華子
洞門を出づれば灘の月夜かな　安藝　箕岡はる子
ちぎれ雲流れ／＼て月一つ　秋田縣　工藤みさほ子
大寺の燈火爛たり夜の雪　上野　山下美枝
鶯や都の隅に初音して　上總　古山香鶴
よき人のよき衣干しゝ春日哉　下總　越川つれ子
牖から飛び來る蝶や春の風　大阪市　櫻井ふく
子雲雀の立たまくすなり夜の風　越後　藤原富子
岬廻りの灯もうづもれぬ花吹雪　金澤市　むらさき女
駒止めてしばし落花を眺めけり　京都　宮原紫紘子
行く秋を案山子の弓の弦切れぬ　越後　早津月子
舟に立つ高尾が顔や夕霞　遠江　増田糸子
鶯に鞍置ける馬曳き出す　三河　鴎涯女
雪解けに京の商人來りけり　陸前　小野寺みさ子
海苔取りのまだ身にしみる餘寒かな　京橋　細川秋湖
竪低う連も亂れて歸る雁　下總　平山喜美子

きり岸に一輪にくし秋すみれ　越中　鷄月
行く春の青葉に見えぬ野寺かな　豐後　菅原鶴子
瀧口に人の聲して春の宵　豐橋　福須子
燦として花の祇園の灯かな　京都　小菊女
傘さして木の芽摘むなり朝の雨　丹波　馬場千賀子
絵日傘をつぼめて行くや花の下　青森市　村林やす子
外風呂に亂れて咲きぬ萩の花　遠江　原木富美子
春風や法師の笠の斜なる　廣島　長谷川泰子
烟這ふ屋根の低さよ桃の花　下總　平山きさ子
春雨や町の灯見ゆる夜の港　磐城　遠藤華子
美くしき小島の聲や若葉山　信濃　原波子
貝寄や松の上なる高燈籠　水戸市　小桃子
桃の宿こもをあみ居る翁かな　岩手縣　佐藤錢子
吉野にて下駄求めたり花のあめ　青森縣　木村てつ子
春の海帆も數ふべく長閑なり　紀伊　榎本千鳥
斧音のこだまに散るや山櫻　相模　目代奈加子
路の蚕貰ふ畑あり姉が家　信濃　駒澤ろむら子
小波や船の煙も春の海　上總　小川けふ子
川端にテニスの庭の柳かな　長野縣　宮島清子
豆やろと少女唄ふや春の風　下野　くに子
桃の雨粉を挽く音の小家かな　京都　佐々木しげ子
湖に沿ふて低き草屋や桃の花　大和　栗山麻子

短文

瀧峠局選



規定　十六字詰七行以內、總て振假名を付くること、締切前同斷、懸賞は乙種に據る。

二等　○地ひゞき

信濃　黃紫女

毎夜夜更けてから私は身ぶるひします、それは木曾トンネルを堀る地響の爲です、深い〳〵闇を縫ふてひゞきゆくみち〳〵いく人にこのやうな思をさせます事やら、草木も眠る丑三時を彼等工夫は休まないのでございますよ、蒼い顏をした工夫は——。

陰森の氣㐫に迫るてせう

三等　○落書

奈良縣吉野郡賀名生村　中窩よしみ

私の村に一つの荒寺があつて其古き壁や扉に色々の古き落書が殘つて居ます、心を靜めてそれを熟讀しますれば、自分の御祖父樣を初め多くの老人の嬉々として遊び戲れる樣があり〳〵と目の前に浮んで來ます、あゝ寺子屋の面影をとはに傳ふる趣味ある落書よ。

さすがは田舍、落書にも年代あり

四等　○お寶

大阪市南區上本町七番外　北島やゑ子

私の家には御先祖から傳つてある尊い尊いお寶がございます。所が父の代になつてそれよりもまだ〳〵得難いお寶がふえました。それはとつて九十五になる御祖母樣です、此頃は毎朝一番雞の聲と一所に起て裏の竹藪へ鶯の聲を聞きに行かれますいつもお相手には私がお供して：…。

活きてゐるお寶だけに猶ほ大切になさい

五等　○花と實

泉南郡男里村金田秀太郎方　金田芳子

栗の花は長く咲いて小さき實を結び豆の花は短かく咲いて長く實を結ぶ夕顏の花は大きく咲いて小さき實を結び西瓜の花は小さく咲いて大きなる實を結ぶ。七重八重に咲く山吹に實なく一重に咲くなすにはことごとく實あり

人間にも仇花あり

秀逸

○私のスケッチ

月島　田村波津子

彼方の波の上に數知れぬ程鷗が遊んて居りますから靜にスケッチブックとペンシル取り出して書き初めた處が何時の間にか飛び去つてしまひました。

オヤ〳〵

○我が町の茶　靜岡縣　吉田やす代

私の住んで居る所は茶の產地て、町の後の原へ登つて見ると廣々とした所に茶が植はつてゐる。五月時分になると、青々と新芽を出して居る其の所々に絕えず少女の茶つみ歌が聞える、茶を商ふ家ては其れをもつて一年の生活をしてゆくのてある。

暗いうちから茶摘うた

○和歌　池田町　寺部君子

私は何よりも和歌が好きて御座いまして、女子文壇へ投書する樣に成りましてから、毎月缺さず拙ない和歌を出して居りますが未だ秀逸も取つた事が有りませんので責めて一度なと秀逸てもと、此次は又其次は此度こそはと思ひ〳〵出して居り升、此れても上手に成れませうかと心細いてす。

上手になる時は何かのはづみがあつて二三ヶ月の間にウンと上手になるものです

○雀　三河　富美子

雀の步く處を見ると、長者になれると妾の方ては云ひます。雀は飛んて步きまして、たゞ步く處は仲々見へませんけれど、朝早く起きますれば雀の步く處が見へる相です。

それも矢張細かく飛ぶのでせう

○河鹿蛙　群馬縣　茂登子

家の東には、桐生川が流れて居る、いつも水が綺麗てある、夏になると河鹿蛙が美くしい聲てなく、其の聲といふたら眞實に譬へ樣もない、其の蛙が、今のうちに、水と一しよに何處へか行つてしまひはせまいか、と思ふと、早く夏になればよいと思ふ、そして、其の床しい聲が早く聞きたい。

東京からも聞きにゆきます

○女の最も恥しきこと　羽後　柳子

人の澤山寄り集つた席て、意地の惡い女の方からあなのあく程顏を見つめられて、さて大聲に「まあ貴女のお白粉のかたまつてること」……。女にして此時位はづかしく口惜しい事はありますまい。

恥しいことは未だ外にありさうです

○女心！　あやめ子

睦じい夫婦を見れば家庭を作りて見ようと思ひ、女學生を見れば獨身生活を氣取り、高貴の姬君を見れば、せめて一度あんな生活をと願ひ、花賣りを見れば、その詩的を慕ひ、金色夜叉を讀めば黃金結婚を打破して愛情結婚を主張し、美しく盛裝した貴婦人を見れば黃金の尊さを思ふ、吁これ女心か？

否！、人の心です

○妾が机　佐賀縣　橋口御幸子

妾が小學時分迄は机と云ふ机は持つ

て居ないのでしたが、兄様が高等小學を卒へて上京されましたので初めて妾の机と云ふ事が出來ました、至つて粗末な机てすが聞きますと妾の父樣迄が丁度六代目だ想てす、抽子を開けて見ますと成程其の裏の底板に年月日と姓名とが六名前墨染してあります。

お家の重寶

○百舌鳥の巣　相模　石井和子

百舌鳥が裏の榎で、朝は鷄鳴曉を報ずる時分から、夕は彩雲の亂れ飛ぶ頃まで啼てゐる、又巣を造たのだ始めて造た時は兄樣が入營する、二度目は姐さんが死ぬ、百舌鳥が巣を造る度毎に家に變り事がある。此度は妾がお嫁に行くのてす。

吉あり凶あり

○宿屋　紀伊　志づ枝

私の地方は近頃宿屋だらけとなりました——と言へば御不審に御坐いませうか、實は二月頃から其處此處で痘瘡が發生しますので戸毎の軒には

長閑　千葉縣　松ヶ枝浪江



「さゝら三八の宿」とか「鎮西八郎爲朝の御宿」とか書いた紙がはりつけてあり升のよ。

迷信も短文の材料となり了る

○主義　神奈川縣　木村はる

私が通學仕て居りました時分先生が私等に主義を書かして其れに先生の印をおし長く之を身に付けて何を爲すにも此の事を思ひ出してすれば間違ひ無いと仰せられました誠に善い事と今で否一生守るつもりです其主義は一女らしくせよ」て有り升。

主義？

○淺間山の煙　上毛　大沼秦女子

淺間山の煙りが北へ靡くと、何時も長閑な日和て、裸ッ兒の洗濯日だと言つて、人が皆悦びますが、南へ流れるのを見ると、明日は大風かと言つて厭がります。て、是れからは、常に北の方へばかり靡くので、私し始め、皆樣が大よろこびて働いて居ります。

山も活き人も活きる

○登山　齋藤もと

私の里から筑波山へ六里、日光へは十八里、富士山が六十里、天城山までは七十餘里もありませう、去年の夏伊豆下田なる友と富士天城へは登りました、近い筑波や日光はまだ知りませぬ故今年は弟と登山する意です。

もはや女人禁制も恐るゝに足らず

○妾の村の朝　青森縣　松尾とし子

四方高い山と山との間でありまして東と北は杉の森が晝も尚淡暗い樣に茂つてゐます。だから一里半許り離れた三戸町よりは少し遲く夜が明けます。然し、空氣は町よりずつと新鮮であります。

太古の空氣

○濱　上總　松井きみ子

私の故郷には美しい濱がありまして、色々の物が取れます。そして四五月頃になると、通稱なんきんほうづきと云ふのが取れます。夫故子守子供等皆んな取りに行きます。其のほうづきのはえかたが妙です。いくつも行列をして波にゆられて、隨分面白う御座ります。

東京の鬼灯は緣日の道ばたに生へて居る

○降誕日　麻布　靜江

室の中央の大きな降誕日樹には、白や赤や黄の蠟燭がともされて、隙もなく賜物が下げてある。大きな紙鳶美しい鞠、さては長い靴下に何か一杯つめた迄も、優しい白い髯の、サンタクロースのお祖父樣のお話が今すんだ所。可愛い聽者の顔には、美しい愛の光が輝いて居ます。

神の榮光

○習字　讃岐　富士子

私は、いつもお母さんが、女は習字が大切だ、ましてお前の樣な無器用な物は必要だ／＼と申されます、だからお正月から毎朝々々五十字づゝきつと忘れずにやつて居ります、が一寸とも手が上りません、ほんとに字といふ物はむづかしいと、やうやうわかりました。

日に五十字、一年に一萬八千二百五十字、此れで三年も辛抱すれば天下の能書たることが出來るでせう

○とし　大阪　今西こゆき

五つ位の子供に（あなた年齢なんぼ）と尋ねると、兩手をひろげて（これだけ）と答ふ、（オー仰山）と云ふてやるとニコ／＼してゐる。が十七八の娘に問ふと、きつと一つ、甚だしいのは二つ位も年齢をかくす。これに反して老人に問ふと、七十位でも八十だと餘計に答へる。

かくしたきもの、曰く、年齢

○不知火　肥後　木村きよ子

筑紫の不知火といつたら、上古から有名で遠いさかひの人までが、よく知つて居るのに私は肥後に居つて

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

さへまだ一度も見た事のないとは、誠に殘念でなりませぬ。

今も燃ゆるや

○小遣　下野　鈴木まさ

私は毎月お父さんより小遣を二十錢づゝ戴きますの其れて學校用具を買つて其殘金を小さい箱に入れて置きました此間かん定いたしましたら三圓十七錢になりました其れて大島がすりの羽織をこしらえて毎日うれしく着て一心に學校に通ひます。

お父さまも御安心

○牡丹の露　京橋　三好まさる

私の家の庭には澤山の牡丹を植て置きまして、花が咲く頃になりますと、毎朝御日樣が上らないうす暗い中に起て美しく咲亂れてる花に宿した露を、小罎に集め取つて置ますので一年中、其の水でおしろひや京紅をとかす料には充分で御座います。

天の香水

○おぼえ帳　臺灣　中村政子

妾は小さい時からずゐぶん苦勞をいたしました、其の時々自分の餘程悲しかつたり、くるしかつた事など、一々おぼえ帳に書いておきます、妾が後日多くの子女の母になつた時、よき敎訓にならうと思つて大切に保存して居ります。

時々は世の中にも示して下さい

○珍世界の木戸番　東京府　吉田たつ子

先日の日曜に姉樣と一所に淺草に行つて珍世界の前を通りましたら姉樣が一寸彼の木戸番を御覽と仰るので振り返つて見ますとまあ本統に珍世界の木戸番に相當して居りますのよ東京にいらつしやる方々は今度注意して御覽なさると分りますワ。

又之れ珍世界の出品物

○造花つゝじ　大分縣　平田小春子

一週に二時間づゝ、積り積りて早何十時間、半開、滿開、蕾、葉、皆出來た、是を一まとめにして、花瓶にさそうか、かんざしを澤山作らうか。

大きな花束

○落葉　下谷　細谷琴子

裏庭に澤山散てゐた落葉を、私は一生懸命に一葉も殘さず掃寄せて置て、一寸家へ上り御母樣の御用が濟し、先程の木の葉を取らうと思つて行て見ると、まだやつと三分位しかたゝないのに今きれいに掃た許りの處へ、彼方にも、此方にも、木の葉が散てゐるのよ。

○小說の材料　橫濱市　本鄉以楚子

私の家の前は毎朝賓にごた〳〵します先朝は平沼女學校横濱女學校中學お役所通の方々が通ります夕暮れには右の人々及びお茶場通のお内儀さんが高話して歸つて來ます此等の人々を注意して見て居りますと小說を作るたしにもなりましやうと思ひます。

○早起くら　若狹　山田鐵葉

隣の富子さんと毎朝早起競べをして居ますので す起きたのを通知すのが面白い、隣の庭と内の庭前とへ糸をつり下げ其兩端へ球を付けて兩方共適宜の位置にして何方か早起した者が引けば彼方があがる仕掛なの、時々同時に引張る事があります。

○牧塲　山形縣　杉葉女史

東が白むと、直ぐ山小屋の假床を起き出てゝ、兄樣と共に圍ひの戸をひらき、若草が一面に生へ茂つて居る廣々とした、人里遠き牧塲に放つ四十頭餘の牝牛牡牛と共に、妾は毎日餘念なく、平和な春の光りに浴すのであります。

○火災除け　信濃　前島胡蝶

私の生れました上田では、一月十四日の晩に「浮草の一葉たりとも島隱れ、思ひぞかけな沖津白浪」「霜柱氷のはりに雪のけた雨のたるきに露のふき草」と書いて、板戸に張り附けます。是は火災除けと云ひ傳へて居るのであります。こんな事をしましても他に劣らず火事は御ざいます。

○笑凹　尾道市　しらうめ女

一心不亂に編物をする手を休めて、不圖並んで居る道子さんを見ると、血色美しい頰に亂れる鋭毛を、風が嬲るのも氣にせず、道子さんも編物に一心不亂、不圖道子さんも手を止めて、妾の顏を仰ぎ、優しい聲にて「なに?」聲と共に頰に二つの笑凹を浮べて莞爾。

○手紙　伊勢　山路くに子

母樣のはいつも『御姑樣や弟樣を大切に』弟からのは『私は身體も强壯て勉强して居ます』お友達のは『和子樣嘸かし御成人にてお樂しみ』と定まつて居ますが此頃母樣のは變りました、『子供が出來たとてお臺處の事をゆるがせになさるな』と

○戀愛論　南豐　野守女

私等のように衣食住の不自由な者は、そんな餘計な事を考へる餘裕がないが、富裕なお方の中には、「星よ菫よ」「あゝ我れは惱めり」などいつて居る方もあるでしよう。我が子を惡い所に緣組させようと思ふ親が有ますか。餘計な事をあんずるは、愚かではありませぬか。

○誌友帖　常陸　鈴木花子

私は今度、皆樣の情のこもつた筆でお書きなされた圖畫書方や和歌俳句等をお送りを願つて美麗な和綴の本を製つていつも〳〵それを手にして、陰ながら皆樣の御成功なさるのを、ひたすら祈らうと思ひます。

○妾の村　南紀　齋藤秀子

妾の村は七十四戸ばかりありまして商家が十四戸、他は皆お百姓てす、男子の中學を終つた人が二十六名、在校の人が八名てす、女子の中學を終つた人が十二名在校の人が六名あります、そして私は其の内の一人てあります。

○私の學資金　茨城縣　佐藤靜子

私は毎月學資金として、郷里から九圓づゝ送つていたゞくのです。そして下宿料が五圓五十錢、授業料が壹圓五十錢、あとの殘りて日用品、其の他をすますのです。

○平和　香川縣　松井一枝

あゝもう休まうかしらと一心になつて文壇をよんでゐましたがふと氣がつくと今迄横て猿くゝりして遊んでゐたしーちやん、いつの間にやら机にもたれてすや〳〵可愛い顏は平和に滿々てまあどんな夢を見るのでせうか、かたほに笑をたたへて……。

○大島燈臺　日向　甲斐玉歌子

星の光に見渡せば、水天髣髴の間に一點の青螺横り、火影を望む、消えしと思へば東に湧き出て湧きしと思へば西に消え、おりしも寺の鐘雲間より響く、嗚呼海岸の生活の愉快さ。

○絹子樣　本郷　新妻操子

詩集の上に綺麗な雛鷄が二羽、餌を啄む一葉の繪葉書。水塋鮮に絹子樣と知る。讀てゆくと『操子樣私、終々……』と筆が切れる。なかしい。表に返すとお處もお姓も。あらと思つた時一句が解けた。丸髷姿が目に浮ぶ。早う此の謎の如うながとお祈まうす。

○朝　南紀　むらさき

妾は眼を覺ました、時計は三時を打つた、起き

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

ようと、枕邊のマッチを手探つて擂つた、パッと明るくなる、ランプに火を移す、刹那の光は永久と變じた、瀬戸物の火鉢、昨日の雨漏を受けた手桶、それから昨夜弟が持つて來た踏繼が眼に映つた、コケコッコーと一番鷄が何處かで啼いた。

○登校前　埼玉　花子

毎朝戸を明けましてから參りますのが第一が新聞屋第二が牛乳屋そして第三番目の人がくる時とこない時が御座います、その時のうれしさ迚もこゝには書き表はす事ができません、それはお懐しい誌友の皆様から美しい繪葉書下すつたのですもの。

○頼み事　權現原　雪見子

妾は今年十七でありますが、東京といふところに行つた事が有りませんから、お父さんや兄さんにぜひ一度つれて行つて下さいと頼ますが、まだ連ていつてくれません。

○燐寸　岐阜市　篠田とみ子

私は燐寸の小箱一つ、常に携帶して居ります、其れて自分の用になるものは云はずもがなてありますが、他の方の間に逢ふ事も度々あります此間も停車場て、それは〱背の高い外國人が煙草をくわえてまご〱してをられたので、早速かして上げました。

○手向の花　和歌山市　加藤重子

擔へ來りし草の花を、先祖の御墓三基に供へて尙ほ一莖二莖殘りつ、如何にせむと考ふる迄もなし、すぐ傍なる他家の石碑の、近頃誰も詣てぬにや花もなきに、これ幸と挿みて、水さへ手向けて歸りぬ。


洗濯　芝　伊藤とし子

○作りそめ　大分　蓮のや操子

覺束ないとは思ひ乍ら此頃和歌と短文とを投書して見ましたところ、無論短文は沒書……和歌だけは誌上に見えましたので其嬉しかつた事何とも申様が御座いませんでした、それからは、どうかして姉様方のお裾にすがり度いものと暇さへあれば文壇を熱讀して居ります。

○雪のトンネル　仙臺　白菊子

高田は冬になると雪が廂よりもずつと高く積るのは珍らしくないといひますから、其の時は甚麼して通行するのでせうつてお母様に聞きましたら、トンネルのような軒下を通行する、とおつしやいました、汽車で通るトンネルは眞暗ですが、雪のトンネルは白くて明るいでせうか。

○鶯の聲　大阪市　室谷ひさ

長閑な朝日が窓からさし込んで庭の梅に鶯が面白く歌ふて居ります、今故鄕のなつかしい町子様から御手紙が參りました、アラマアことゑ様も拾子様も御嫁に行かれたと春江様も行かれましたとそして終りに恥しながら私も春田と變りましたつて、鶯は此方をみて歌ふて居ます。

○種蒔　淡路　小泉さく子

去年兄さんが暑中休暇のお土產に持つて歸つて下さいました此花種十一種朗らかな天氣に蒔きつけて置こうどんなに美しい花が咲きましやう？「花！麗しい花の顔で卒業の兄さんを祝つて頂戴！」其時こそ世話甲斐もあつて兄さんをお迎へせし妾の心は如何てしやう。

○日曜の朝　神戸市　紫峰

奨以敎會の朝の鐘が八時を打つた。私は大變の朝寢と急いて起きました、天氣はと窓を開いて見ると絲の樣な雨が庭の池に小さい波紋を起こして崩え出たばかりの青柳に烟つて居る。お花見は雨て流れたが、さぞ花も泣て居るだろう⁉私も折角の日曜をと泣きたくなつた。

○薔薇　山形市　土井ちとせ

あばらやのやれ垣の中にいと美くしき一本の姫薔薇、わかきはぢらひにやいたく〳〵しううつむけり、我は何となう床しくなつかしくて近より見しに、あはれや彼の涙は紅色にうすく光れり

○病床　周防　露子

恐ろしい夢に不斗目がさめた。苦しいので寢返りをうつと、冷汗にぬれた背に着物がついて心地が惡い。天井を見ると例の節穴がオイデ〳〵と私を招くようだ。目をそらして欠伸一つ……、臺所に茶のにえ返る音がする。

○挽臼　土佐　美枝子

私の家に昔から代々傳つた挽臼があります、誠に粗大なもので、弱虫の女などは挽くことがてきません、私の母は、お餅の粉などを挽く時はいつも私に手傳はせますが、私は獨力で挽くのに少しも苦しいと思ひませぬ。

○春の宵　香湖

もうねようと思つて讀掛の本伏せて立ち上ると何處の御母様かお優しいお聲て子守歌を遊して入らつしやるのが聞へます、あゝ私も幼なかつた時分彼様にむづかつて母様を困らして夜ふけに外へ出た事も有つたてせうよ、戸外は朧月夜てす。

○嬉しき日　八王子　富本登美子

夢さむれば、お日様は東向の窓の障子一ぱいにさしてやれ嬉しや、今日も朝からのお天氣、朝餉の後、學校へ行くと、歴史のお噺しが上手だと云つて、先生がお賞めになる、修身の點が十點喜びながら家に歸るとなつかしい光子様からの玉章が一通。

○冷汗　豐後　江藤ゆき

一體私は痩せたのが好きてす。儘になるなら此の半分にと手を擦つて思ひます。「大層暖かそうてすね。」と言はれてすら弗としますのに、郷里に歸る度毎に母様が「オー肥えたな。」と莞爾する。私は母様の御心持が曉りかねて、腋下から冷汗が出ますわ。

○お節句　京都市　大森春子

待ちに待つた三月のお節句、お座敷に雛人形を飾つて誌友の姉様方の寫眞も并べた、て勝手元て御馳走の拵をして居たら今年五歳になつた弟の房坊が、姉さん雛さんにお團子上げたよつて云ふので、お座敷へ往つて見たら、マー大切な人形の口元は團子の餡てべたべた。

○學校の近所　南豐　都月女史

我家の裏一丁程の處に高等小學校がありまして毎日生徒の遊ぶ時間と授業の時間迄がよくわかりますので時計も何も入用ませんが日曜の時には大變さびしい。

○日記　京橋區　櫻井久子

私は必ず床につく前には日記を付けるのであります、私は其れを付けないて床につくと其の晩は何んだか大變な罪惡を犯した樣な思ひがして本當に寢られません また翌朝起きても氣が晴々しないので私はどんなに夜遲くならうとも日記だけは必ず付けなくちや寢ないのです。

○私の仕事　信濃　内山犀波子

私の家ては冬になると紙を漉くもんてすから私は楮をかく役てすが、暖い時ならばまだしもの事寒い時つめたい仕事をやるのてすから、霜の日や凍る夜などは一しほ困難てすだけど此頃は女子文壇のお蔭て苦勞なこともなく其上仕事が多くてきる樣になりました。

○思ひがけずも　青森縣　三浦愛子

朝目が醒めると椽側の戸が開け離れて祖母はあかあかと障子を照して居ります私は床の中てうつとりと障子に寫つる梅の花を數へて居りますと何處から來たのか、小鳥が面白さうに梅の枝を飛び廻つて居りますから、起きて見やうと思ふて居るとおもひがけずもホーホケキヨと啼きました。

○夕暮　小石川　唐崎秀子

クヅイークヅや御拂の聲もりんごに柿に蜜柑と呼ぶ人の聲も無くてひつそりして居る町の夕暮私は夕飯の仕度に忙しいそして一日工場て勞れませる父君を待つのである。

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

○家内の癖　佐賀縣　岩井くり子

父上は來客の時鐵瓶のふたをはやすのが 母君は一寸も字はかけないと祖母樣は いつも同じ事を云ふのがくせ 弟は外出の歸りに小聲て御免下さいと私は 物を考へるのして今年五才の弟はまけても勝ても萬歳と手を揚げるのが 先づ家中のくせてす。

○押花帖　仙臺　河原榮子

雪のある日去年の押花帖を開て見ますとすみれは罪なき少女のやう梨の花は世を捨てた 尼君山吹は恰ど靑春の血燃ゆる 女學生また撫子は操正しい大和少女の姿そのまゝてす。

○小梅　埼玉縣　岩田不在子

私の家には 小梅の木がありますのよ。花は普通のと違ひませんが、實は可愛い程 小さいのてすそして半分は紅ざして美しく、其 おいしさと云つたら……。 熟すと毎日幾 粒かづつ落ちますそれをいかなる日ても倦きず拾ひに來る者が 皆幼子ばかりてす。

○病める夜　神戸市　松永苑枝

病んてもう三ケ月目、何故癒えないんだらう。今晩は一寸眠れば苦い夢、懷中時計は 十一時を指してゐるのに。 時計を持つたまゝ胸に手を置くと、セコンドの音は 胸板に死の影を印する樣嗚呼、 この鐵鎚が君さんの 命運を裁つたのだ。

そして妾は病氣だ。 おもはず時計を握りしめました。

○床に就く時　熊本縣　池邊しづ

私しは毎晩床に就く時には乾度 女子文壇を枕許に置いて寢るのが常てす、 そうしますと お情深い記者樣や 澤山の誌友達と一緒に眠つてゐる樣な心地がいたしまして、 どんな寂しい 秋の夜てもすぐに安らかに 楽しい夢路に入るのてすもの

焚火　赤坂　成瀬静江



○十日市　山形市　土井ちとせ

舊暦の正月十日には、 十日町や 旅籠町の兩側に多勢の 商人が出て、 いろ〳〵なものを、 賣るのてございます、 これを 十日市と申します、 こうして、 昔の不便だつた時の事を、 いつても〳〵忘れない樣にするのてございます。

○わが髪　茨城縣　久野たか子

泣いて別れたも夢、 死なてはと 心に誓ひし門た髮斷つて出てたるも夢、 世はふたたび 春となりしかど、 わが心は 永く氷の領となりぬ、 今髮は延びて肩を過ぐれど、 かざすべき簪は 妹に贈り從妹にわかちて三枚のごむの櫛を 留むるのみ、三月九日ほのかに人の 新人を迎へたるを聞く。

○古時計　岩代　松の根本

其以前、 祖父樣が求められたと云ふ 八角時計。今なほ時の刃を刻て居る。 此音が 遂に、 祖父樣や父上を地中の人と 仕て了ひました。

○居間　名古屋　胡ふて

此お正月三日に兄樣にお姉樣が 被在てからお居間を定て戴きました、 奥の八疊と六疊は客間 次の大きな庭の有八疊は兄樣と 姉樣のお居間、 前の小さい庭の有四疊二間は小兄樣と 私と末の弟と一緒の居間て、 後は 茶の間と中間てお二階は商品と應接室、 臺所は婢と 玉猫お店は小僧、 離れには母樣お一人父樣はないのてす。

○春の雪　上總　ひさ子

妾は春の雪が大好き。 物優しう若草に 積つた風情も嬉しいけれど、 花と亂れては お池の水の淺緑にさも 儚しそうに消えてゆくのが什麽に可愛しいてせう―― 私は月の御殿へ行て來たといふ樣にすまして氷の上に積つてる 冬の雪よりも、妾はこの春の雪が大好き!

○物の價　本郷　朝井千とせ

部をさる事五十餘里なる山里の伯母様をお訪れ致しましてから已に半月、雨の日の徒然にまかせて都話の折柄、東京にては豆一升幾何ぞ、米一俵は蔘は大根はと訪れられた時にはハッと詰つてお答が出來ませんでした、吁こうと知つたらよく聞いて來たものを。

○敎育　愛知　内山ふみ子

私の村は濃尾の平野の中にあつて、しかも中京と云はれる名古屋の近てすから、海陸共に便利は非常に宜しいのてすけれども、口惜い事には肝心の敎育が其程に進んてゐません故、私はいつもたとひ山中ても信州の様な國に生れた方のはうが幸福だらうと思ふて居ます。

○有邪無邪　羽前　近野野菊

旦那様は今日も御不在てすか、ハイ御宅へ伺はうツて只今出かけたばかりてすが……ヘエ……此時押入の戸をたゝいて居た四五歳の兒が坊も這入る……お父様開けて……と泣聲て叫ぶので餘りの氣の毒さに無言て戻つたとは、家の男が某官吏へ催促行の失談てあります。

○怖いもの　遠江　林衞子

お母さまのお膝て乳のんてゐた頃はお乞食が門へ立つと妾をもらひに來たのてはないかと一番怖かつた。それからだん／＼年とるにつれて狐と地震て學校へ行つた頃は騒はやした先生てあつた。今てはもう怖いものは盛んな田舎男てある。

○春　津市　佐々木光子

實に暖かい日てある、桃の花が靜かに二三輪散つた。奥の座敷て不意に赤ンボが泣いたので、御庭の椽先こ眠つて居た猫は驚いて、屋根へと飛び上がつた、屋根の鵯は、申し合せた様に南の方へ飛んて行つた、空には悠々と鳶が輪を畵がいて居る。

○逆むけ　若狭　長谷川英尾

私の地方ては逆むけが出來ると親不孝だといひますの逆むけつて御存じ？指さきの爪の際の皮がむけますの一寸したものてすけど大變痛いものてすわ私れずゐ分孝行してるつもりだけど未だたりないのかむけますの私之から向一生懸命てつくしてこの逆むけを治しませう。

○保津川　京都　武田とし子

私が姉様と嵐山へ櫻見に行つた時、持つてゐましたハンカチーフを保津川の清い水て洗ひましたら、雪のやうに白うなりましたので私はこう思ひました。山一面に咲いてゐる櫻の花の精を溶かした水が集まつてこの川となつてゐるのてはなからうかと。

○反古籠行　紀伊　室井白舞子

『文壇』を見る毎に私は斯う思てす、何ても之から奮發して……。處が毎月々々〆切期日が目睫に迫る迄一は餘暇もないからてすが心が亂雑して何も書けないのてす、餘す處三四日となると我乍ら思ひ出した様に慌てふためき苦心慘憺てやつと拵へたのは……悃み玉へいつも反古籠に葬られるので御座います。

○書齋の春色　八王子　芳村秋水女

家の周圍は、紅い緋桃が咲いて居て、南の窓から見ると、青々と延びた麥や清い小川の流れが見へます。處々黄色く見えるのが菜畑て、そうして黄白などの蝶が遊び戯れて居ります、私は此の室を書齋として、いろ／＼ならべ飾つて置きます。

○養蠶　熊本縣　杉守美乃

私の村は養蠶が盛てありますが春の四月の頃となれば蠶はそろ／＼と生れ出て私は桑の若葉をつみに行く内に居る姉さんは他の人に後れてはならぬと一生けんめいに私がつんて來た桑を食せて蠶の手傳ひをして居られます夜はおそくまて朝は早くより。

○魚賣　敦賀　壽子

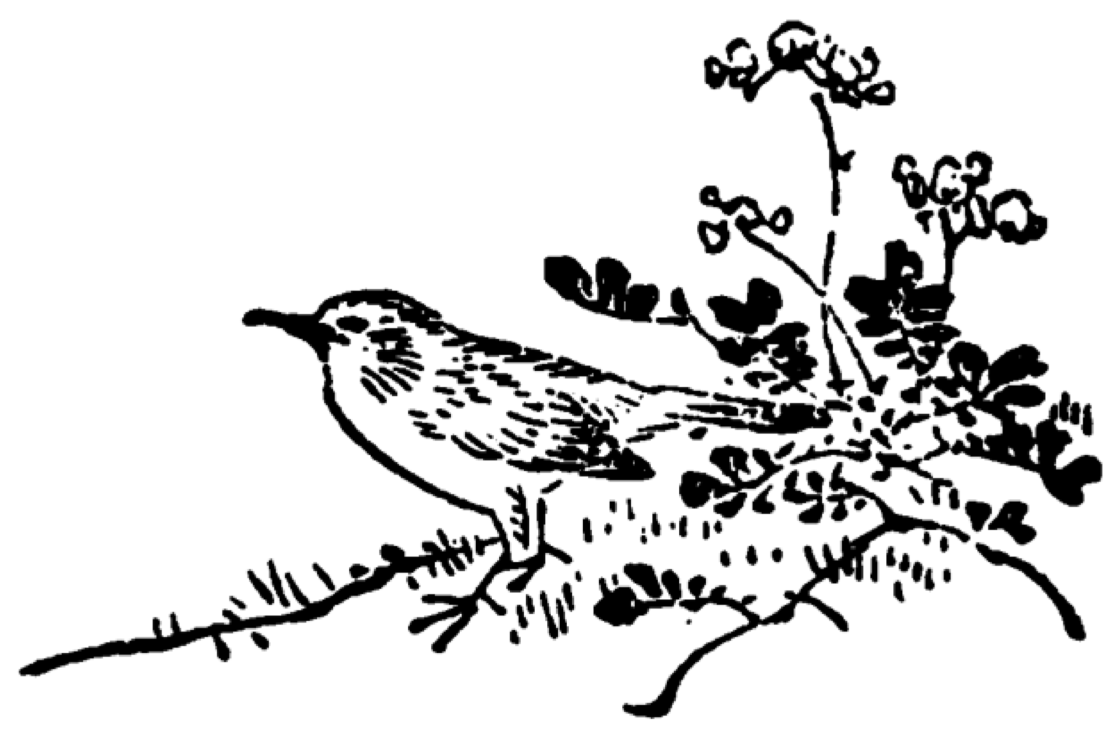
もう起きる時分かしらと思つてゐると、ゴロゴロと車の音がします、是は毎朝漁師が船から問屋へ魚を運ぶのてす、やがておひる前になると「鯛や鰈はいりませんかーイ」と云ふ聲がして、盥を二つ位重れたのを頭へ頂いた女が來ます。

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

新歌謡

編輯局選

▲規定　無邪氣にして野卑ならず、現在の言葉を以て優美の思想を手近にうたふべきこと、是も一人一首限り、投書に新歌謡と明記せよ、用紙及び締切日等は前同斷、懸賞は乙種送呈



四等

◎春の女神が何織るのやらしだれ柳がゆら〳〵と　伊豆下田町廣岡一、一二七　鈴木やす子

原作「柳をくりかえす」

五等

◎櫻だんごを土産に持てよつてやりましよ乳母の里　岐阜縣武儀郡上有知町公園前、村井信二郎方　日野歌子

原作「土産に買て」

秀逸

◎一枝ください其山櫻花かんざしにしたいから　東京　原島稔子

◎妹桃色姉櫻色さした二人の花リボン　佐賀市　野田えん

◎郷の名物大麥小麥中に咲きます桃の花　西多摩　森田きよ子

◎鳥になりたい燕の鳥に飛んで行きましよ故郷に　岩代　根本朧月

◎住めば都と人にはいへど思ひだします故郷を　後志　三宅みめ子

◎櫻咲いたか吉野の山に日本歴史の花の跡　神戸　三日月堂なみ子

◎夕べみ空を薄むらさきに染めたあたりはふる里か　茨城縣　中山道江

◎わたし淋しい田舍の姫田畑のほかへは行きやせぬ　上總　藤田さだ子

◎夜の八時に孤燈の下で學生二人で化粧する　肥後　戸次津和子

◎わしの妹はお嫁に行つた姉はいつ迄こうしてる　岩手縣　佐藤篠子

◎雪の肌にかすみの衣を着たり脱いだりお富士山　下野　梅澤哲子

◎私が父樣昔は武士今は山羊飼ひ乳しぼり　福岡　しら露子

◎桃の節句は舊暦なればをさな妹は待ち兼ねる　靜岡　良水女

◎伊豫の道後は温泉の名所胸の傷さへ癒します　伊豫　曉子

◎淺間山には煙が絶へぬあれは火山で活きてゐる　茨城　須崎せい子

◎妾の村では植木が盛ん花は年中絶えまない　埼玉　曉女

◎遠くはなれてゐる兄さんに送つてやりたい梅の花　長野縣　津金壽枝子

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

滑稽談

編輯局選



十六字詰七行以内締切日は毎月十五日、懸賞は乙種。

四等

○地下の停車場　滋賀　撫子

今から二三年前の事ですが妾が東京の親類へ行つた時です、一日お母さんとよそへ行つて歸りに汽車に乘らうと思つて四ッ谷見付を歩いて居ましたが停車場が分りません、で、傍の職人風の男の方に「一寸お尋ね致しますが四ッ谷停車場は何所でございます」と聞きますと、ケゲンな顔「エ何てげす」と反問します、「あの四ッ谷停車場て」『ん、四ッ谷のステーションなら足下てさあね」ふと見るとすぐ目の下に有るのです、家へ歸つて話しますと田舎者てそんなものさと大笑ひされて仕舞ひました。

五等

○道　理　石川縣金澤市下主馬町四六一　黒田　藤枝

姉様が初産を嫁入先で成されたので行きましたら入字髯の方が「コレはお妹さんですか私は正次郎(姉婿)の兄で正一と申者で御座います」「私は姉様の妹で御座います。」

○ハイカラ　京都　濱部風窓女

當世不嫌のお爺さん新參の書生に風呂場て肩を洗はしたら知らずに石鹸を使用つた、お爺さん怒つて、

「お前遂々俺をハイカラにして仕舞やがつた」

○ベスト　讃岐　夕ぐれ

甲「貴女猫を英語て何と云ふか知つてますか」

乙「ハイ知つてなりますキャットてす」

甲「それてはねずみは」

乙「ベストてす」

○拇　印　和歌山　じふ子

受付係「あなた實印ても認印てもよろしいから一寸お出しなさい」田舎者「乃公ア今日は列なんて持ちましれえ」受付係「それては拇印ても可いからこゝへお捺しなさい」田舎者「拇印てえのも持ちましれえだ」

○土　人　臺北　小宮山幸子

大きな袋を背負つた銅色をした顔に圓い目をキヨロキヨロさせたる土人停車場の基隆行として ある切符賣口所にてしきりに群集を押しわけつつ「そこのく宜しい」巡査「これ何するか」土人「日本大人早く買ふないと札賣れ切れるある」

○目　的　備前　沼元りん子

教師「皆さん大きくなつて何になりますか」生徒の一「私は裁縫先生になります」生徒の二「私は看護婦になります」生徒の三「私は電話交換手になります」と皆々自分の目的を云つた中に無邪氣の生徒「先生私はお母さんになります」

○云ひ間違ひ　靜岡縣　青木　靜山

昨日、母にたのまれましてアンチペフリン散を買ひに沼津へ出かけました途中こんな事を考へて居りましたエンフリエンザンになつたらアンチペフリン散を、のむと、よしよし其内に藥やの前へ來ました「下さい、エンフリエンザンを。

○貧　乏　福岡縣　伊藤カツヨ

娘「お父さん宅程貧乏の家は餘程仕合せれ――」

父「何故？」

娘「だつて盜賊なんかはいらろゝ心配はなく安心してよく眠らるゝから！」

父「それも誰のおかげか？」

○世間見　大阪市　山田たつ子

母が日の見に昇つてゐる娘に向ひ、

母「お前そんな所て、何をきよろ〳〵見てゐるの、早く降りて仕事を、おし、」

娘「あらお母さんがいつも、私に『お前は世間見ずだから仕樣がない、』と仰しやるから、私は今日よいお天氣てすから、世間をみてゐるの、そして少しても、お母さんを、よろこばせようと思つて」

文壇餘興

お勝手（課題）

二等　多勢

愛知縣　紫雲女

四間に四間の總板張の勝手其隅に流とこんろ二つ火鉢とがある此處で奥のお料理をする、一段下つて土間庭に金の手に煉瓦で築いた西洋まどがあつてご飯やお菜を焚く、下女が二月半月交代で上番下番と分て働く下番は器物洗ご飯焚と惣菜作り總て庭の仕事上番は雑巾掛と三度々々飯臺出して食事の支度柏子木の合圖をするとドヤ〳〵五六十人もご飯に來る其濟だ後は丁度潮の引たか大凪のないだ樣、奥のお料理は私が受持ち、すたり物の出來ぬ樣に、火を大切に入らぬ時は消せと母上の毎日の口ぐせ、おやお粥がふきます。

三等　輕便立食

京橋區五郎兵衞町二〇高橋方　三好まさる

三間に二間三方は硝子で後は大戸棚ドアの隅には森田式の竈、其向ふにテンピに七輪二つ、其側に流し上の棚には鍋其他が列べられて有る、室の中央に有る六尺に巾も高さも三尺大のテーブルはまな板で其前に白前掛にて働いてる友は當番の人々で、ノート手にして友と師の君が和洋の料理し給ふを見つゝ筆記に急がしきは非番の友達「オヤ御飯がこげ臭い」と急に炭を引くやら「綾さんぼんやりして居て肉が燒過てよ」と騒いてる中にテーブルに椅子は淸められて我々は席についた、隣りの室では樂器の自習が始つたのだらう、ピアノやオルガンの音が面白く聞えて來る、私は夢中で食べ終ると「御汁はチトしほがきつすぎました」と私には後の祭りでした。

四等　帳面と鉛筆

望月

私の家では御勝手を母と私と二人でいつもいたして居りますそれで御勝手には一ツの帳面をこしらえてそれに鉛筆をつるしておきますそして御勝手の方にかんしての買ひ物は買ふ毎に一々私がつけるのですそういたしますと月々の計算の折如何ほど都合よくまた大變便利だか知れません。

五等　山家の勝手

秩父　近藤登久子

大きさ一間半に二間のよくふきぬいた板敷の中央には山家特有の大爐があり北には諸道具を入れる大戸棚があつて、西は三尺の土間を開けて出入口の障子が立てゝあります。流しは南向き高さ二尺五寸て左には水甕があつてそこには洗ひ物などのせる棚があります。甕の左には水口があつてそこからはたへず、水道ならぬ山清水が樋竹によつて流れ込みます。

秀逸

○好き女中
越後　志賀美代子

私宅の臺所を、七年の永い間、よく整理して呉れた女中があります、仕事の順序が正しいので、人が一日の事も半日てする者てすから暇になると裁縫します。此様によく務めたので今ては、宅の前に小さい家を立て氣樂に暮して居ます。夫なる人は百姓て働き、妻は内て賃仕事、不足と云ふ事もない村ての平和な家庭の手本てあります。こんな者は珍らしいてはありませんか：……●

○こゝろえ
丹後　鹽見千代子

お勝手は清潔にしなければならぬ、拭布と雜巾は別の所に掛け、器物は凡べて置場所を定めるやう、水道と水壺は度々お掃除する事、大火焚くのは不經濟、お漬物も菜はお醤油がいるから、成る可く大根を食べるがいゝ、ご飯は冬は柔かく、夏は少しこはいめに焚き、就枕前には面倒ても、火が落ちてゐたり、お魚などが忘れて、しまはずにあつたりする様な事が、ありはしないか、一應必ず見廻つておくべきてあります。

○二つの新式
伊豫　曉子

宅の臺所はまあ普通て二つの新式な事は壁に献立表がはつてある事ともゝやのお尻の大きい事てす。西洋かまどて賣物をした後てその温みて水を沸かせてそれてひどなどを妨いて居ます。隣りの三毛がお臺所をあらしに來ますと桃やはいきなり萬掛けのれん木をとつて「此ん畜生」と叫び乍ら追つかけます。すると三毛がニヤンとなきます。お寺の鳩は人の居らぬ間を見はかつて流に下りて來て御飯粒のお仕末をします。それを臺所の障子から覗くのが私てす。

○破れる
和歌山　清子

私が夏休みに歸りました時、或る日お湯をわかしましたの。私は至つて火を焚きつけるのが下手てすので、一生懸命になつてやつとたきつけどんどんとたいて居ました。フト氣がつくと、さあ大變。水も入れないて焚いて居たのてした。母様から、こんな事をしたらお釜がわれると、聞いてありましたから、びつくりして、夢中て水を入れました。すると、ヒユーシユとそれはそれは面白い音をたてましたので、われたのかとびつくりしましたが、幸こもわれてありませんてした。

○目を付けます
茨城縣　中山道江

皆様は如何てすか私はよそのお家に參り升と先づお勝手元に目を付けますそして此家の主人はどんな方かといふ事がわかるのてすそれてすから私は常に勝手元は清潔にして物を行儀よく一定の場所に供へいつ如何なる方が參りましても恥かしからぬ様にして置きます流しを常に清潔にする人はやがてよい子を生むといつも母様から申されますので一層きれいに致して置ます。

○わが家のかまど
近江　ふさ子

私の内の竈はこれまでは舊式てしたから煙てくすぼつて不便てしたがお父さんが三四年前井戸も竈も皆煉瓦て造りかへさせられましたので奇麗になりましたお母様も薪が少ししかいらないつて悅んで居られますがお祖母さんと猫とは寒くてあたれないから困つて居られます。

○爐
岐阜縣　拓植ちか子

妾が家は山家てございますから爐と云ふ東京の御方の御存知ないものがありまして其の中央の上に小鍋と云ふ鉤が下げてありまして、これに

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

鍋をかけるのです、お客があるとすぐ此の爐邊お客間て何の御馳走と云ふ事がすぐ分ります、此處てお餅とか、お赤飯とか云ふ御馳走を作るのです。

○女學生の勝手

膽振　港秋子

チリン〳〵午前五時の目覺時計の音妾はムックと首を揚げて時計の鈴を止め、勝手に行きぬ、昨夜、春雄様に馳走した、おしるこの殘りに、ねずみのクソが三ッ四ッ二ッ稲々有つた、自分は其れを洗ひ、そこて顏を洗つて、頭髮を梳き付ける湯が沸く火鉢に火を移し、土瓶を架け、鍋には、お米を七輪に架け妾は直ぐ四疊半の寢室を掃除する煮立つ音!!!驚き臺所の方を見れば御飯がこげた、急ぎ下し、おまじないの火を一つ鍋に入れて朝飯を終へたのは六時半てした……。

○客來の時

土佐　高橋白ばら

れんが、せめんとにて固めた床、同じ水瓶、はしり、ポンプ仕掛の井戸、烟突付の竈、僅に雨露をしのぐ板箱、これは田舍式の宅の臺所です。物洗ふひゞきや水くむ音は常の事。天井より下げた割烹の筆記を見ながらたすきがけいそがしく立働いて居るのは客來の時の私てす。

○騷動

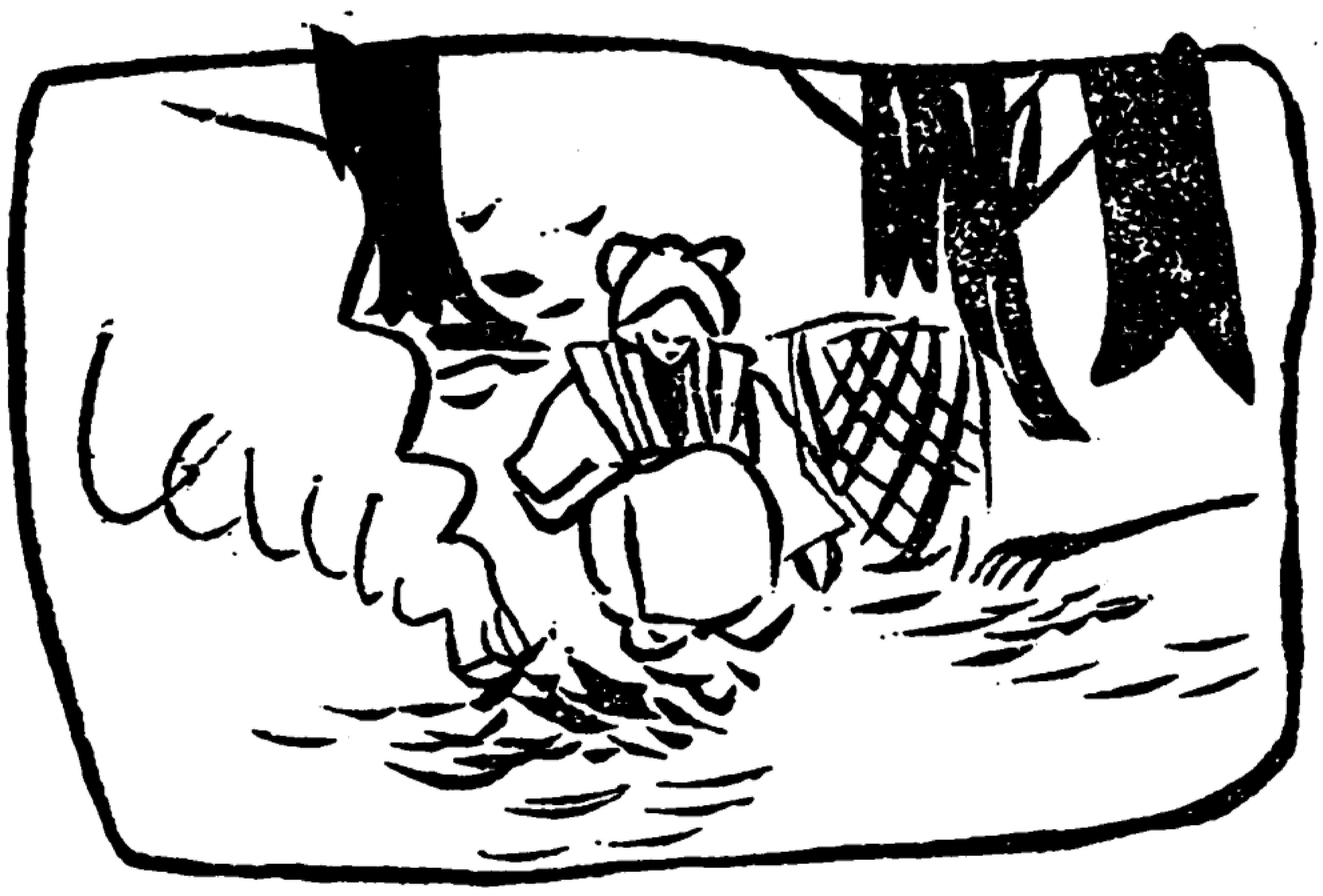
伊勢　山路くに子

御飯中に、お客様だ裏へお通りなさる、と云へばお臺處はいつも大騷動、お兄様お御自分のお膳をいきなりおしまひなさる、私と芳子とが奥へコソ〳〵にげる、秀ちやんがたつた一人『そら皆にげた――』とどなります。

○もやひ竈

長門　紫雲女

落葉　下谷　岡野さかへ



妾は三軒續きの小さい家に居ます、お勝手はみんな同じ所にあります、竈が三ッありまして井戶はおもやひなのであります、毎日お隣りのおばさんや竹子さんとお話をしてよく笑ひますが時々お父さんにしかられます。

○くづそうめん

失名

學校て、お習ひしたのを、日曜に、父と、弟との手傳て實習しました、それはかんてん、一、水二五と、云ふ割て、實、それて葛粉をとき、鍋に湯を沸し、二分位の穴のある椀に入れ、鍋の上て廻し、後水にひやして使ふのです、私は片栗粉てしたのが惡いか、湯に溶けて、細長く續きませんて、失敗しました、葛粉をまるめて煮ましたが、かんてんが、入れて、有りましたのて、にえませんて、また失敗致しました。

○杓子方

越後　ひろ子

十六疊間の昔風な、臺所にて、一家十三人の、食事を、二人の女中を對手に、妾が杓子方てある、朝と晝とはさッとして置くが、夕餉のせはしいッたら、ヅンクリ舞しそうだ、御飯使ひすると、一同打集ひ和氣あふれんばかり、……其和樂を生む、臺所の杓子方も、なか〳〵面倒なもの、女中の外に、手傳ッて與れる、杓子どんと、箸どんが、お孃様はほんに、骨が折れますれえーと、さゝやいた。

○おなます

神奈川　長島まつ

今年は下女が居りませんからすべてお勝手の仕事は私が致し升けれども馴れぬ事ですからいつも〳〵失敗におはり升が今日のおなますだけは上出來て母にほめられました。

○小言

三河　富美子

おさんが御飯を炊くと歎いと言つて兄さんの小

言を受ける。私が焚くと硬いと云つて御父さんの小言を受ける、お母さんがお炊きなさると誰も小言を云ふ人はありません。

○母の敎訓　仙臺　白菊子

私はお勝手が奇麗にかたづいた時程氣持の好い事はありません、母樣がいつも申されました、お勝手を見ると其家の主婦たる人や家庭の有樣が甚麼風だかすぐわかると、おくさんの强固した家のお勝手はいつも奇麗にかたづいて居ります、このような奥樣に限つて料理も缺かさず、經濟の事などもきちんとやつて居られます、一體お勝手は食事の用意をするところですから、どこよりも奇麗にして置かなければなるまいと思ひます。

○黑焦　芝　ひさし

先日の土曜日に母樣が女子が十六七に成てお飯が炊ぬなどとは殊に耻しい事だから幸あすは日曜でもあるから一度やつて見てはどうかと云れましたので其晩兄樣に冷され乍らお米をかしぎまして翌る朝早速焚付ました何時經ても煮立ちません故變だと思ふてますと奥から臭いよ〳〵と母樣が仰言るに驚てお釜の蓋を取りますとお米が皆な眞黑に焦てパリ〳〵云ふて居ります、昨夜餘りあわてたので水を入れるのをすつかり忘れて大しくじり致しました。

○下女の手傳ひ　埼玉縣　船津千代子

昨日は母樣が婦人會へ御出てになつたので私が下女の手傳を致しましたの今日の獻立表は卵子とぢです私一生懸命にこげつけまいと思つてやつと出來上がつたので一番好い所を父樣に一番こげた所は私のにしました父樣は大變賞めて下さいました、後でお流しをきれいに掃除して置きました常も母樣が其の家の主婦の性質は流しを見れば解ると仰しやいます。

○燃えつかぬ　神田　杉山常子

どうしてこんなにもえないでせう田舍に居た頃は妹が拾つた木の葉から祖父樣がこつた薪に火をうつしそして父樣が割つたまきをもしたのに……おゝ下の家の奥樣はもう味噌をすつて……フー〳〵ザリ〳〵あら前がみの毛が……

○おさん　丹後　美年子

お三は朝うすぐらく疲ぶたきに起きて欠伸交りに生木で焚きつけくすぶらしてゐるそれが終ると勝手元で裾をはしをり四斗樽の樣な大きなる尻をふつてちびれた下駄にかづらばなをすげて足にひつかけドシ〳〵と働く姿はコレ天下に恥しからん女だと思ひます私等は是れを見習はればなりませぬ、とは母の話です。

○新式竈　羽前　菖蒲

妾の家のお勝手は田舍家の先づ廣い方で半分は疊、半分は莚敷、西北の隅の高窓下に大きな素燒竈が白い松木灰を殘して一疊間を占め、其の側にお父さんが高價い夏米一俵と取り替て來た新式鐵竈が据てある、お父さんがよく云ふ鑪端て喫煙し乍ら、この素燒竈が品がない、七年前下女が水をこぼして割つたのが大きくて品があつたと、妾が少し覺がある。

○切干　芝　すて子

永い事預つて居りましたおへつつひもれんがの二つべつつひが出きまして嬉しふ御座ひます。兩方にかけられた大小のお釜はいつもピカ〳〵してさわらのふたは眞つ白です、せまい我家の臺處もこれでよほど引立ちまして丸で王樣然として居ます其れから水口の障子があまり破れますので有合せの種油で市松もようにぬりまして翌朝見ましたらねずみがなめかぢつたと見へてめちや〳〵になつて居りましたのには腹が立ちました、も一つお笑ひ話しいたします今日切ぼしをおなべに入れて水ばきしながら一寸仕事をして居りましたらしばらくして見ますと切ぼしがふえておなべの上二三寸も盛り上りふたがすこんと思はずふき出しました。

○四季　上總　智惠子

夏は最も忙しい、火燃しから、御米を磨ぐから、萬事萬端一人でせねばならぬが、暖かでよい。冬は邪魔になる程火燃しがあるので、手助りになる、然し時としては、御飯を眞黑にこがし、或は御汁を煮つめて、馬鹿に鹹い時などもある。春は比較的閑暇でゆつくりする、時候のよい爲めか御飯などもよく出來る。秋は身體がひきしまる計りでなく、多忙時で十分働くから、尤もうまく最も澤山喰べられる、そして朝は早く夕は遲いのである。

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

音樂談（課題）

○好き嫌い

茨城縣　永井誠子

私の一番好きな音樂は風琴にピアノで一番嫌いなのは佛葬式で坊さんのやる音樂でヂャリンポーンときたら何よりいやよ、あれを聞くと自分も共に死んで行く樣な氣持がします、又唱歌では散歩唱歌が何より好きだが此頃は不如歸や思い出等が好きになりました又嫌いなのは先生の前では申されませんが紀元節や天長節等の歌は實際面白くありませんネ。

○唱歌

熊本縣　池邊しづ子

私はいろ〳〵の音樂の中でも唱歌が一番好きでございます、どんなに氣の欝してゐるときでも戸外に出て自分の好きな歌を心ゆくまで謡していますと自然と心が快活になつていくのですもの、此間も縫物をするかたて愛吟須磨の曲を小聲で歌つてゐますと母樣が靜は一寸でも口を動さないと歌つては居られないのれと笑はれました。

○棧橋

佐渡　波の子

中の小島を離れた許りの月に、私は眞白な砂にはつきりと、影を殘しながら渚をさまようた、櫻貝に波は靜かにさゝやいて、黃金色の泡をふむ千鳥の聲も、大層よい心持。耳を澄ますと棧橋の方から緩い笛の音が僅かに鼓膜に波動を與へる。全く塵を離れた天地に立つて居る私はしらずしらず須磨の曲を口吟んで、暫しぼんやりの有樣であつた。

○露營の夢

京橋　三好まさる

二年前の確か土曜日の始めの時間でした、日露戰役に於て名を轟かせし士官三名參觀に來ました故何かと望まれ私の組は唱歌と決めました、黒の制服の私達四十餘名敬壇に立つて露營の夢の一曲を唱ひました、高く低く師の君がピアノ音も男ましく或は物凄く曲が進みまして、「野末の霜に起伏の我子が夜寒の身に泌て……」と悲しき調子になりました時、私は露靈まさる戰場に征衣の袖しぼりし武士はと見ましたらサーベルにもたれしまゝうつむいて、キツト過去の夢路を辿つて入らしたのでしよう。



應接室　小國敏子

○吉備樂

岡山縣　黒住くに子

妾の最も好きな音樂は吉備樂と云ふ音樂です數多ある曲のうちで妾の好きな曲は左のようなのです。

悲哀な曲、櫻井之曲、（楠公父子之袂別）小楠公上之曲（母之教訓）それから優美な曲は天津少女、挿頭之菊です男壯な曲では箙之梅（梶原景季之勇武）此の五つの曲は宜しいでしよう、それで歌が主調で調和樂器は琴及び笙、笛、篳篥等ですよ舞もあります。

○音樂の先生

伊勢　福島初子

お隣りの音樂の先生がいつも六時頃になりますとヴアイオリンを御引きになります其曲が私の好きな孝女白菊なので一そうの感にうたれます「眺め淋しき」と云ふあたりは私の今音樂を聞いて居る時の景色と同じです私もう此音を聞く度に音樂家になりたい念がむら〳〵と胸にわいてきます。

○庭前の合奏

小濱町　山田鐵華

妾は一番尺八が好きで先年も半季程稽古しましたがどうも妾は息が弱いので纔かんの殘念作ら止めまして餘儀なう琴を學びました。兄さんは尺八をお吹きなさるし妹は手風琴をやりますので何時も日曜には父母の前で合奏して樂んで居るの、殊に春の麗かな日に庭前で兄さんは椅子に妹は石に腰をかけて鳥は枝に時々囀の遊音を聞きつゝ合奏して家内の快樂にして居ります。

夏すがた

文理餘興

學校生活



三等 ○一反步

兵庫縣川邊郡長尾村字中筋　山口しづ子

私の學校には及そ一反步ほどの學園がありますこれを果樹部と草花部とに分けてあつて高等科四年になると手入をすることが出來るのてすさあそうなると一生懸命です去年の四月に男も女も一うねづつ受け持ました私の受持の所は金魚草と櫻草お隣の文ちやんの所は天じく牡丹花さんとこはきゝようにすゐせんてした。

さあそれから三人の競爭に成りました春の暖かい日も夏のえん〳〵たる太陽の下て水をやつたり草を引いたりしましたそのかひあつて夏の末に可愛い花がそれ〴〵咲きました。

四等 ○學校の土筆

福井市川上町　藤元津代子

學校の裏の堤に三月頃になりますと土筆が一面に頭を出すのてす、私の先生は大層これをお好きなさるのださうてす、この頃いつも休み時間の鈴が鳴るとすぐ堤に驅けてゆき競ふてとツて歸りに先生にあげますと先生が「マー澤山によくこんなにとれましてネ」と、仰しやるのが此の上もなく樂しいのです。

五等 ○質素

伊豫　芳枝

私共の學校では規則が定めてありまして絹物と紋付の着物は祝日でも着られませず、簪は物論リボンも決してかざされません。ですから式日等にならんてゐらしやる皆樣の頭を見ますと、束髪のまはりの櫛と大きいつと止めとが黑く光つて居て誠に飾の無いものてす。袖丈にも標準がありまして洋傘は毛繻子で絹張りは不可、下駄も表つき等思ひもよらない事てす。そしてこれらの規則を四百五十餘名の生徒が、かたく守つて決しておかす樣な事はありませんてすよ。

▲注意、以後『學校生活』の送賞は凡て乙種規定に據る

○我校の特色

名古屋市　百合枝子

私は市立名古屋高等女學校に通學して居ります當市の他の女學校て縣立は袴に一線淑德は二線といふ樣にそれ〴〵袴の線て學校の名がよく分りますが我校の特色は木綿の筒袖に海老茶の袴で先生方でも筒袖に紫の袴て御座いまして當市中で一番質素な學校てすそして風俗が華美に流れた今日でも此規則は依然としてつゞいて居りまして勿論頭の飾りなどは少しも致しませんそして名古屋の中で早く出來た學校てすから隨分立派な古い歴史を有して居ります。

○積塵筒

大阪市　松田しづ江

私は一日福井縣敦賀郡の感新小學校へ其校の教師をしてゐなさるお友達に面會に行きました、丁度授業中なので運動場をぶら〳〵して、生徒の成績品を見てゐますと、中央の柱に三尺餘りの竹の筒を一本かけて其れに「積塵筒」とかいてあります、倘其上の方には此中へ生徒は毎月一厘宛投入する事、又來賓にして投入なさるも差支なし、そうして此金は公益事業に寄附すると書いてありました、私は十錢の銀貨一枚を入れて置きました。

○花ぞの

徃鄕庚　青木まさ子

信濃の山村にもよくまあと思ふ程の西洋作り生徒の操行學力は視學官も驚いてゐるのです試作畑の横が農園から取りよせた草花四季の花が美麗に咲きみだれてをります生徒は日曜などに山の草木秋の野の萩と色々植るので錦の花園です姿等は學科に頭を痛めた時此花ぞのにたゞずんで本誌の（まれ〳〵尾花にさそはれて：：）など唱ふのてす。

○通ひ道

丹後　菊枝

妾の通學して居る學校は、後は山で前は稍々廣い平野てあります、其の野の中央を淸き流れの大堰川が靜かに流れて由良の戸では海水と河水の爭ひが激しう御ざります。此頃は此の川には多くの里人が網を張りて上り來るいさだを狩るのてあります それは〳〵眞に面白いてすよ。一部の生徒は此の河を渡し舟にて渡るのです、舟が岸に着や否やに我れ一と飛込のは男の子て私達は靜かに乘りますよ、都會とは異ふて誠に靜て其の上に景色が良いので勉強に最適です。

○學校の敷地

西多摩　森田きよ子

村て一番賑やかな停車場宿を少し離れて西南に、北の村外れ上壹敷よりは六丁、東の外れ牛濱よりは五丁、一ノ生よりは四丁、他は皆これ以內です。さしも廣く顯取れた敷地は武藏野の片岬

けなゐが故郷も風通はよく、四方を取りまいた野道の菫蒲公英は春風に吹かれて居ます。

◎櫻の木　埼玉縣　原田仙子

昨年私の方の級の生徒が卒業の際に、紀念として學校へ寄附した十數本の櫻は、ちやうど私達の丈と同じ位ゐでしたが、先日一寸行て見ましたら大そう大きく成りました、木は丈がのびるのですが、人間はそれだけ、頭が發達するのだと思ひました。

◎卒業生　相模　光月女

私の學校では本年の卒業が男女共て五十人程ありました其內て男生が三人中學校へ五人師範學校へ三人農業學校へそれ〴〵御入學なされました。女生の方は三人高等女學校へ九人東京の裁縫學校へ御入校になりました。親友の千代田さんと私は家政を研究かた〴〵行儀見習として東京のおやしきへ御奉公に上りました。

◎寫眞と櫻　宮城縣　野菊

我が村の學校は至つて此の頃たてたので御座いますから高等科第一回の卒業生は私し等で御座いましたので先生方生徒一同して寫したしやしんが殘つて居ました又紀念に私し等女生徒が櫻の木を運動場にうゑましたのが今は大きくなりましたから花盛りの時は實にきれいで御座います。

◎學校園　香川縣　松井一枝

私の學校では一年から四年迄夫々分けて草花を作つてゐます中でも一番目立て見えるのは一年女子の三色スミレ此四五日はお天氣がいゝので花が澤山開きました。

◎新築　讃岐　赤ばら

妾が舊の學校は御寺を造作しかへた家でした。今度町離れに大きなのを建てまして、先日上棟式を致しました、餘興の運動會に、弟は一等賞をとつて大喜びです。

◎好い先生　名古屋　志津子

妾しの學校は、家から拾町程前ですわ、先生がたは皆、好い御方ばかりです、今年の三月に卒業しました、四月一日に弟が入學しました時について行きましたら、相變らず好い先生ばかりです、餘り能い先生ばかりですから、今一度入學したい樣な心地がしましたわ、色々弟の事を賴んで歸りましたが、家へ歸つても何んだ、物忘れした心持がしますわ此樣な具合ですから、此村からは澤山宜ろしい人ばかり出ますのよ。

◎紀念樹　信濃　長谷川この

私の學校では卒業生は紀念として何かの木を植て行く事に定まつてをりますので每年いろ〳〵の木がふへて來まして今では梅が散ると櫻が咲きそして木犀が香るといふ樣になりましたですから學校でも此間ベンチを作りましたので私共寄宿生は夕食後いつも二人三人位宛こゝに集り歌に話に交情を暖めそして卒業の未來を想像してをります。

◎わが學校　日向　渡邊みどり

南には運動場を隔てゝ廣やかな實習地、西は見すぼらしい廣瀨の田舍街に接し、北は直ぐ人家で、男女教師が都合十四名、三百餘の未來の干城と良妻賢母とを抱いて居るのが即ち妾の通ふ學校なのであります。東は渺茫たる日向灘で南へ走る汽船なども運動場からは眺めらるゝのであります。

◎彰德月誌　山城　幸子

彰德日誌とは、我校の名からつけられたもので、每月、校內に張り出されるのです。教訓、模範生徒、生徒の成績、よく出きた繪畫などが、其誌上にのるのですから、生徒は、張りだされる日を、まちこがれてゐるのです。先生のお書なすつた、色々の畫などで、ほんとに美くしいです。

◎紀念木　筑前　わか葉

私の學校は先年燒けたましてで數へは少しもとに變らぬのですが假校舍の悲しさは樹木や草花は少しもありませぬ。只第九回卒業生の紀念木として植えられた月桂樹の小さいのが二本ある許りです。

◎村の高等小學校　下野　青木高子

妾達の參ります頃はまだ燒けたばかりでしたから農家の大きいのをかりてゐましたが此度閑靜な山の中に立派に新築されました山の中と云つても北は一面の田畑で西南は山茸も出れば栗もありつゝじも咲きます東は並木をへだてゝ廣い一すじの川が流れ其向ふの處々にある家からかすかに煙が上るなど恰ど美しい繪を見る樣です私等は不幸にも新築の風に逢ふ事が出來ませんでしたけれど每年春秋二回の同窓會には公然校內に音づれて懷かしい舊友と共に天然の美景におくがれる事ができるのです。

◎二派　青森縣　松尾とし子

妾の學校に、先生は十五人あります。內、男の先生は十人て、女の先生は五人てあります。そして、此の、先生等は校長派と、次席訓導派と、別れてゐて、校長派は僅かに、三人、次席派は、七人てあります。女の先生は、どちらにも付きません。そして此の二派は、何か不平があると、大戰爭をするのです。そして、校長派は何時も負けるのです。

◎奉安室　播磨　彌生子

私の通つて居ます學校は、町はづれの小高い岡にありまして、前に瀨戸內海を控へて小豆島がよく見えます、周圍には松が一列に植ゑてありまして堤になつて居ります。校內の東北隅に奉安室がありまして其所には松杉が植ゑられてあります。周圍は竹垣でかこまれて居ります。每朝授業前三十分に集つて、東をむいて奉安室を拜し深呼吸を三度しまして後、校長先生にいろいろ有益なお話を聞くのが例であります。

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

女醫顧問

東京女醫學校長　鷲山彌生

○結婚、姙娠、子宮露出（1）結婚して未だ一ケ年たらずですが姙娠する前兆は何んなてしやう（2）姙娠の時より安產せんとせば如何にして宜しきや、及び育兒法もお教へ下さい（3）親友に子宮露出して困つて居る人がありますが如何にしたらば宜しいでしやうか、只今は醫者にかゝつて居りません（下總、利根邊女）

『答』（1）（2）の質問は此一小欄にては、到底滿足なる回答を揭ぐるを得ず、產科學及び育兒法の書物にてお調べに相成りたし。

（3）の質問に對してはお答へ致しませう、子宮脫出は其程度及び原因により、療法を異にするものでありまして、輕度のものは一定の器械を嵌入し居れば、治する事も出來ますけれども、高度のものは外科的手術を行はんければなりません、何れにしても永く放置する時は非常なる害を來すものなれば、速かに治療を受けらるゝ樣、お勸めなさるが友情であります。

○鼻が塞る　私こと年中頭痛がし耳鳴り神經が昂ぶり顏は上氣せますが手は死人のやうに冷えそれに下腹が膨れ又鼻腔が始終塞つて困ります猶痔疾があつて大便が秘し時々肛門の周圍が腫れることがあります如何したらば宜しいでしやうか（下野、心配女）

『答』御容體は數多くある樣ですが察するに、各症の原因は、皆鼻腔に病氣のある爲に來る樣です、其病氣は診察せねば分りませんが、鼻茸が出來て居るか或は肥厚性鼻炎と云ふ、症かと思はれます、兎に角、專門家の治療を受け、第一番に此鼻をお治しなさい、左すれば耳の鳴るのは勿論、顏の赤くなるのも、手足の冷えるのも、又神經過敏も、盡く去り食慾も興進し消化も容易となり、隨て下腹部の膨れるのも自然に治ります、便通を促がす爲め、毎朝々飯前に、湯吞に一杯宛、食鹽水をお飮みなさい、さすれば、少し位の痔疾は癒ゆるものであります、けれども尙時々肛門の周圍が腫れる樣の事があれば、手術を受けらるゝが安全です。

○動氣がする　神經衰弱にて時々動氣がうち又脊腹部に苦痛を感じます何うしたらば靜まりましやうか（備前、病女）

『答』神經衰弱より來る、動悸は、其神經衰弱になる原因を去られねばなりません、其原因は種々ありますが、若き女子の神經衰弱は、空想を抱かれるか、或は不規則の勉强をなさるか、睡眠不足なるかに、來る事が多くありますが、之等の原因を認めざれば、子宮の位置に故障ある事を、考へねばなりません、何にしても原因を確め、之が治療を受けなければ、枝葉の動悸は止みません、神經衰弱より來る動悸とは醫者が申されたのですか、然らざれば或は心臟病てはありませんか、兎に角、早く醫師の診察を受くる必要があります。

○上氣て鼻血　十九才の女肩より首にかけて非常に凝り首のまはり太く始終上氣せて頰が紅く時々鼻血が出ます療法を問ふ（未婚女、落葉）

『答』多血質ならん、食物の攝生法を第一とします、先づ日頃野菜類及び果物を多く攝り、肉類及び芋類、餠菓子類等を節し、而して便通を毎日促し、月經少量なれば、其手當を婦人科醫に受けらる可し。

○はたけ　俗に云ふはたけが顏に出來て困ります治療及び豫防法をお教へ下さい（京都、綠子）

『答』治療法としては、加里石鹼なるものを、藥舖にてお求めになり、毎日二回宛、之にてお洗ひになり、豫防法としては顏をお洗ひに

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

なろに糠などお用ひになる方が宜ろし。

○生え際が薄い　私こと眉毛生え際が薄く悲しくてなりません如何なる毛生液を用ゐば効がありましやうか（日本橋、あや）

『答』毛生液なるものも、多數の種類あり醫師も、又四五種の藥を使ひますが、病的に依りて、禿げし處には、再び生へる効がありますが、先天性に毛の少なき人には、決して効はありません、故に御同情に堪えませんがお諦めになるの外はありません。

○乳が大きく身長が小さい　私ことまだ十四才ですのに乳が大きくて困りますそれに身長が小さいから猶耻かしく御座います何うぞ乳を小さくする法と身長を延す法とをお教へ下さい（淺草、女學校の一年女）

『答』身の丈の短かきは、先天性のものなれば、之を伸ばすは、隨分困難の問題でありますが、比較的効がありまするのは、體操です、幸ひ女學校に御在學の樣ですから、務めて體操を御練習なされ、殊に金棒等は最も効がります、又家に歸られても、成る可く、立ち働きを多くなし、机に向ふ時は卓子と椅子を、用ひられたし、而して寢ぬるには仰臥にて、出來得る丈、足を伸し居らる丶樣なさる可し。

乳房の大なるは、皮下脂肪の、多き爲と、乳腺、發育の、善良なる爲との二種ありますが、甲は前條身の丈を伸ばす方と同一の法にて、自然脂肪減ずるものなれば、幾分か小さくなる事が出來ます、乙の乳腺發育は生殖器の發育と、併行するものなれば、充分學問或は他の趣味ある方面に、熱中なされ、勉めて、卑猥の小說などを讀む事、或は猥褻の、話を聞く事等を、お避けなされば、自然乳腺の發育を妨げ、小さくなる事が出來ます、又乳房を稍々堅く晒布にて繃帶をなし居らるべし。

○肺病患者の看護法　中等教員家事科の試驗に『肺病患者の家庭に於ける看護法を明記せよ』と云ふ題がありました御說明を乞ふ（無名氏）

『答』肺病には、其種類多數にして、單に肺病患者との、問題に對しては、答案に苦みます、けれども出題者は、肺結核を、指示したるものと、假定し、以下其答を掲げん、肺結核は呼吸器の、慢性傳染病なり、故に家庭に於ける、看護法としては、主として家人の、傳染を避くる法を、講ずるを主眼とす、患者の寢室は、家人の居室と接近せざる、空氣の流通良き室を撰び、臺所と便所は、之に附屬せしめ、患者の專用となし、食器は每食後必ず煮沸するを要し、夜具は二通りを具へ置き、時々取換へ、一週二回は必ず、日光に晒す可し、殊に注意を要せざるを得ざるは、喀痰の始末なり、如何となれば本病の傳染は主に喀痰及び、呼吸よりするものなれば、喀痰の消毒不完全なる時は、忽ちにして四方に傳染するものなればなり、實に一滴の喀痰の中にも數萬の結核黴菌存在し、恐るべき傳染物なり豈、注意せざる可けんや、先其消毒法としては、瀨戸燒の蓋を有する唾壺に、五百倍の昇汞水半ばを、入れ置き、喀痰は盡く、此内になさしめ、喀痰後口邊を拭ふには小さき「がーぜ」の切又は櫻紙を用ひ、一々此唾壺の内に捨つ可し、而して喀痰の分量に依り、一日二回若くは三回、此痰は地中に埋む可し。

看護者は可成强壯者、二人を撰び交代に、時々庭園等に散歩し、新鮮の空氣を吸はれ、勉めて滋養物を攝取し、身體を清潔に保つため入浴を屢々なし、襯衣の洗濯を怠る可からず、寢ぬる時は交代に必ず別室に於てす可し。《以下次號》



Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY



誌友俱樂部

朋友とは相互の幸福を增進し德行を勸獎するが爲めに成せる二人の鞏固なる結合を云ふ

アヂソン

文學顧問

問　記者樣木蓮と蓮翹とは違ふのでございますか（衣子）

答　違ひます、木蓮は木蘭とも言ひ、樹も大きくなり紫又は白い色が咲きます、花も大きいです、蓮翹は餘り大きくならぬ樹で、花も小さく、黃色です

問　記者樣に御問ひ致しますが、新體詩を作るに假名の振り方がわかりませんの、それて何か良い字典でもありませうか、それとも只自分の考へて振るてせうか（岩代あくがれ女）

答　別に字典はありません、假名は自分の考へて間違はぬやうに振るのてす、初心者は勝手な假名など振つてはいけません

問　女子正則英語學校の規則を取寄せたいのてすが神田錦町て參りますか（靜岡縣山縣梅園）

答　神田錦町て郵便はとゞきませう

問　東京音樂學校は何處に在りますか、受驗地は東京てすか、規則書は何れへ申込めばよろしいか、貸費生はありますか、卒業の上は中等敎員の資格はありますか（石川縣、かしく）

答　上野公園に在ります、規則書は直接同校へ申込にならば送るてせう、受驗の日限等はそれに書いてありませう、貸費生は無いと思ひます、卒業の上は資格はあります

問　記者さまごきげんよう偖て一寸おたづね申上ますが內藤鳴雪先生中村不折先生の住所を知らしてください（大和〇〇女）

答　本鄉眞砂町十八、內藤鳴雪氏、下谷中根岸三十一、中村不折氏

問　心の花はまだ發行されてゐますか お敎へください（みき子）

答　發行して居ります

問　『萩の家遺稿』には國文や新體詩もありますか（曉子）

答　いゝえ、和歌ばかりです、發行所は神田錦町明治書院

問　記者樣お手數ながら梧桐知登子樣の新派和歌に『とらはれのごとうとましき日よ』と云ふのがありましたが、意義がわかりません、どうぞお敎へ下さいませ（下野、磯みい子）

答　『御名呼べど心和まず寃の神のとらはれのごとうとましき日よ』てせう、『とらはれ』は囚はれてです、『ごと』は如くてす、寃の神に囚はれたやうに、うとましく、淺ましく思はれる日だと云ふのてす、戀しき人の名を呼んでも、一向に心が和かにならぬ、斯う云ふいやな日は寃の神にても囚はれて居るのだらうと云ふのてす

問　記者樣へ御尋ねいたします愛讀者の御住所の中で上毛とか下毛とか書いてありますは上野下野のことてすか何卒誌上てお敎へ下さい（琵琶湖のほとり淡みどり）

答　左樣てす

圖書換讀

〇私の下に白玉姬、悲戀悲歌、一葉船、夏草、海賊、心のあと、天地有情、二十五絃其の外文學書類雜誌三四十册程ございます讓致したいと思ひますからお望の方は御一報下さいまし又諸姉君親しき御交際を望みます（東京神田鍋町二、一、岩崎方少光富士子）〇私の許に女子文壇、水彩畫之栞、軍國訓、先覺詞藻、家庭文庫、帝國婦女文、花紅葉女學生訓等有りますの御望みの方は御寫眞又は繪ハガキて申込て頂戴かならず早速御送り申ます（福島縣河沼郡坂下町松井ます子）〇女夫波、天打つ波、夏子、新細君、うきれ、橘英男、不如歸、日の出島、世界大競走、和歌入門、土佐日記、源氏物語、玉蟲、黃菊白菊、自然と人生、思出の記、新小說、女子文壇等あり血の淚や金色夜叉、伯爵夫人、多情多恨、花守等其他諸小說古雜誌との交かんを（千葉縣流山町一ノ組にて淺香火すみれ子）〇誌友の皆樣方私風景や美人の繪はがき粗末なのですけれど澤山御座いますから皆樣のお持ちのと交換を願ます（三重縣員辨郡三重村大字高柳瀨木としゑ）〇當文壇の諸孃樣方よ妾に滑稽なる新聞雜誌澤山あります繪端書又は寫眞を交換し交際下さる方に進呈す（大阪松島町一丁目濱側丸山マツ方岡本ふじ）〇敬愛なる姉樣方よ私の手許に寃詩人、後の戀、芙蓉峰、金色夜叉等御ざいますから乳姉妹、夏子、あしわけ船其の他新刊の弦齋の小說と御交換下さいませ（常陸國筑波町北條內町二十一番地芳村坂枝）〇私の手許に女學講義、二筋道、文藝俱

樂部、戀の一年有半、女學世界、戀、化粧かゞみ、衣裳かゞみ、赤堂滑稽談、なでしこ、秀才文壇、小說叢書、和洋料理精選全、少女世界、都合三十部御座いますから御のぞみの方は魔風戀風、伯爵夫人、實用編物か御寫眞て御申込なさい(茨城縣久慈郡世喜村辰口野澤とく子)○妾の所には中學文壇、秀才文壇其他あります それて今回にかぎり交換者へは房州名所繪葉書一人に付三枚並に妾の、みにくき寫眞を一枚づゝ進呈致します(千葉縣安房郡大山村釜沼見松しま)○皆樣の中てムラサキ、婦人世界女鑑を每月御取りになる方へ私の文藝俱樂部新小說と御交換下さいませんか但し東京市に御住居の方に限ります(芝區新堀町十七大竹政枝)○妾前號て古雜誌の交換を願ひましたら澤山集りましたがその內京橋の消印て少女世界二册屆きましたが差出人が不明故おあづかり致しておきました至急お知らせ下さい次に皆樣の中て古小說お持ちのお方はお惠み下さいなさもなければ暫らくの內お貸下さい(常陸土浦川口町高橋しん子)○妾の許に小說本が十數種御座ります、天打浪一、二、筆子、初枝の卷、不如歸、破戒、女學生、新夫婦、雲がくれ、濱子、小猫等てす御入用の御方は未使用の繪葉書にて又は相等の小說本か言海、枕の草紙詳解、新體詩自在などゝ御交換下さいまし尙永久に御交り下さい(佐賀縣杵島郡橋下村吉田みさ子)○誌友の御妹樣の中て『靑春』『伯爵夫人』『吾が輩は猫てある』『己が罪』『夏子』『百合子』『愁人』『紅葉全集』の中て何れか『紅葉著美文作法』『魔風戀風』『緣不緣』『筆子』『富美子夫人』など御不用になつて御出なれば私の手許にある『言海』『辭林』『假名遣字典』『新詩字典』『漢和大字典』『言葉の泉』『夢の華』『多情多恨』『不如歸』『思出の記』『黑髮』『白羊宮』『四十年度の新小說』『文藝俱樂部』など不用になつて居りますから御交換して下さいませんか先着五名には妾のみにくい寫眞を添へて御送りします(香川縣大川郡津田町字神野田中スガ子)○皆樣私の手許に女子文壇四册(四年一、二、三、四、號)御ざいますから御入用の方は美人繪葉書か學校のにて御申越し下さいませ(尾張國龜崎町櫻井峯子)○お孃樣方のお許に本年三月發行の太陽、早稻田文學が御座いましたらお送り下さいなもし先に御送本がいやなら端書一枚下されば端書の代と相當の品又はお望みの書を以て私より送りますからお知らせ下さいな(千葉縣夷隅郡國吉町刈谷今井なをし)○私手許に昨年の拾月から今月までの葉書文學と空想病、夏ひさし、迷の跡(詩集)が不用になつて居ますから皆樣の內にハイネ詩集が御座いましたならば何卒御交換なすつて頂戴な(茨城縣猿島郡新合村中田山崎今泉桂花子)○お姉樣妾不用書が有ますから御交換なさつて下さりませ不用書はうた日記、靜夜、白羊宮、夢の華、男の聲、文學入門、にせ紫前後、思出の記、綠葉、少女の戀、半獸主義、無花果、食道樂全部カルコ集、魔風戀風二册て入用のは鷄頭、濤聲、人生の行路、鶉籠、有明集、村の人(田山花袋さん著)スマイルス四大著書譯品性論職分論勤儉論、自助論、靑果集て一部なりとも御交換願ひます御寫眞御送り破下つた御方に雜誌文庫、詩人、明星、新潮、野の花、女子文壇、女學世界、婦人世界、少女世界の三十九、四十年の二部づゝ文章世界去年增刊全部御送の御方は何なりと二年分を送ります新思潮一部なりとも御送りの方は三册御禮致します(越後國帶折字山王薗川淸子)○私の手元に明笛の曲が百許りありますから御手紙にて申越なれば御知せ申します それから黃菊白菊天地有情、日本文學全書第六編、竹柏園集第二編、學生座右之銘、國文學、帝國文學、中學生、女子文壇一册不用のが御座いますから交換下さい(能登二宮局管內越路村登久前筱田第一屋敷內はす子)○私に暮笛集、戀衣、閨秀俳句選三十九年四十年の明星及文庫全部ありますが皆樣のうちて片戀、カルコ集、其面影、武藏野、紅塵、花袋集、靑果集、平凡、芭蕉全集など御不用の方は交換して下さいな(播磨國印南郡曾根村井澤夕洋)○私の許に少女界、少女世界、三四十册許りと第十一明治才媛文集と英語の本、萬國小歷史、中學漢文一、二、三、等不用てありますから皆樣の中に家政學(下田歌子女史著)臺所改良、西洋男女交際法、四季料理、女子作文の栞、呪はれたる女、化粧かゞみ等不用の方何卒交換して下さい(仙臺市大町五丁目二〇一小林こと)私の許にチエリー名刺形手提寫眞器の不用物がありますお望みの方へ御讓り申ます至急御照會を願ます尙外に水彩畫指南、墨畫講話、水彩畫楷梯、日本地理辭典、作文、新辭林、日の出島、言文一致文範、女子の本分、婦人の寶鑑種々ありますから左の書籍と御交換を願ます、嫁ヶ淵、靑春、英譯不如歸、魔風戀風、思出の記、紅葉全集、男女學生健康法中村不折著鉛筆畫法旅行とスケツチ(茨城縣結城郡菅原村坂野米子)○皆樣のおうちに女子遊學案內御持の御方は御座いませんかお有

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

りの御方はお送り下さいな それから女學校入學試驗の書いた本も御送り下さいな 御禮はきつと御送り致します（長野縣稻荷山上八日町 中島方中原小夜）○皆樣方の內で女子文壇二月一日發行と二月十五日の定期增刊御不用ならば御惠み下さい御禮は繪葉書を三種郵便にして 送ります（茨城縣北相馬郡小絹村大字新宿下 永田いわ子）○皆樣方の御內で不如歸、みだれ髮、綠髮、ゲーテの詩、西詩愛吟、不如歸の歌、女夫波の歌、金色夜叉の歌、魔風戀風の歌其他新體詩集、小說御不用の方は御送り下さい御禮として 優美繪葉書一組以上の者を差上ます（東京々橋宗十郎町廿 渡邊方水谷光子）○妾には左の不用の書があります後の新不如歸、薄命美人、心中俤、死人再會、浮氣の罪、琴の音若き男女の研究、愛の進化、皆樣の中で乳姉妹、魔風戀風の中、富美子夫人 御持の方は御送り下さらば早速御送り致ます（栃木縣嘉右衛門町西裏木下谷平方福井八重子）○御なつかしき諸姉樣方の內で已が罪、夏子、青春、等の小說類御不用の御方は御座いませんか 妾の秘藏の吉川弘文館發行の婦人寶典（五冊揃一部定價三圓）乳姉妹（上下）影法師、天うつ浪（第一第二第三）にせ紫上下やどり木等と御取替下さいませんか御望みの御方樣は下名迄御 申込を願ひます（羽後沼舘町泉川けん）○諸姉樣の中にもし遺花の本御持ちて御座いましたら 如何程古くてもかまひませんが 妾の小野先生の習字手本か外國少女鏡か其他御交換遊ばして下さいませんか 御望によりては編物又は寫眞を添へて差上ます（石川縣鹿島郡 田鶴濱にて今村可親）○我が讀友の諸姉樣よ妾も大の讀書好てす小說 雜誌の何れを問はず御讀みあきの御本どうか 御送り下さいましな御返禮は婦人畫報、女學世界、心の花などて屹度差上ます（千葉縣福岡町 下出羽町福島くら子）○私の手許に『文藝倶樂部』『女子文壇』等まだいろ〳〵ありますから 皆さんの中でいろ〳〵の小說か又 繪葉書、編物等 て交換 して下さい（和歌山市茶屋町二四志賀楠子）○諸孃よ私の手許に獨步集、眞田幸村、夏子、己が罪などがあります雛子、乳兄弟、嫁ヶ淵、血の淚、麗子夫人、平家物語、富美子夫人など丶交換して頂戴な 私の宛は（兵庫縣明石町大藏谷四〇二小倉方長江）○御姉樣の御手許に 小說不知火、思ひ出の記、ハイカラ令孃、源氏物語御持の御方は 私所持の谷間の姫百合、櫻の御所、裁縫秘訣記事、消息女子文のはやし、中學動物學 前後上中下、女子文壇、等ありますから 御交換下さいませんか（佐世保市天滿町四八大崎光子）○皆樣私の許に ハイカラ夫婦、貴族の戀、多情多恨、濱子、戀の一年有半滑稽女教師等あります何か面白い 小說とかへて下さいませんか御願ひ申ます（靜岡縣榛原郡川崎町西町增田ちさ子）○皆さんのおうちにバイオリン御持ちの御方は 御ゆづり下さいませんかまた方丈記御持ちの御方は下名へ 御知らせ下さい（豐前企救郡東郷村進節之助方はろ枝）○なつかしの姉樣方よなんてもよろしゆうございますから小說寫眞御取りかへ下さい（福島縣耶麻郡猪苗代四十四 六角みす）○妾の手許に 秋の下露、己が罪、無花果、天打波、濱子、いささらば、新夫婦、心の波、母の心、仇と仇、少華族、多情多恨、等有ますから姉上樣方に 夏子、乳姉妹、言海、橫戀慕、美文自在、女男波、雛子、伯爵夫人、人の罪、俳句作法と御交換下さい（羽後國河邊郡濱田村山崎喜三郎內兒玉つや子）○私の手もとに女子文壇二十册ばかり不用になつてゐます 繪葉書て申込んで下されば直ぐ送ります（越後高田茶町、近藤ます子）○乳姉妹か、己が罪か送つて下さい、私の處には 思出の記、新空中旅行、ハイカラ令孃、其外女の雜誌繪葉書 二組ありますからおとりかへ下さい（福島縣田村郡三春町字八幡町坂田屋內增子すい子）○私も此の度家庭百科全書の第四編和洋菓子製法と 高等作文教科書とが不用になりましたから 雛子か何か 面白い雜誌と交換して頂戴、又筑前琵琶の譜の ついた本を御惠み下さいませ必ず相當の物て 御返申ますから（大阪市東區淸水谷東之町千二百十五番邸岡本豐子）○諸孃の中で 博報堂發行の少年議會議事錄か青年議會御不用の方あらば 何程汚れて居ても宜いから 御惠送下さい屹度御禮いたします（羽前國玉川郵便局區內南小國 小學校にて朝岡こう子）○どなたか 本社發行の玉むし御不用のお方は（あまり古びないもの）私の小野鵞堂著新編書簡文例（定價六十錢）と御交換下さいませんか（北海道根室千島町一ノ八汲川こう）○諸孃さま私に 美文作法、俳諧提要、新體詩學等の不用書ありますから明治詩集 、明治壹萬句、竹柏園集等の本と 御交換なし下さい（新潟縣佐渡郡新穗町中川方中川花子）○音樂の好の御かた樣ヴアヰオリンの譜御 持ちの方は御惠み下さいハモニカの譜も願ひます次に叙事唱歌、羽衣、須磨の曲、越後獅子とも 御惠み下さいまた次に讚美歌とその譜と御持らの方は 小說本母の心、女夫波、コブシと御交替して下さい 又洋歌同譜

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

も上げます私の學校にては今流行して居ります（秋田縣平鹿郡横手町柳町三ッ梨健一郎方菅芳子）○私は新細君、母之面影、病戀愛、不如歸、女こゝろ、己が罪、等ありますが諸孃の中に濵子、魔風戀風、金色夜叉、夏子、不用の御方は御交換して下さい（愛媛縣越智郡岩城村福井壽美）○諸姉樣の中に新小說を每月おとりになる方がありますならどんな古いのでもよい中學世界增刊明治戰記とお交換下さいませぬか誠に恐入りますが晶子先生の『舞姬』柴舟先生の『金帆』お持ちの方は暫くお貸して下さいませぬか（大分縣東國東郡西安岐村近藤げん子）○賢き諸孃樣御許に靑果集、ハイカラ令孃上下、湖畔の家、有情無情、十七八、もやひ傘、女學生、思出の記、式部小路、思ひざめ、紅葉全集、露伴叢書、魔風戀風全部、月に立つ影、虛榮、上下、緣不緣、綠髮、等御不用の御方は算術小敎科書上下、初等代數學敎科書上卷、（何れも藤澤著）三ケ月間卒業新英語、改訂帝國新地圖、時代靑年文集、第一五十三次草鞋日記、美文傑作美文花ぞの、獨步集、理想の妻、英語の敎へ、美文資料、新婦の秘密、不如歸、妻と妾、二人妻、滑稽新婚旅行、其他の雜誌にて交換して頂戴な男子の方でも差支有ませんから（山口縣周防田布施松根助一方にて靜枝）○明治節用、書翰文大成、中學林、作文字林、人名字典、廣熟字典、文章軌範、花鳥集、鳴潮餘沫、古今集遠鏡、草紅葉、短篇傑作集、藤村詩集、英語自修新書、論理學略論、家庭小說八冊アンナカレンナ、モンナバンナ、英語ランゲズ、ロングマン、リーダ又は雜誌と日の出島其他拉孫著、英和字典、言海、歐山米水、千山萬水、樗牛、紅葉、一葉全集、獨步集、天打浪、不如歸、帝國文庫、吾輩は猫である、病間錄、其他の最近隨筆小說と交換して下さい（山形縣羽後酒田祖父山下小倉夏代）○皆樣の內に裁縫敎科書、女學世界をお持のお方は私の婦女の樂、日本禮式大全秀才文壇と御交換を願ひます（美作勝田郡勝間田町小矢田權田とくの）○妾の許に秀才文壇文章世界、ハガキ文學、學校園、探檢世界、支那史などたくさん有りますから皆さんの中に新小說、和洋裁縫全書、美文資料、俳句作法などの本と御交換を願ます（千葉縣山武郡正氣村遊島大木しげ子）○私の手許に、婦人畫報、母親の心得、造化機論、軍人の家庭、等の書が有りますが、諸孃樣にそれそうとうの本が有ましたなら至急送り下さい（茨城縣那珂郡柳河村靑柳宇殿はらい女）○妾の手許に、谷間之姬百合、全部、忘れがたみ、玉のこし、おもかげ、不如歸、不問語、花間の鶯、夏小袖、文藝俱樂部、書翰文辭書、金言全集等の不用書があります諸孃樣御不用の書物と御換へ下さいませ御禮には妾の見苦しき寫眞を付けて御取り換へ致します（靜岡縣榛原郡萩間村東萩間藤野琴月女）○姉樣御許に靑春、にせ紫、筆子等が有りますれば御送り下さい富美子夫人、麗子夫人、思出の記、嫁が淵、瀧の音が有ります（愛媛縣越智郡岩城村櫻木英子）○皆樣の中で里見八犬傳、乳姉妹、食道樂、嫁が淵等御不用の方が御ざいましたら私の圖畫本（毛、鉛、筆）むさしの、（以上新らしいのです）小說等と交換して下さい御住所をわかりやすく書いて送つて下さい！（滋賀縣甲賀郡佐山村大字神保林さだ）○妾、花守、藤村詩集、獨步集、夏廂、破戒、濱子、魔風戀風、春潮、靑春、夏子、思出の記、玉虫、等不用で御座いますから暮笛集、行く春、二十五絃、白羊宮、春鳥集、毒草、みだれ髮、むらさき、行く雲、二十八宿、海潮音、其他最新の詩集御持合せのお方は御送附下さい御望の本に自作の寫眞掛か刺繡を添へます殿方でも神聖なら妾かまひませんわ（越後見付上町高野機業店內てつ子）○のもり草、冥想論正續文章軌範讀本（二冊）十八史畧讀本（二冊）地文學簡易敎科書、農業簿記學敎科書、更科日記講義、韓非子講義等の不用書がありますから面白い小說文藝俱樂部、新小說、趣味增刊、早稻田號等と交換して下さい（新潟縣西頸城郡根知村伊藤宇太郎方星野菫園）○私のところに二卷九號からの女子文壇と少年世界、少女界、女學世界其他外國地理、東洋史鑛物化學等の參考書が不用に成つて居りますから皆樣の何か有益な雜誌文學農業等又は裁縫小物の裁方編物のひな形五錢以上の繪葉書か何れても宜しく有ますから御交換下さいまし但し繪葉書は景色に限る（小樽新地町五、高橋醫院方高橋喜美子）○私の手元に玉むし、花紅葉、朝ばれ、不如歸、うもれ木、雪月花、天地有情、雜木林、筆のしづく、自然と人生、黃菊白菊、などありますが皆樣のうちで晶子先生のみだれ髮、小扇、戀衣、毒草、などお持ちの方は以上の內何れかなりと交換して下さいませんか（大和北葛城郡浮孔村三倉堂口井藤惣助方我澤素枝）○妾の手許に新美辭學（島村）樂世觀、新派和歌辭典、女波男波、山陰麒麟、ダンテ神曲物語、河內屋、黑百合、平家物語讀本、小笠原諸禮大全（三冊）喜劇箕一ッ福笑ひ、寫生文集、塔中の怪、あ

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

られ酒、校刻日本外史、其他講談本三十册程ありますが谷間の姫百合、浮城物語、日本文學全書第八編、倫理學説十回講義、離愁、紅塵、男の聲等と交換して下さいませんか（越後國西頸城郡根知村山本やす子）○誌友の諸姉方よ妾顔を出すのは今が始めてすのよどうか永遠のお手引を下さいなて妾のところに中學世界、短篇美文、秋の日、新文範三體記事文、百日速成作文獨習書、女子文壇等の不用書がありますのよ、皆さんの中で玉むし、思出の記、白羊宮、靑春、筆子、落葉等お持ちの方はどうか御交換下さい（茨城縣新治郡七會村中佐谷久保田かれ）○私の手許に冒險世界、不如歸、道樂和尚、女學世界、閨秀文壇等ありますから其の中でどれでも差上ます但し交換して（千葉縣長生郡本納町古山正一方豐田千代子）○徳島縣の工藤美雪様妾は大變驚いてよ徒然草はたしかに受取りましたそれて後から受取のハガキと御のぞみの御本はごいませんが他のでもお宜しうございますかと云ふ御手紙差上げましたのよよく御しらべ下さいれ私の様な者にても御本の只取は致しませんよ（讃岐恥を知る者）○諸姉様よ私の手許に濵子脚本、金色夜叉、思出の記、明治才媛文集九、十、美文自在、學生訓、靑年訓、百字文選、小説家、新夫人、平家物語、金帆淵泮の翠、松田ごどかどみ、パリシナ其外繪葉書百枚ばかり不用に成りて居りますから皆様讀て見て面白き小説と申し込んてください（羽前國最上郡新居町長南白浪子）○諸姉上様の内に筆子、夏子、乳姉妹、ハイカラ令孃と己が罪、伯爵夫人御持の方は私の女子文壇、銀行のひみつ、小夜しぐれ、女學世界、少女界、歴代國文選を御取替下さいそして編物交換もおれがひ致ます（岩代耶麻郡喜多方町新道岩田波满子）○誌友の皆様方の内にて『大槻文彦著言海』『小野先生の草書千字文』『玉むし』『ハイネの詩集』其他何小説にても結構てすから御惠み下さいな御禮までに私の『四季物語』『ハイカラ令孃』上下『草枕』上下『朝ばれ』『歌集言葉の玉の緒』文藝倶樂部、ムラサキ、女學世界』槑カード繪はがき左の内にて必ず御返しいたします（埼玉縣北足立郡谷塚村瀨崎櫟澤方しづ）○皆様の中で東京苦學案内お持の方は妾の女禮と裁縫、自然と人生、不如歸、思出の記、と交換して下さい（茨城縣新治郡東村西根中村こう子）○大阪の辰弁文子様に小説御送り致しましたが何の御返事も御ざいませんから又御伺ひのハガキ二度差上げましてゝ御返事下さいませんが小説もハガキも御手においりになりませんてせうか御受取りなればお約束の朝ばれお送り下さいませ（香川縣仲多度郡多度津町東濵まさ子）○妾の手許に新詩入門（白洋著）黄菊白菊（桂月）世界發展倶樂部（獨歩）其外女子、秀才文壇、中學生などありますから姉様方御所持の新詩集、小説の何てもよろしいから御交換御望みの方は御申し越し下さい（千葉縣山武郡豐岡村蕪木千九十三番古谷みつ子）○妾の手許にロングマンス讀本、春雨物語、探偵小説優殺、豪遊奇談、森有禮、日用品製造法、癈物利用法、歐米漫遊雜記、姉川合戰、鈴木重幸、飛乘太郎、町醫者、女道樂、芙蓉峰、深山美人、小説家、小弓御所、昨年六月よりの少女世界、少女界全部、右の外面白き小説澤山有ますから諸姉方の中で己が罪、乳姉妹、新不如歸、靑春、不如歸の歌、魔風戀風、母の記念、夏子朝日櫻上巻、櫻の御所、少女の戀、聲の兜、戀と愛、濵子、槇戀哀、仇と仇、思出の記、魔風戀風の歌、己が罪、の歌等どれでも御不用の方は交換御申込下さい（靑森縣西郡鰺ヶ澤町字新地町七中村艶子）

寫眞編物交換

○なつかしき諸孃様ひじつきや、槑を御惠み下いませ倘名所繪はがきの交換を御願ひ申ます（横濱根岸町八一四山口櫻）○お情深き誌友の姉上様！何卒寫眞編物の交換を願ふ編物御送り下さる御方には式内縣社橘神社紀念繪葉書一組（三枚）にて倘ほ寫眞を添へて御惠み下さる御方には先着三名限り見苦しき姿の寫眞を付けて返禮致しますからなるべく早く（千葉縣長生郡新治村北田信江女）○御手製の編物御送り下さいな御禮には繪葉書雜誌などそれ〴〵きッと差上ます（熊本縣玉名郡長洲町吉田律子）○拜呈妾は近頃遊學した女てすが何卒寫眞交換して下さいな六枚迄は手製の編物を差上げます（芝區白金三光町八三、長田かれ方中村きみ子）○親愛なる姉君よりボンを御送り下さつた御方には五名にかぎり金色夜叉の歌、不如歸の歌何れかおのぞみなのを御送りします（備中國高梁町字南町龜山字多子）○妾に寫眞を御惠下さいませんか但し五名にだけてす（岩代國安達郡本宮町神條鈴木ちよ子）○皆様私に十五才以下の少女の寫眞か姉上様方の御寫眞御贈り下さいますれば舶來綺端書に妾の寫眞を添へてキット返禮申し上升新形の編物の交換も願ひます（秋田縣由利郡古雪港一〇五菊池敏子）○皆さんの中、レースの編物御持ちの方はお送り願ひますまいかそしたら私は自筆の

Digitized by Google　　Original from HARVARD UNIVERSITY

美人なり花鳥の繪葉書をちらさお贈り申します殊に寫眞の交換を御願ひ致します（大阪市南區東清水町一番地杉田季子）○美術造花實習寫眞繪葉書は澤山ありますから望の方は繪葉書て附込んで下さいどなたでもかまひません又造花でも製造案內書でも御入用の方には差上ます（東京四谷ダンス町廿八小澤）○御なつかしき誌友の皆様方私は編物が何より好きて御座いますのけれども至て下手て御座いますから姉様方の內で御持ちの御方は何卒々々御送り下さいましな御禮は繪葉書ても本ても（東京日本橋區中洲十八號地新居たみ子）誌友の諸姉様私の手許に見苦しき寫眞二十四枚有ります一から交かんして下さい又先着の方には美本と繪ハガキを御送附致します（尾張國知多郡牛田町河合齒科醫院內村井久子）○誌友の諸姉上様方何卒々々繪葉書寫眞の交換を願ます又造花御送りの方には不束ながら寫眞を添て御返禮致します（下野國足利町四二〇四永塚さだ方津久井芳江）○誌友の御姉上様方よどうかひじつき栞等を御送りください私も絹の栞にて御禮いたしますわ又寫眞を御送りくださる方へは私の寫眞へりぼんや栞などを添えて差上げます（長崎市舘內一六平田すみれ）○編物、肱突等御めぐみ下された御方には舞鶴名勝寫眞葉書高尙なる雜誌等て御返禮いたします（舞鶴高野村城屋水野保太郎內しげ）○私は寂しい片田舍に住む十五歲の少女てすどうか御寫眞や絹絲の編物等送つて頂戴な屹度私からはきれいな近江八景繪はがきに見ぐるしい妾のうつしゑを添えて御送りしますわ（近江國犬上郡大堀村小十郎うち阿部千代）○本誌を愛讀せらるゝ諸姉様御寫眞や編物、造花等の御交換を願ひます、御寫眞を御惠みの方へは妾の寫眞に舶來繪葉書二枚、其の他の方にも相當物を御返しします、三色スミレの苗も送ります（讚岐國觀音寺町大工分竹田敏子）○誌友の皆様繪はがき寫眞編物の交換を願ひますしかし男子の御方はいやてすよ妾只今美人繪はがき貳拾枚あります故外の美人繪はがきと交換してくださりませんか（山城國綴喜郡多賀村木原岩次郎様方村田まさ子）○妾の二枚掛の寫眞が二十六枚ありますから、皆様のと交換して下さいませんか外に四十六冊不用雜誌がありますから、是れも先着二十六名のお方に差上ます先着第一等のお方には栗林公園のエハガキを添えて先着のお方には美しい、舶來のエハガキて、きつと／＼神かけてお禮致します（丹後國加佐郡中田郵便局區內志樂愛子）○皆さん寫眞や編物の御交換下さい妾の兄さんは寫眞師てすから名所のは澤山有ります醜い妾の姿も御目に掛けます（秋田縣河邊郡新屋町五十嵐寫眞舘內五十嵐おい子）○誌友の皆々様よ私も愛讀者の一人てす拙ひ者てすが何卒御玉章や寫眞の交換を御願します（岡山縣上道郡西大寺町向濱大森虎松方小林愛子）○私は最も田舍の者てありますから何もわかりませんが寫眞の交換などどし／＼御願申し上ます（熊本縣鹿本郡中富村字下分田糸山宅浦上國子）

諸嬢の交際

○姉上様美しき繪葉書澤山下さいまして、難有存ます今月もあひかはりませずれがひます（京都四條御幸町東入赤井方中川久子）○眞面目て皆さんに繪葉書の交換を御願致し升歌を添へて下さる方にはまた必返歌の詠を缺かしません（津市新町南河路三十一杉田諒）○誌友の皆様妾繪葉書交換て初めてなの、この後、地方の風景の寫眞や繪葉書の交換して末永くお交をして頂戴（北海道有珠郡西紋鼈末永町加藤八重子）○舶來又は內地製の趣味ある繪はがきの交換をして下さい（岡山市大學門田大師堂下小山華溪）○諸姉様よどし／＼交際や交換を願ます、して私われ、ふきりようてすから妾の寫眞の交換だけ御斷てす（大阪府下南河內郡長野村西代角野貴美）○妾の所には名所の繪葉書が五くみありますが先着の御方に上ます（千葉縣長生郡新治村上太田關屋源作方みち子）○誌友の皆々様よ美しき繪葉書及御寫眞御送り下さらば『福笑』『自然と人生』『幽靈旅館』『谷間の姫百合』『玉虫』『美文作法』其他ハート袋ナデシコや蝶しなり等にて但繪葉書は外國の品お禮はかならず差上升よ（千葉縣流山町加減香梅香子）○御情け深い天下の諸嬢様繪葉書や書面の御交際をたのみます男の御方ならば一切御返事致しません（石川縣鳳至郡輪島橋本佐助方前喜美子）○今妾の手許に歐觀繪葉書三組と拙き寫眞六枚とありますから先着の御方には差上ます（千葉縣山武郡瑞穗村永田ゆき子）○誌友の諸兄姉様よ妾は神聖なる交際を繪葉書にて願ひます玉章や寫眞の交換も一時限りのは御免よ（神戶市奥平野村二六一の三渡邊潮）○愛讀する未見の諸姉様よ妾は今年十九才てあります以後よろしく御交際を願ひます寫眞や繪はがきの交換も願ひます（豐多摩郡內大久保村二〇三堀江愛子）○妾は三重縣の高等女學校に居りま

したが此頃胃病て學校を止め太平洋岸の仙境とも云ふべき志摩の鳥羽に療養中てあります四方の御環様よ差支へなくば繪葉書寫眞等御交換を願ひます（三重縣志摩郡鳥羽港藤之鄕久住方松井ふみ）○何卒繪葉書や御手紙の交換を御願申します男子の方にも願ます（和歌山縣有田郡五西月村前田靜子）○繪葉書と寫眞の御交換をしたいのてす御望の御方はどし〳〵下名迄送つて頂戴但男の御方はいけません（茨城縣新治郡高濱町東田中、秋山秀子）○誌友の皆樣方に御注意申上ます、妾は本欄を見て、肉筆繪葉書や、玉章、寫眞、編物、等毎月々々二十名樣程へ送りますが眞實御返し下さる方は五六名て、其他は皆々取り放してす、妾くやしくつてなりませんから、今日以後妾が送つても御返事を下さらない方は詐僞女として本欄に其住所氏名を發表します扨て肉筆の繪葉書や、玉章お寫眞、編物等ドシドシ御送り下さいお願ひ致します（京都油小路五條北へ入大森與兵衛方はる子）○皆さんわたくしも交換のお仲間に入れて下さいませんか名勝の寫眞繪葉書を送つて戴きたいのてす御返しには必ず相當以上のものをお送りいたします（奈良縣高田町南三倉堂岡田つる子）○深雪の里に居住し居る自分はたゞオルガン、ヴアイオリンの友あるのみ從て種々雜曲蒐集し置き申候間同好の諸姉幸ひに長曲と御交換下されまじくや（羽後北秋田郡釋迦內村日景玉子）○皆樣どうぞ名所風景エハガキを交換して下さいスタンプ代も結構御返事は神かけて（神戶市奧平野二六一ノ三渡邊うしほ）○女子文壇愛讀の諸環樣よ、天涯萬里の私を哀れと思召して繪はがき、玉章、菓等御交換を願ひます、早速當地の最新珍物を以て確實に返葉致します（K. Kubo. P. O. Box. 826. Vancouver. B. C. Canad）（加奈陀晚香波市(郵函八二六)久保花涯）○私は今度御仲間入を致しました私は遠い〳〵米國に幼少の時渡米致しましたので少しも日本の事は存じません何卒寫眞及繪はがきの交換を願ます寫眞に御玉章を添へて御送附の御方に先着者二名に有名な桑港火災寫眞帳一冊に當地船來繪はがきを以て返禮致します（北米合衆國ワシントンパスコ市村上商會合資會社內村上くに子 Miss K. Murakami Box 70 Pasco Wash U. S. A.）○妾は世界の古郵便切手、證券印紙類、マッチの繪等を集めて居ます何卒四方の兄弟姉妹の方々よ御送付下されませ御返禮には何ともお好みの者を相當する丈け差上ます（東京本鄕駒込嗜町十一平島すま）○御感じになつた聖句や讃美歌をエハガキに認めて交換して下さいまし、それから押花や唱歌の樂譜の交換を願ひます（滋賀縣甲賀郡柏木村字北脇川島きん子）○遠國の御姉妹樣よ繪葉書交かん願ひますわたしのは門司下ノ關の名所古跡の繪葉書てす九州と本州の關門の急流の繪葉書等あります（門司市外白野江進節之助方進はる枝）○私は高等女學校を卒業しまして只今は造花研究のため上京しましたがおともだちがなくてさびしき故諸姉樣よ繪葉書と寫眞の御交換とを永く御交際を願升（神田區猿樂町二十一番地天野方小林稻子）○誌友のみなさま、どうぞ私も繪葉書交換の御仲間に入れて下さい美しいのを澤山持つて居りますから、男の方も構はなくてよ（芝區中門前一丁目十一番地長谷川靜代）○繪端書玉章て、親しき御交際をして頂戴な、返事はきッと致します（石川縣鳳至郡七浦村皆月坂井梅子）○上等繪端書送つて頂戴な、妾の所に掛川風景の繪端書が十組あります、但三枚一組必ず差上ます、先着五名に玉章を添へて上げますよ、尙上等手風琴があります、姉樣の御寫眞と紅葉全集の四と五卷を下さる方に獨逸科書付てね。（遠江小笠郡倉眞村柳澤戶塚しげ）○皆樣繪葉書の交換をして頂戴な官製私製を問はず紀念繪葉書を送つて被下な一組お送りになつた方には小樽港の全景三枚組を、二組被下つた方には北海道特產の鰊漁の光景八枚組を差上ます（小樽港色內町三八光商會支店方淸水初枝）○優しき誌友の姉上樣よ妾は養老の瀧の邊に住む一少女てすがどうぞ繪はがきの交換をして下さいれ又御暇な時には御玉章をも下さいれ養老や岐阜の鵜飼の繪はがきなど奇麗なので必御返事致します（岐阜縣養老郡牧田村字二又氏家多津子）○私の手許に名所繪葉書五組と美人繪葉書十組許りありますからドーゾ見捨なく御交換を（茨城縣稻敷郡君原村大字塙戶張淸子）○御情深い諸姉君よ何卒繪葉書と玉章の交換を御願致します（京都東山永觀堂前鹽田末次郎方須磨代）○東宮殿下大分縣行啓紀念スタンプ付の繪葉書御望の方は男女を問はず繪葉書に各自の御寫眞を添へて御送りあれ五名迄は必ず送る（豐後國安岐小川横町都月女史）○妾は今度家事都合上遠き田舍より都に參りましたから倍舊御交際をしてね妾は今年十五才の未だ何にも社會の事情も知りませぬ一少女てす（東京京橋區三拾間堀二ノ九遠水樣方飯塚とみ子）○お情深い御

懷樣よ御手紙下さいませんか、御返事は必ず〳〵いたします、又お寫眞を下さいました方には繪葉書を御送りいたします（周防國下松町 三奈木とく）○みなさん羽後の國中 表町の高橋久子と云ふ人は私がれ一葉全集を送りましたられ 罪のゆくゑ、火の柱、胸ひとつ右三册の中 妾の望みのを一册送つて下さると言ひましたから妾が罪のゆくゑを送つて下さいといつて手紙 を出したるに本がきませんから其の後三度 手紙を出したるに未だ返事がきません みなさん御注意なさい（山梨縣中巨摩郡 南湖村矢野千代子）○大和の國に御住み給へる麗しい誌 友の君方と今より末ながく親密に交際致したいのですが何卒御交際下さいませんか（福岡縣浮羽郡吉井京町 松田靜子）○女子文壇愛讀者の内私の手許に 少年用の甲號幻燈機と映畫六組と活動寫眞貳拾枚 不用ですが入用の方は葉書で申し越して下さい御返事致します（大分縣南海部郡佐伯町松尾ひで子）○繪葉書玉章御寫眞交換を願ます また妾は足利名勝繪葉書を送ります（栃木縣 足利町四 末廣屋内 伊藤勝子）○妾は誠に不束者ですが此一日からの愛讀者ですからどうぞお見捨なく お交り下さいませ（東京新橋宗十郎町二十水酒家蛙）○皆樣私も愛讀の一人ですどうぞ繪葉書玉章の 御交換をして下さい（本郷區千駄木林町二百十三 松井祐子）○私の古郷は讃岐高松です なつかしき父母に別れ淋しく他郷に勤務致して居ます 何卒皆樣御交際を御願ひ致します編物給はがき何か 面白い唱歌など送つて下さい其御禮としては栗林公園の繪はがき幾組もあります（愛媛縣越智郡西坂島住友病院内佐々木常子）○天下の諸兄 諸孃よ妾に一片の御手蹟（用紙、文句御隨意）を惠みたまへ御禮は屹度致します（高知縣吾川郡神谷村森本勘次方森本まさ子）○紙上にて御免なさい 私は昨年スクールを病氣の爲め中途廢學を 致しましたそして今は針の道に身を寄せて居りますの。何卒繪葉書や御寫眞などの御交換を願ひます 本當に淋びしい身です（栃木縣下都賀郡寺尾村大字尻內初音山稲富清子）○御繪端書の 交換して頂戴ネ（福島縣若松市大町竪丁一築田方山寺けい子）○なつかしき誌友の皆樣へ 申上げます東京の兄より繪葉書を送つてくれましたから 上等繪葉書御贈り被下れば先着拾名丈へ三枚壹組御送り致します遅きお方へは繪葉書で 御通知致します（長野縣小諸町津金泣月）○誌友の皆樣 何卒繪はがきや玉章の交換を願ひます 返信は即時いたしますわ （京都黑谷門前通廣道東清水せい子方清水とし子）○誌友の姉樣方 妾暫く海外へ參つて居ましたので 御無沙汰いたしました何卒是までの樣に繪はがきや玉章の御交換を 願ひます又御寫眞の交換も願ひますよ（京都四條御旅町 明田寓にて森山百合子）○私は田舍の愚な者ですが皆さんどうぞ御手紙や文通小説の 交換をして頂戴（能登國輪島町河井後町通り 黑田みき子）○御姉樣方 私は不束 者ですが 御交際を願 ひます（越後國南蒲原郡三條町淺間てつ子）○誌友の諸姉兄上よ何卒繪はがき棄の御交換を願 ひます又皆樣の方の中で歌『松の聲』 お持ちの方は 私の繪はがき來と 御交換下さい（北海道後志國磯谷郡南尻別村字昆布宮川温泉內宮川八重子）○御懷かしき誌友の御姉上樣妾は女子文壇を 愛讀して居る不束なる者です今度始めて 繪葉書玉章交換の趣味を知りました一月に三回 乃至五回ぐらゐにして下さい 御願致します（京都府伏見町問屋町小笹方秋 津さゝ子）○皆樣のお內で我國の地理につき御研究なされるお方 が御座いませうか私は同志の者ですが 天下諸嬢と地方を異にせるを幸として『地理の實地講義』を 願ひたく思ふのですが私が拙ない手紙差上げましたら 何卒この私を未見の人とすて 給はてぜひ〳〵御返事を願ひます。私も 必ず本群馬縣の地理につき知れる丈はしらべてお 送り申ます（群馬縣佐波郡伊勢崎町初子）○諸姉上樣何卒繪葉書や御寫眞の御交換などを願ひ申します（神戸市神戸私書函第百四十四號高井君子）○どなたさまも永く 繪葉書や玉章の交換を願ますよ其御返 禮として必ず佐世保の名所丼に九十九島の繪葉書 等を送ります（佐世保市島之瀨町芹田商店內內田武子）○誌友の皆さんお目にかかるは始 めてでございます芙蓉の麓駿河の景色のよい繪葉 書があります（駿河沼津在長泉小學校吉川とし）○私はおなじみの山縣梅園です誌友皆樣よ此度 都合あつて左記のところへまゐりましたから今後も相かはらずレター寫眞エハガキ等ドシ〳〵 送つて下さい（駿東郡富士岡村中山小澤九平方山縣梅園）○誌友の君達よ拙なき者なれど 哀れと思し召して御交り給はれかし（大阪市南區木 津川三丁目岩出みれ子）○嗚呼賴母しい御姉上樣よ、何卒以後は末永く水魚の 御交際を願ひます（滋賀縣蒲生郡鏡山村弓 削藤野了子）○諸姉樣たち何卒肉筆水彩畫の御 交換を給はりたし（京都市高辻通室町西入中島孫平方惡以子）

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

文壇餘興　東京（課題）

次の文壇餘興の題は『東京』と云ふのです、例の通り盛んに御投稿をねがひます。

▲初めて見たる東京▲地方で想像する東京▲東京に住んで居る人の見たる東京▲東京論▲何故に東京を愛するか▲東京生活の實際談▲何故に東京に出たいか▲東京と大阪又は京都の比較▲東京の未來を想ふ▲我家と東京との關係▲其外東京に關することなら何ても一切よし▲課題「東京」と原稿に書添えること▲賞品は例號の通り▲〆切りは本月二十日

脚本募集

▲時代物世話物何れにてもよろしく一幕物の脚本を募る▲選者は佐野天聲先生▲原稿は二十四字詰凡て振假名つきのこと▲投稿締切は五月三十日▲懸賞は正金にて一等五圓二等三圓

雑報

○和歌に就いて　從來和歌は新派和歌と普通の和歌に區別してありましたが、今後は其區別を設けず單に和歌として選者は隔月代りに以前の如く佐々木信綱氏、與謝野晶子夫人に擔任を願ふことにいたしました、投稿諸孃は豫め御承知を乞ふ。

○再び圖書の寸法に就いて　圖書の寸法も二寸と三寸に改めました、前より大きくなつたのです、是も御承知を乞ふ。

○卒業生寫眞　各女學校の卒業生寫眞は大抵集めて掲載いたしましたが、なほ洩れたる分は次號に掲げます。

○誌友寫眞　誌友寫眞も右卒業生寫眞挿入の爲め後れましたけれど次號よりは續々掲出いたしますから以前の如く相變らず諸孃の面影を御送り願ひたい、御入用のものは早速お返しいたします。

○脚本の締切　脚本の募集しめきりは本月限りてすから見落さないやうに。

懸賞品

（甲種）

▲壹等—金拾圓—賞金屬品
▲貳等—金參圓—呉服物
▲參等—金八拾錢—小間物
▲四等—金五拾錢—圖書切符
▲五等—金四拾錢—圖書切符

（乙種）

▲壹等—金五圓—絹張洋傘
▲貳等—金壹圓—帯止半襟
▲參等—金六拾錢—文房具
▲四等—金三拾錢—圖書切符
▲五等—金貳拾錢—圖書切符

▲各種の賞品は發表翌月上旬に贈呈する事

女子文壇

毎月一回一日發行　其外定期增刊（二、五、八、十一月十五日）臨時增刊（四月十月）四回發行　貳回發行（例號二倍）

定價

一冊（定期百頁册）	前金拾錢	郵税共計金拾壹錢
九冊（增刊トモ半ケ年分）	前金九拾五錢	同計金壹圓〇五錢
十八冊（增刊トモ一ケ年分）	前金壹圓八拾錢	同計金貳圓
六冊（增刊ナシ半ケ年分）	前金五拾七錢	同計金六拾三錢
十二冊（增刊ナシ一ケ年分）	前金壹圓〇八錢	同計金壹圓貳拾錢

〔備考〕
○定期及增刊は各拾錢郵税壹錢
○臨時增刊は貳拾錢郵税貳錢

振替貯金の拂込は登記料貳錢增額

郵便切手代用壹割增、收入印紙謝絕

女子文壇社の郵便振替貯金口座は——第壹七貳九番

明治四十一年五月十二日印刷
明治四十一年五月十五日發行

定價金拾錢

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十二番地　電話〔本局六〇七番〕　女子文壇社

特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

廣告料金

特等	上等	普通
一頁三十圓	一頁廿五圓	一頁廿三圓
半頁………	半頁十三圓	半頁十二圓
部數多く有効に比し無類の割安		一行四拾錢

〆切毎號十五日前

特約取扱　○神田　博報堂　○京橋　日本電報通信社　○京橋　明治廣告社

Digitized by Google　Original from HARVARD UNIVERSITY

文章速成の最新秘書

小説もあり文章もあり詩歌もあり文學一通りのものは揃つてゐます。皆之れ花の如き女子が大懸賞の應募熱心に作られたるもの二百餘頁に網羅す。眞に文章速成の最新良書といふべし

文壇の花

目次は次の如し

▲小説▲お伽噺▲美文▲論文▲日記文▲書簡文▲新體詩▲短文▲和歌▲俳句▲繪畫

附録

○瀬沼夏葉女史○田山花袋君○與謝野晶子女史○片山天弦君○高濱虚子君○三谷蘆華君○水野葉舟君○三木露風君○武島文學士○中村文學士○巖谷小波君○佐々木信綱君（以上短篇新作）

大好評

製本既成發賣

紙數菊判二百五十頁

定價金貳拾錢 低廉無比

郵税壹錢五厘

口繪

入賞作家肖像 寫眞版四頁

睡蓮（光澤紙刷） 光澤紙色刷

石版着色密刷

花苑 原色版密刷

出版元 東京市京橋區大鋸町十一 女子文壇社（振替口座壹七貳九番）

特約賣捌所 ○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂 其他取次販賣は全國到る處雜誌書店

（服部製本）

Digitized by Google Original from HARVARD UNIVERSITY

定期増刊 夏すがた

女子文壇（第四年第八號）

明治四十一年五月十五日増刊（毎月一回一日發行）

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】



●命の母は病婦の命なり

子宮病 陰部の痛みはげしく、白帯、赤帯を流し腰脊へかけて痛み、胃部不快を感じ、心悸亢進し、手足冷へ、身體やせ衰ろへ、流産半産又は不妊となり

血の道 頭痛、耳鳴、眩暈、呼吸促迫、動氣高ぶり四肢知覺脱失又は冷へ、しやくり、あくび、ひきつけ、下腹より胸先へさし込み痛み正氣を失ひ……

ヒステリー 少しの事を苦にし元氣よしと思へば、忽ち鬱ぎ悲しみ短氣になり、夜眠られず身體ところ〴〵痛み細弱となり、恰も其身は病の容物の如き感を覺ゆ……

腦神經 頭痛はげしく理解力鈍くなり、神經過敏となりて憂鬱症となり脊髄部に厭な疼痛の感がしたり又は交接を不好或は交接行ふとができぬ樣になる……

月經不順 つはり、産前、産後の逆上、めまひ、立ちぐらみ等凡て前記の如き婦人病を根本的全治せしめ子寶を擧げ健母とならしむ……

●命の母は子なき人の母なり

◉各國藥店にあり

命の母 藥價
試用分 十錢
二日分 廿五錢
一週間分 八十錢
二週間分 一圓五十錢
五週間分 三圓

加減命の母 藥價
五日分 八十錢
十日分 一圓五十錢
卅日分 三圓
二ケ月分 五圓

錠劑命の母 藥價
二日分 廿五錢
五日分 五十五錢
一週間分 七十五錢
二週間分 一圓卅五錢

本舗 東京市京橋區新榮町四丁目
電話新橋三六〇壹番《振替口座五〇五〇番》
笹岡省三藥房

女子文壇 無比廉價 金拾錢 郵税壹錢

（東京秀英舍印刷）

Digitized by Google
Original from HARVARD UNIVERSITY